

差出サ、ルトキハ
出願ヲ無効トス
第十一條 出願人登
録料ヲ納付シタルト
キハ特許局長ハ其納
付ノ日ヲ以テ意匠原
簿ニ登録シ其旨ヲ出
願人ニ通知シ十五日
以内ニ意匠登録證ヲ
送付スヘシ
第十二條 意匠登録
證ハ第八號書式ニ依
リ調製シ意匠原簿登
録ノ日ヲ以テ其日附
ト爲ス
意匠條例第十五條
又ハ第十六條ノ場

第二百四十二條ノ規定ニ從ヒ控訴期間内ニ追加裁判ヲ以テ判決ヲ
補充シタルトキハ控訴期間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對スル控訴ニ付
テモ追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル
第四百一條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス
此控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一 控訴セラルル判決ノ表示
第二 此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述
此他控訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且判
決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル
變更ヲ爲スコキヤノ申立ヲ掲ケ若シ新ニ主張セントスル事實及ヒ
證據アルトキ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ掲ク可シ

控訴狀
何府何市何町何番地族籍職業

合ニ於テ意匠登録
證ヲ下付スルトキ
ハ特許局長ハ其事
由並ニ下付ノ年月
日ヲ裏書シ之ニ署
名スヘシ
第十三條 出願人他
人ノ記名又ハ他人ト
連名ニテ意匠登録證
ヲ受ケント欲スルト
キハ意匠原簿登録ノ
日マテニ其旨ヲ申出
ツヘシ
第十四條 意匠條例
第十三條ニ依リ賣與
讓與、共有又ハ書入
ノ登録ヲ請求スルト

控訴人 何 (裁判所ヨリ八里以外ナルトキ) 距離何里
全 (裁判所ヨリ八里以外ナルトキ) 距離何里
被控訴人 何
何々事件ノ控訴
判決ノ表示
何々裁判所何部ニ於テ何年(何)第何號何々事件ニ付何年何月日何々
ト判決言渡アリ何年何月日該判決ノ送達ヲ受ケタリ
一定ノ申立
右判決ノ全部若クハ何々部分ヲ廢棄シ何々ト判決相成度候也
不服ノ程度及控訴ヲナス旨ノ陳述
右裁判所ハ何々ノ事實ヲ何々ト誤認シ(何々)ノ訴訟手續又ハ何々ノ
法則ニ違背シ何々ト判決シタルハ不當ナリ依テ控訴人ハ右何々ニ
付テハ服従スルヲ得サルヲ以テ控訴ニ及ヒ候也

要ノ場合ニ於テハ特許局長ハ官報並ニ特許公報ヲ以テ之ヲ廣告スヘシ

第十八條 意匠條例第七條物品類別ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一類 衣服

衣、裳、外套、襯衣、帶、領、領飾、領卷、肩掛等

第二類 頭飾、服飾、帽子

櫛、簪、根掛等○胸飾、腕環、指環、釦鈕等○各種ノ帽子

第三類 時計及其附屬品

袂時計、置時計、掛時計、鎖、下ケ物等

第四類 傘、杖及履物類

各種ノ傘、杖○下駄、草履、靴等

第五類 携帶品

烟具、扇、懷中物、手提等

第六類 家具

櫛、篋筒、机、椅子、卓子、寢臺等

第七類 敷物

段通、油團、花毡

第一章 控訴

朱書(右訴訟代理人) 何 某
何々控訴事件ノ答辯 一定ノ申立

控訴人ノ申立ハ其理由ナキヲ以テ控訴棄却相成度候也
新事實 朱書(新ニ主張スル事實アルル)

一何々 新證據方法 朱書(新ニ提出スル證據方法アルル)

一何々 附屬書類表示 朱書(附帶控訴ヲ提起スル中ハ控訴狀ノ例ニ準ス)

一控訴代理ノ委任狀 一法律上代理受權ノ證

一證據ノ謄本若クハ抄本 朱書(但シ本項控訴ニ至リ法律上代理受權アリタル場合)

年月日 何 通
右被控訴人 何 某
若クハ其代理人 何 某
何々控訴院 判事 何 某 股

第四百五條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

調席判決ニ對シ附帶控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトニ付テハ第三百九十八條ノ規定ニ從フ

第四百六條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其效力ヲ失フ

第一 控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルトキ

第二 控訴ノ取下ケタルトキ

然レトモ被控訴人カ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ爲シタルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第四百七條 答辯書ニ新ナル事實若クハ證據方法ヲ掲ケ又ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキハ之ヲ控訴人ニ送達ス可シ

第四百八條 右ノ外訴控ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限

其他各種ノ敷物

第八類 煖爐及其

附屬品

火鉢、煖爐、烟草

盆、炭取、石炭

入、火箸等

第九類 點燈器

行燈、燭臺、手

燭、燈籠、ラン

プ、瓦斯燈、電氣

燈等

第十類 建築附屬

品

障、戸、扉、柵、欄

間、欄干等

第十一類 織物及

他類ニ屬セサル

織物製品

絹、綿、麻、毛等

等各種ノ織物〇

服紗、手巾、窓

掛、卓被等

第十二類 他類ニ

屬セサル編物、組

物

レース、打紐、飾

縁等

第十三類 他類ニ

屬セサル漆器(假

漆塗、油漆塗等モ

之ニ屬ス)

飲食器、手箱、香

合等

第十四類 他類ニ

第一卷 第三

ニ在ラス

第四百九條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ其兩控訴ニ付

キ辯論及裁判ヲ同時ニ爲スヲ以テ通例トス

第四百十條 口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間ノ未タ經

過セサルトキハ其申立ニ因リ期間ノ滿了マテ之ヲ延期ス

闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障ヲ申立

テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ控訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ

故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期ス

第四百十一條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ定マリ

タル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス

第四百十二條 當事者ハ其控訴ノ申立及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁

判ノ當否ヲ明瞭ナラシムル爲メ必要ナル限リハ口頭辯論ノ際第一

審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述ス可シ

演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ

補充ヲ爲サシメ又必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開シテ之ヲ爲サ

シム可シ

第四百十三條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルトキト雖モ之ヲ許サス

第四百十四條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査不可カラサルモノニシ

テ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハ

サリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ主張スルコトヲ得

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判

所ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ

得

第四百十五條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セラレシ攻撃防禦ノ方法

殊ニ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

第四百十六條 新ナル請求ハ第九十六條第二號及ヒ第三號ノ場合

ニ在ラス

第四百十七條 控訴ノ提起ハ第一審ノ判決ニ對シ

不服ヲ有スルニ限リ之ヲ爲ス可シ

第四百十八條 控訴ノ提起ハ第一審ノ判決ニ對シ

不服ヲ有スルニ限リ之ヲ爲ス可シ

第四百十九條 控訴ノ提起ハ第一審ノ判決ニ對シ

不服ヲ有スルニ限リ之ヲ爲ス可シ

屬セサル陶器(煉
化石、瓦等モ之ニ
屬ス)

飲食器、花瓶、香
爐等

第十五類 他類ニ
屬セサル玻璃

飲食器、紋様玻
璃等

第十六類 他類ニ
屬セサル七寶

花瓶、香爐、手
箱、香合等

第十七類 他類ニ
屬セサル金屬製

品
貴金屬、賤金屬

又ハ相殺スルコトヲ得ヘキモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失
ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ
限り之ヲ起スコトヲ得

第四百十七條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲ササリシ陳述又
ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ第二審ニ於テ
モ亦其効力ヲ有ス

第四百十九條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否ヤ又控訴ヲ法律上
ノ方式ニ從ヒ若シハ其期間ニ於テ起シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調
査ス可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ不適法ト
シテ棄却ス可シ

第四百二十條 第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ變
更スルコトヲ得

及合金ノ各種製
品

第十八類 他類ニ
屬セサル石材製

品

寶石其他石類ノ
各種製品

第十九類 他類ニ
屬セサル木、竹、

牙、角類製品

盆、箱、花臺、籠、
籠、籠、柱聯、茶

托、箸、硯屏、墨
臺、筆筒等

第二十類 紙及他
類ニ屬セサル紙
製品

第四百二十一條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ關スル

總テノ争點ニシテ申立ニ從ヒ辯論及ヒ裁判ヲ必要トスルモノハ第
一審ニ於テ此争點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ササルトキト雖モ控訴
裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲ス

第四百二十二條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ尙ホ辯論

ヲ必要トスルトキハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第一 不服ヲ申立テラレタル判決カ關席判決ナルトキ

第二 不服ヲ申立テラレタル判決カ關席判決ニ對スル故障ヲ不

適法トシテ棄却シタルモノナルトキ

第三 不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ抗辯ノミニ付キ裁判

ヲ爲シタルモノナルトキ

第四 請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ争アル場合ニ於テ不服ヲ申
立テラレタル判決カ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナ

紋紙、擬草紙、襖紙、壁紙、表紙、色紙、短冊、紙箋等

○書簡筒、文匣、一開張等

第二十一類 皮革及他類ニ屬セサル皮革製品

各種ノ紋革 ○文匣、馬具等

第二十二類 他類ニ屬セサル物品

第十九條 特許條例施行細則第四十四條 第四十五條 第四十六條 第四十七條 第四十八條

ルトキ

第五 不服ヲ申立テラレタル判決カ證書訴訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ控訴ノ被告ニ別訴訟ヲ以テ追行ヲ爲ス權ヲ留保シタルモノナルトキ

第四百二十三條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得

第四百二十四條 控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡スコシ

第四百二十五條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百二十六條 第二百十條ノ規定ニ從ヒテ防禦ノ方法ヲ却下スル

八條 第四十九條 及 第五十條ハ此細則ニモ之ヲ適用ス

式(書式略ス)

農商務省令第三號 商標條例施行細則ヲ定ムルコト別冊ノ如シ

但明治十七年六月太政官第十三號布達商標登錄願手續ハ明治二十二年二月一日ヨリ廢止ス

明治廿二年一月四日 農商務大臣 伯爵 井上馨 農商務省令

トキハ其防禦ノ方法ヲ主張スル權ハ之ヲ被告ニ留保スコシ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ從ヒテ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及強制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス

第四百二十七條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ訴訟ハ第二審ニ繫屬ス

爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルトキハ前判決ヲ廢棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還スコキコトヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲スコシ

第四百二十八條 控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルトキハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ闕席裁判ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡スコシ

第三號別冊

商標條例施行細則

第一條 商標條例ニ依リ差出ス願書ハ第一號ヨリ第五號ニ至ル書式ニ從ヒ之ヲ認メ同條例第十七條ノ手數料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用スハシ

第二條 明細書ニハ明細書文例ニ準シ商標ノ見本一箇ヲ掲ケ左ノ諸件ヲ記載シテ別ニ商標ノ見本一箇ヲ添フヘシ

一 商標全部構造

第四百二十九條 被控訴人口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ闕席判決ノ申立ヲ爲ストキハ第一審裁判ノ憑據ト爲リタルモノニ牴觸セサル控訴人ノ事實上ノ供述ハ被控訴人之チ自白シタルモノト看做シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辯駁スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノト看做シ闕席判決ヲ爲ス

第四百三十條 判決中ノ事實摘示ニ付テハ前審ノ判決ヲ引用スルコトヲ得

第四百三十一條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記録ノ送付ヲ求ム可シ

控訴完結ノ後其記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ之ヲ返還ス可シ

第二章 上告

ノ詳細説明

二 商標ノ要部

三 商標ヲ使用スル商品ノ類別及名稱

四 商標使用ノ方法

第三條 商標登録願書ハ其商標ヲ使用スルヘキ商品類別一類毎ニ各別ニ差出スルニシテ

第四條 商標登録願書明細書及見本ヲ受理シタルトキハ特許局長ハ出願人ニ領收書ヲ送付シ願書ノ日附ヨリ三十日ヲ經タ

第四百三十二條 上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス

第四百三十三條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦上告裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第四百三十四條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第四百三十六條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一 規定ニ從ヒ裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事力裁判ニ

ル後願書日附ノ順ニ
從ヒ審査官ヲシテ其
審査ニ着手セシムルハ
第五條 商標條例第
十六條ニ依リ商標登
録證ノ改訂ヲ願出ル
トキ其事由ヲ記載
シタル願書ニ改訂明
細書一通若シハ見本
二箇及現商標登録證
並ニ附屬ノ明細書ト
共ニ差出スヘシ
前項ノ出願ヲ特許
スルトキハ特許局
長ハ此細則第九條
及第十條ノ手續ニ

參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主
張シタルモ其効ナカリシトキハ此限ニ在ラス
第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ
拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ
第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ
第五 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理
セラレサリシトキ
第六 訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯論ニ基
キ裁判ヲ爲シタルトキ
第七 裁判ニ理由ヲ付セザルトキ
第四百二十七條 上告期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判
決ノ送達ヲ以テ始マル
判決ノ送達ニ提起シタル上告ハ無効トス

依リ改訂商標登録
證ヲ送付スヘシ
第六條 審査官ニ於
テ願書明細書見本等
ニ不完全ノ廉アリト
認メタルトキハ特許局
長ハ其旨ヲ出願人ニ
通知シ通知書ノ日附
ヨリ六十日以内ニ訂
正書又ハ訂正見本ヲ
差出サシムルハ此期
限内ニ差出サルト
キハ出願ヲ無効トス
第七條 出願人其出
願中ニ係ル願書明細
書見本等ニ過誤アル
トテ發見シタルトキ

第四百二十八條 上告ノ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ
爲ス
此上告狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一 上告セラレル判決ノ表示
第二 此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述
此他上告狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り特ニ
判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナ
ル程度ニ於テ破毀ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ且法則ヲ適用セス若
クハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其法則ノ表
示又ハ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トス
ルトキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示又ハ法律ニ違背シテ事實
ヲ確定シ若クハ遺脱シ若クハ提出シタリト看做シタルコトヲ上告
ノ理由トスルトキハ其事實ノ表示ヲ掲ク可シ

ハ商標ノ要部ニ變更
ヲ生ゼサルモノニ限
リ其訂正ヲ請求スル
コトヲ得但査定書若シ
ハ登録通知書ヲ發シ
タル後及審判中ニ係
ルモノ、訂正ハ特許
局ニ於テ必要ト認メ
タルモノ、外之ヲ許
サズ

第八條 再審査及審
判ニ關スル事項ハ總
テ特許條例施行細則
ヲ適用ス

第九條 商標ノ登録
ヲ許可スルトキハ特
許局長ハ登録料納付

上告狀

何府何市何町何番地族籍職業
上告人(被告人)
何府何市何町何番地族籍職業
被告(被告人)
何府何市何町何番地族籍職業
右訴訟代理人
何府何市何町何番地族籍職業
何府何市何町何番地族籍職業
被告(原告)
何府何市何町何番地族籍職業
被告(原告)
法律上ノ代理人アルトキハ其氏名身分職業住所及ヒ資
格ヲ記載スヘシ
格ヲ記載スヘシ

判決ノ表示
何年何月何日某控訴院何年何号第何部ニ於テ言渡サレタル判決
一定ノ申立
右判決ノ全部(又ハ何々ノ一部)ニ付キ不服ナルニヨリ其全部(又ハ其
一部)ヲ破毀セラレンコトヲ請求ス

理由

用紙ヲ添ヘテ登録通
知書ヲ出願人ニ送付
スヘシ

出願人前項ノ通知
書ヲ受ケタルトキ
ハ登録料納付用紙
ニ商標條例第十八
條ノ登録金額ニ相
當スル登記印紙ヲ
貼用シ明細書一通
見本一箇及商標ノ
印版ヲ添ヘ通知書
ノ日附ヨリ九十日
以内ニ差出スヘシ
此期限内ニ差出サ
ズルトキハ出願ヲ
無効トス

第一點 云々例ハハ原裁判所カ何々ト判決シタルハ何々ノ法則ヲ
適用セス若クハ不當ニ適用モシ違法ノ判決ナリ

第二點 云々例ハハ原判決中何々ハ民事訴訟法第何條ノ規定ニ違
背シタル違法ノ判決ナリ

第三點 云々例ハハ原判決中何々ハ何々ハ法律ニ違背シテ事實ヲ
確定シ若シクハ遺脱シ若シクハ提出シタルトシテ看做シタル違法ノ
判決ナリ

右及上告候也

年月日 右 上告人若クハ
其訴訟代理人
何々院民事部御中

附屬書類
一訴訟代理人ノ委任狀
一法律上代理受權ノ証 後見人タルノ
證明書ノ類
(但シ本項ハ上告ニ至リ法律上代理ニ變更アリタル場合)
以上

第四百三十九條 上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ

第十條 出願人登録料納付シタルトキハ特許局長ハ其納付ノ日ヲ以テ商標原簿ニ登録シ其旨ヲ出願人ニ通知シ十五日以内ニ商標登録證ヲ送付スヘシ

第十一條 商標登録證ハ第六號書式ニ依リ調製シ商標原簿登録ノ日ヲ以テ其日附トス

商標條例第十五條又ハ第十六條ノ場合ニ於テ商標登録證ヲ下付スルトキ

許シ可カラサルモノナルトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起ササルトキ又ハ第四百三十四條ノ規定ニ依ラサルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セサルトキハ上告ヲ取下ケタルモノト看做ス但出頭セサリシコトヲ期日ヨリ七日ノ期間内ニ十分ナル理由ヲ以テ辯解シタルトキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四十一條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且一定ノ申立ヲ掲ク可シ

答辯書

ハ特許局長ハ其事由並ニ下付ノ年月日ヲ裏書シ之ニ署名スヘシ

第十二條 商標條例第十四條ニ依リ賣與讓與又ハ共有ノ登録ヲ請求スルトキハ第七號書式ニ從ヒテ請求書ヲ認メ同條例第十七條ノ手数料金額ニ相當スル登記印紙ヲ貼用シ約定書ヲ添ヘテ差出スヘシ

前項ノ請求アルトキハ特許局長ハ其約定書ヲ契約原簿

上告人 何府市何町何番地族籍職業 何 某

法律上ノ代理人アルトキハ其氏名身分職業住所及ヒ資格ヲ記載ス可シ

右訴訟代理人 何府市何町何番地族籍職業 何 某

被告 何府市何町何番地族籍職業 何 某

法律上ノ代理人アルトキハ其氏名身分職業住所及ヒ資格ヲ記載スヘシ

右訴訟代理人 何府市何町何番地族籍職業 何 某

第一點 原裁判所カ何々ト判決シタルハ何々ノ法則ヲ適用セス若クハ不當ニ適用セシ違法ノ判決ニ非ス

一本件上告ハ之ヲ棄却セラレシコトヲ請求ス

ニ登録シ約定書ニ
登録済ノ證印ヲ捺
シテ之ヲ請求人ニ
送付スヘシ

第十三條 商標專用
權ヲ相續シタルトキ
又ハ登録商標主氏名
ヲ變換シ若クハ其商
標ノ使用ヲ廢止シタ
ルトキハ三十日以内
ニ其旨ヲ届出ツヘシ
第十四條 商標ノ登
録又ハ商標登録證ノ
改訂ヲ許可シタルト
キ又ハ商標ノ登録ヲ
無効トシタルトキ其
他登録商標ニ關シ必

第二點 原判決中何々ハ民事訴訟法第何條ノ規定ニ違背シタル違
法ノ判決ニ非ス

第三點 原判決中何々ハ何々ノ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ若ク
ハ遺脱シ若クハ提出シタルト看做シタル違法ノ判決ニ非ス
(附帶上告ヲナストキハ上告書式ノ例ニ依リ其理由ヲ記載スヘシ)

年月日

右被上告人若クハ
其ノ訴訟代理人

何

栗印

何々院民事部御中

附屬書類

一訴訟代理ノ委任狀

一法律上代理受權ノ證後見人タルノ
證明書ノ類

以上

第四百四十二條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲スニ付テ得
此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用ス

第四百四十三條 答辯書ニ附帶上告ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキ
ハ之ヲ上告人ニ送達ス可シ

第四百四十四條 右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ
訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ
此限ニ在ラス

第四百四十五條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シタル申立ノミニ付キ調
査ヲ爲ス

第四百四十六條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所カ其裁
判ノ憑據トシタル事實ヲ標準トス此事實ノ外ハ第四百三十八條第
三項ニ掲ケタル事實ニ限り之ヲ斟酌スルコトヲ得
證據調ヲ必要トスルトキハ上告裁判所ハ之ヲ命ス可シ

第四百四十七條 上告ヲ理由アリトスルトキハ不服ヲ申立テラレタ
ル判決ヲ破毀ス可シ

訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スルトキハ
其違背シタル部分ニ限り訴訟手續ヲモ亦破毀ス可シ

要ノ場合ニ於テハ特
許局長ハ官報並ニ商
標公報ヲ以テ廣告ス
ヘシ

第十五條 特許局ニ
差出シタル商標ノ印
版不用ニ屬シタルト
キハ特許局長ハ其請
取方差出人ニ通知ス
ヘシ差出人其通知書
ノ日附ヨリ九十日以
内ニ請取方ヲ爲サ
ルトキハ特許局長ニ
於テ適宜處分スヘシ
キモノトス

第十六條 商標條例

第十七條 商品類別ヲ

定ムルコト左ノ如シ

第一類 化學品及藥劑

酸類、鹽類、アルカリ、漂白粉、護膜膠、磷、石鹼、酒精、グリセリン、キナエン、モルヒネ、丁幾劑、舍利別、煎劑、丸藥、膏藥、藥油、麝香、丁子、食鹽、石灰、艾等

第二類 染料及顏料

藍玉、藍靛、紫根、紅、朱、丹、綠

第三類 塗料

漆、假漆、油漆、澱、靴墨等

第三類 香料及燻料

香油、髮膏、香袋、香水、炷香、線香、煉香等

第五類 金屬及其半加工品

銑鐵、鍛鐵、鋼、鐵、條鐵、鐵葉、鉄板、鉄線、銅、銅板、銅線、鉛

第四百四十八條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百五十一條ノ規定ヲ除外更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移送ス可シ
事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲スコトヲ要ス

第四百四十九條 當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケル口頭辯論ニ際シ提出スル權利アリ
第四百五十條 事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上告裁判所ノ爲シタル法律ニ係ル判斷ニシテ判決ヲ破毀スル基本ト爲シタルモノヲ以テ新ナル辯論及裁判ヲ基本ト爲ス義務アリ
第四百五十一條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ
第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタ

ル爲ニ判決ヲ破毀シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

第二 無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲ニ判決ヲ破毀ス

第四百五十二條 上告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ

第四百五十三條 裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違背シタルトキト雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナルトキハ上告ヲ棄却ス可シ

第四百五十四條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第一 開席判決ニ對スル不服ノ申立

第二 控訴ノ取下

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障トチ同時ニ爲シタルトキノ訴訟手續

第四 口頭辯論ノ延期

第五 口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述

- 鉛板、亜鉛、亜鉛板、錫、合金等
- 第六類 金屬ノ製品
- 鑄物、打物、彫鏤品及編物等
- 第七類 利器及尖刃器
- 鎌、鋸、鑿、錐、鑿、針、釘、前刀、小刀、剃刀、庖丁、鷹嘴等
- 第八類 貴金屬及其製品(アルミニウム、金、ニッケル、銀ノ製品モ之ニ屬ス)

第六 妨訴ノ抗辯ニ付テノ辯論

第七 控訴ヲ起シタル者ノ不利益ト爲ル裁判ヲ爲ス可カラサルコト

第八 記録ノ送付並ニ返還

第三章 抗告

第四百五十五條 抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判ニ對シ其他此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十六條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルトキニ非サレハ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百五十七條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス

- 黃金、銀、四分一、紫銅其他貴金屬ノ合金鏤品、彫鏤品、モール等
- 第九類 珠玉及其彫鏤品
- 珊瑚珠、眞珠、瑪瑙、水晶、黃玉、碧玉等及其模造品
- 第十類 礦物類(但石炭ハ第五十一類ニ屬ス)
- 第十一類 石材及其製品並彫鏤品
- 版石、大理石、砥

訴訟カ區裁判所ニ際屬シ若クハ管テ繫屬シタルトキ又ハ證人、鑑定人ヨリ若クハ證書ヲ提出スル義務アリト宣言ヲ受ケタル第三者ヨリ抗告ヲ爲ストキハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

抗告狀

何府何市何町何村何番地族籍職業
何 某

右訴訟代理人
全辯護士 何 某

何々裁判所民事第何部何年何月何日何々ニ付何々ト決定シタルハ何々ノ理由ニ依リ不當ナルヲ以テ抗告ニ及候也

一 裁判書ノ送達 何年何月何日

(民事訴訟法第三百五十三條第六百八十條及七百六十九條第三項ノ場合ニ於テハ言渡ノ年月日ヲ掲ケハシ)

(裁判長若クハ受命判事ノ命令ニ對スル抗告狀ハ右ニ準ス)

一 距離 (抗告人ノ住所ヨリ抗告裁判所迄) 何里

四 屬書類ノ表示

石、石器等及其
模造品

第十二類 漆喰類
漆喰、セメント、
石膏等

第十三類 陶磁器
類

諸種ノ陶磁器、
土器、珫瑁、瓦、
煉化石等

第十四類 七寶燒
煉化石等

第十五類 玻璃及
其製品

玻璃壘、玻璃管、
彩色玻璃等

第十六類 機械類
紡績機、裁縫機、

製糖機、印刷機
其他諸製造機械
漁機、漁罐等

第十七類 農工器
具

犁、鋤、鍬、唐箕、
耙、釘拔、鐵槌、
墨繩等

第十八類 學術上
ノ器械

理化學、醫術及
測量等ノ器械

第十九類 度量、
權衡、

第二十類 運送用
ノ車類

荷車、馬車、人力

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

一 訴訟代理委任狀

一 法律上代理受權ノ證 (後見人タルノ證明書又ハ社長タルノ證明書)

年月日

右(抗告人若クハ其訴訟代理人)

何

某印

何々院民事部御中

第四百五十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ憑據ト爲スコトヲ得

第四百五十九條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ヲ示トスルトキハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テハ訴訟記録ヲモ送付ス可シ

第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限リ執行停止ノ効力ヲ有ス

然レトモ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁判アルマテ其執行ノ中止ヲ命ズルコトヲ得

抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ執行中止ヲ命ズルコトヲ得

第四百六十一條 抗告ニ急迫ナル場合ニ限リ直チニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及ヒ記録ヲ要求スルコトヲ得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルトキハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ以テ通例トス

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

第三卷 抗告

- 車、自轉車等
- 第二十一類 樂器
琴、三味線、胡弓、笛等
- 第二十二類 時計及其附屬品
- 第二十三類 鐵砲、彈丸、火藥、烟火等
- 第二十四類 蠶種紙、繭
- 第二十五類 真綿、及木棉綿
- 第二十六類 生絲絹絲及天蠶絲(琴絲、金絲、銀絲モ之ニ屬ス)

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムルコトヲ得
陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ口頭辯論ノ爲ニ當事者ヲ呼出スコトヲ得
第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ不合法トシテ棄却ス可シ
第四百六十四條 抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルトキハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得

- 第二十七類 綿絲
- 第二十八類 毛絲
- 第二十九類 麻絲
- 第三十類 絹織物
- 第三十一類 木綿織物
- 第三十二類 毛織物
- 第三十三類 麻織物
- 第三十四類 絹、綿、麻、毛、外ノ織物及各種ノ交織物
- 第三十五類 絲類ノ編物及組物
- レース、打紐、網

抗告裁判所ノ裁判ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ之ヲ通知ス可シ

第四百六十五條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルニハ先ツ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ
抗告ハ受訴裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一項ノ規定ハ大審院ニモ亦之ヲ適用ス
第四百六十六條 即時抗告ノ場合ニ於テハ左ノ特別ノ規定ニ從フ
抗告ハ七日ノ不變期間内ニ之ヲ爲スコシ其期間ハ裁判ノ送達ヨリ始マリ第三百五十三條、第六百八十條及ヒ第七百六十九條第三項ノ場合ニ於テハ裁判ノ言渡ヨリ始マル抗告裁判所ニ抗告ヲ提出シタルトキハ急迫ナラント認メタル場合ニ於テモ亦不變期間ヲ保存ス再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルトキハ不變期間ノ滿了後ト雖モ此訴ノ爲メ定メタル期間内ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

- 等
- 第三十六類 被服
諸種ノ衣服、織物製帽子、手套、足袋、織物製雨衣、袴、目利安等
- 第三十七類 釀造物及飲料
諸種ノ酒、酢、醬油、密柑水、曹達水、氷等
- 第三十八類 砂糖類
- 諸種ノ砂糖、糖密、蜂蜜等
- 第三十九類 菓子及麵包類

前條第一項ノ場合ニ於テ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不變期間内ニ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ要ス受訴裁判所ハ其申請ヲ正當ト認メザルトキハ之ヲ抗告裁判所ニ送付ス可シ

第四編 再審

第四百六十七條 確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ハ取消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ再審スルコトヲ得

當事者ノ一方又ハ雙方ヨリ此兩訴ヲ起シタルトキハ原狀回復ノ訴ニ付テハ辯論及ヒ裁判ハ取消ノ訴ニ付テハ裁判カ確定スルマテ之ヲ中止ス可シ

第四百六十八條 左ノ場合ニ於テハ取消ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ

- 干菓子、蒸菓子、掛ゲ物、西洋菓子、餡、砂糖漬等
- 第四十類 茶及咖啡類
- 第四十一類 烟草類
- 第四十二類 穀、菜、種子及菓物類
- 五穀、蔬菜、草、菓實、種子、根、球、麴種モヤシ等
- 第四十三類 挽粉、澱粉、及其製品
- 諸種ノ挽粉、澱粉、麴類、湯液、

參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認メラレタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタリシトキ

第四 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシトキ

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシトキハ取消ノ訴ヲ許サス

第四百六十九條 左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 刑法ニ掲ゲタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴訟ニ關シ犯シタル判事カ裁判ニ參與シタリシトキ

第二 原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人又ハ相

- 茄蒟、凍豆腐、凍茄蒟等
- 第四十四類 味噌、膏物及漬物類
- 第四十五類 貯藏食品
- 鯉節、鰯乾鮑、海苔、昆布、佃煮、罐詰、雲丹、諸種ノ鹹製品等
- 第四十六類 牛乳製品
- 凝乳、乳油、乳餅、乳粉等
- 第四十七類 烟具及袋物
- 諸種ノ煙管、烟

手方若クハ其法律上代理人若クハ訴訟代理人カ罰セラル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシトキ

第三 判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシトキ

第四 證人若クハ鑑定人カ供述ニ因リ又ハ通事カ判決ノ憑據ト爲リタル通譯ニ因リ偽證ノ罪ヲ犯シタリシトキ

第五 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタリシトキ

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テノ判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決カ不服ヲ申立テラレタル判決ト抵觸スルトキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スルコトヲ得サリシ證書ニシテ原告若クハ被告ノ利益ト爲ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キモノヲ發見シタルトキ

- 袋、烟管筒、懷中物等
- 第四十八類 紙及其製品
- 諸種ノ紙、色紙、短冊、擬革紙、壁紙、油紙、滌紙、書簡筒、張文匣、一閑張、元結等
- 第四十九類 筆、墨類
- 筆、墨、朱墨、印肉、墨汁、石筆、鉛筆、ペン等
- 第五十類 皮革及其製品
- 馬具、革包、文

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行爲ニ付テ判決ヲ確定ト爲リタルトキ又ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキニ限り再審ヲ求ムルコトヲ得

第四百七十條 原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被告カ自己ノ過失ニ非スシテ前訴訟手續ニ於テ殊ニ故障又ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百七十一條 不服ヲ申立テラレタル判決前ニ同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ再審ヲ求ムル訴ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルトキニ限ル

第四百七十二條 再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス

- 匣、革帶、靴、唐弓弦等
- 第五十一類 燃料類
- 諸種ノ炭、附木、摺附木、燈心等
- 第五十二類 油蠟類
- 諸種ノ油、蠟、燭、脂肪等
- 第五十三類 肥料類
- 干鰯、鮮粕、油粕、骨粉等
- 第五十四類 木竹材類
- 第五十五類 木、竹、藤製品及其漆塗、蒔繪品類
- 指物、挽物、曲物、桶類、編物、組物等
- 第五十六類 角、甲、牙類ノ製品
- 第五十七類 藁及草ノ製品
- 蠶表、苴、編笠、細、麥藁細工等
- 第五十八類 傘、杖及履物
- 諸種ノ傘、杖、下駄、草履、鼻緒等
- 第五十九類 扇子及團扇
- 第六十類 提燈及

同一ノ事件ニ付一分ハ下級ノ裁判所又一分ハ上級ノ裁判所ニ於テ爲シタル數箇ノ判決ニ對スル訴ハ上級ノ裁判所ノ管轄ニ專屬スルヲ督促手續ニ依リテ區裁判所ノ發シタル執行命令ニ對シ再審ヲ求ムル訴ハ其命令ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レトモ其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ請求ニ付テノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス

第四百七十三條 訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續ニハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ其訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百七十四條 訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可キ此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告若クハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタル日ハ判決ノ確定ヲ以テ始マル

- 塗、蒔繪品類
- 指物、挽物、曲物、桶類、編物、組物等
- 第五十六類 角、甲、牙類ノ製品
- 第五十七類 藁及草ノ製品
- 蠶表、苴、編笠、細、麥藁細工等
- 第五十八類 傘、杖及履物
- 諸種ノ傘、杖、下駄、草履、鼻緒等
- 第五十九類 扇子及團扇
- 第六十類 提燈及

判決確定ノ日ヨリ起算シテ五午ノ滿了後ハ訴ヲ爲スコトヲ得ス前二項ノ規定ハ第四百六十八條第四號ノ場合ニ之ヲ適用セス此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期間ハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人カ送達ニ因リ判決アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第四百七十五條 訴狀ニハ左ノ調件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ受クル判決ノ表示

第二 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且不服ノ理由ノ表示此理由及ヒ不變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付テノ證據方法又如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ廢棄若クハ破毀ス可キヤノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ク可シ

何々請求事件取消原狀回復ノ訴

ス
 第二條 執達吏ハ當事者ノ委任ニ依リ左ノ事務ヲ取扱フコトヲ得
 第一 告知及ヒ催告ヲ爲スコト
 第二 動産不動産ノ注意競買ヲ爲スコト
 第三 拒證書ヲ作ルコト
 第三條 執達吏ハ法律規則ニ定メタル職務ノ外裁判所及檢察局ノ命令ニ依リ其職務ニ應スル事務殊ニ

第四百七十九條 本案ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ不服申立ノ理由ノ存スル部分ニ限り更ニ之ヲ爲スコトヲ得
 裁判所ハ本案ニ付テノ辯論前ニ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辯論ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付テノ辯論ノ續行ト看做ス
 第四百八十條 原告シテ不利益ト爲ル判決ヲ變更シ相手方ヲ再審ヲ求ムル訴ヲ起シテ變更ヲ申立テタルトキニ非サレバ之ヲ爲スコトヲ得ス
 第四百八十一條 訴カ上告裁判所ニ屬スルトキハ上告裁判所ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ其許否ニ付テノ辯論ノ完結カ係争事實ヲ確定及ヒ斟酌ニ繫ルトキト雖モ其完結ヲ爲スコトヲ得
 第四百八十二條 上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シタル裁判所ノ判決ニ對シ一般ニ爲スコトヲ得ヘキトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

左ノ事務ヲ取扱フノ義務アリ

第一 書類物品ノ送付ヲ爲スコト
 第二 罰金科料過料ヲ徴收シ及沒收物品ヲ取上ケ若シハ賣却スルコト
 第三 命狀ノ執行ヲ爲スコト
 第四條 執達吏ハ所屬區裁判所ノ一人ノ判事若シハ監督判事ノ監督ヲ受ク
 他ノ判事又ハ檢察官ニシテ職務上事務ヲ命シタルハ其事務ニ

第四百八十三條 第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ第三者ノ債權

ヲ詐害スル目的ヲ以テ判決ヲ爲サシメタリト主張シ其判決ニ對シ不服ヲ申立ツルハ原告回復ノ訴ニ因レル再審ノ規定ヲ準用ス
 此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト爲ス

第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百八十四條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若シハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ハ其請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルコトヲ得ヘキトキハ證書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得

本編ノ訴訟狀ノ文例ハ第九十條ニ從ヒテ作リ其訴訟中ニ證書若クハ爲替ノ二字ヲ挿入スルニ足ル故ニ茲ニ之ノ例ヲ掲ケサルナリ

第四百八十五條 訴狀ニハ證書訴訟トシテ訴ラレ旨ヲ陳述ヲ掲ケ且證書ノ原本又ハ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

限り執達吏ニ對シ監督權ヲ有ス

第五條 執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ

住居ヲ定ム可シ但地方裁判所長ノ許可ヲ

得タルトキハ其區裁判所管内ニ限り他ノ

地ニ住居ヲ定ムルコトヲ得

第六條 執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ

役場ヲ設ク可シ

第七條 一區裁判所ニ於テ數名ノ執達吏

アルトキハ裁判所及檢事局ノ命令ニ依ル

第四百八十六條 本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得

ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此抗辯ニ付キ辯論ノ分離ヲ命スルコトヲ得

第四百八十七條 反訴ハ之ヲ爲スコトヲ得ス

證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關シテハ書證ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スコトヲ得

書證ノ申出ハ證書ノ提出ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十八條 原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ要セスシテ通常ノ手續ニテ訴訟ヲ繫屬セシメテ證書訴訟ヲ止ムルコトヲ得

第四百八十九條 訴ヲ以テ主張シタル請求カ理由ナシト見エ又ハ被告ノ抗辯ニ因リ理由ナシト見ユルキハ原告ノ請求ヲ却下ス可シ

證書訴訟ヲ許ス可カラサルトキ殊ニ適法ノ證據方法ヲ以テ原告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケタル場合ニ於テハ被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許ササル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルトキト雖モ此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十條 證書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法ヲ以テ被告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケタルトキハ被告ノ異議ハ證書訴訟ニ於テ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十一條 主張シタル請求ヲ争ヒタル被告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル總テノ場合ニ於テ其權利ノ行使ヲ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケタルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ之ヲ終局判決ト看做ス

事務ト裁判所書記ヲ經テ委任スヘキ事務トシテ各執達吏ニ分配スヘシ此分配ハ成ルヘク土地ノ區域ニ從フ可シ

事務分配ハ毎司法年度ノ終リニ於テ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事前以テ之ヲ定ム

執達吏ノ爲シタル事務ハ事務分配上其事務他ノ執達吏ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其効力ヲ失フコトナシ

第八條 執達吏ハ左ノ場合ニ於テハ其職務ノ施行ヨリ除斥セラルルコトヲ得

第一 自己又ハ其親族カ當事者若シハ被害者タルトキ又ハ當事者ノ一方若シハ双方又ハ被害者ト共同權利者共同義務者若シハ償還義務者タルノ關係ヲ有スルトキ
第二 自己又ハ其親族カ當事者ノ一方若シハ双方又ハ被害者又ハ其配偶者

第四百九十二條 被告ニ權利ノ行使ヲ留保シタルトキハ訴訟ハ通常ノ訴訟手續ニ於テ繫屬ス

此手續ニ於テ證書訴訟ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトヲ顯ハルルニキテ前判決ヲ廢棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且其生ゼシメタル費用ノ全部又ハ一分ノ辯濟ヲ原告ニ言渡シ又前判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ

右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ闕席判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百九十三條 第四百二十六條及ヒ第四百二十七條ノ規定ハ證書訴訟ニ之ヲ適用セス

第四百九十四條 商法ニ規定シタル手形ニ因ル請求ヲ證書訴訟ヲ以テ主張スルトキハ爲替訴訟トシテ以下二條ニ掲クル特別ノ規定ヲ準用ス

適用ス

第四百九十五條 爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヲ受ク可キトキハ支拂地ノ裁判所又ハ被告ノ各人カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所各之ヲ管轄ス

第四百九十六條 訴狀ニハ爲替訴訟トシテ訴フル旨ヲ掲グルコトヲ要ス

訴ノ許ス可キモノナルトキハ直ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ其口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニハ少ナクモ二十四時ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第六編 強制執行
第一章 總則

第四百九十七條 強制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付

本親族ナルトキ
第三 自己カ同一ノ事件ニ付証人若クハ鑑定人ト爲リ其審問ヲ受クルトシキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルトキ若クハ其親族ニ有シタルトキ
第九條 執達吏ハ民事訴訟ニ付テ其婦又ハ自己若クハ其婦ノ親族ノ爲メニ訴訟代理人及輔佐人トシテ法廷ニ出ルコトヲ得但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキ

ト雖亦同シ

第十條 執達吏ハ其職務ヲ行フヘキ命令若クハ委任ヲ受クルトキハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十一條 執達吏ハ特別ノ命令若クハ委任ヲ受ケタル場合ノ外自己ノ責任ヲ以テ左ニ掲グル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

第一 執達吏登用試験ニ及第シタル者

シタル終局判決ニ因リテ之ヲ爲ス

第四百九十八條 判決ハ適法ナル故障ノ申立又ハ適法ナル上訴ノ提起ニ付キ定メタル期間ノ満了前ニハ確定セサルモノトス
判決ノ確定ハ故障者クハ上訴ヲ其期間内ニ申立若クハ提起スルニ因リ之ヲ遮斷ス

第四百九十九條 原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求めルトキハ第一審裁判所ノ書記ハ記録ニ基キ之ヲ付與ス

訴訟ガ猶ホ上級審ニ於テ繫屬中ナルトキハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタル部分ノミニ付キ證明書ヲ付與ス
判決ニ對シ上訴ノ提起ナキ場合ニ非サレハ證明書ヲ付與スルコトヲ得サルトキニ限り上訴ヲ管轄スル裁判所ノ書記カ不變期間内ニ上訴ノ提起ナキコトヲ認メザル證明書ヲ以テ足ル

判決確定ノ証明申請

第二 執達吏ノ其職務ヲ修習シタル者

第三 裁判所書記ノ登用試験ニ及第シタル者

第四 區裁判所ノ一人ノ判事若シハ監督判事ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行フニ適當ナリト認メタル者

第十二條 執達吏正當ノ理由アリテ其職務ヲ行フコトヲ得サル時又ハ之ヲ委任スルコトヲ得サルトキ

原告

何府何市何町何番地族籍職業

某

被告

何府何市何町何番地族籍職業

某

右當事者間ノ何年(何)第何号何々事件ニ付何年何月何日何々裁判所ニ於テ言渡シ何月何日送達シタル判決ニ對シ上訴期間内ニ上訴ノ提起ナク判決ノ確定シタルコトヲ證明相成度候也

月 日

原告

何

某印

何々裁判所

判事

何

某殿

第五百條 原狀回復又ハ再審ヲ求ムル申立アルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ保證ヲ立テシメ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ一時停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ爲ス可キコトヲ命シ及ヒ保證ヲ立テシメテ其爲シタル強制處分ヲ取消ス可キヲ命スルコトヲ得

ハ命令ヲ爲シタル裁判所及検事局又ハ委任ヲ爲シタル本人ニ速ニ其旨ヲ通知スハ
 委任ヲ爲シタル本人ニ通知スルコト能ハ
 サルモ又ハ急速ノ處分ヲ要スルトキハ其旨ヲ區裁判所ノ一人ハ判事若シテ監督判事ニ申立ツヘシ
 第十三條 前條ノ場合其他執達吏差支アルモハ區裁判所ノ一人ハ判事若シテ監督判事ハ申立ニ因リ

保證ヲ立テシメスシテ爲ス強制執行ノ停止ハ其執行ニ因リ償フコト能ハサル損害ヲ生ス可キコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ許ス
 右裁判ハ口頭辯論ヲ經スルヲ爲スコトヲ得其裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

強制執行停止ノ申請

何府何市何町何番地族籍職業

被告

何

某

何府何市何町何番地族籍職業

被告

何

某

右當事者間ノ何年(何)第何号何々事件ニ付何年何月何日何々裁判所ニテ與ヘタル判決ニ對シ原狀回復ノ申立ヲ爲シタルニ付強制執行ヲ一時停止相成度候也

月 日

被告人

何

某印

何々裁判所

判事 何

某股

又ハ職權ヲ以テ第十條ニ掲ケル者ニ執達吏ノ職務ヲ行ハシ
 第十條 執達吏ハ一定ノ制服ヲ着スハシ臨時職務ノ執行ヲ受ケタルモノハ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ヲ携帯スヘシ
 第十五條 執達吏ハ裁判所書記ヲ經タル
 否トハ問ハズ委任ヲ受テ職務ヲ行フニ付テ定規ノ手数料ヲ受テ及立替金ノ辨濟ヲ受テハ

第五百一條 左ノ判決ニ付テハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決

第二 證書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡ス判決

第三 同一審ニ於テ同一ノ原告若シテ被告ニ對シ本案ニ付キ言渡シタル第二又ハ其後ノ關席判決

第四 假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決

第五 養料ヲ支拂フ義務ヲ言渡ス判決但訴ノ提起後ノ時間及ヒ其提起前最後ノ三個月間ノ爲ニ支拂フ可キモノナルトキニ限

第五百二條 左ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若シテ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若シテ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關シ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リ

執達吏ハ定規ノ手数料ヲ増減シ又ハ手数料及立替金ノ外報酬ヲ受ケルコトヲ得ス

第十六條 執達吏第三條ニ掲ケタル職務ヲ行フニ付テハ立替金ノ外手数料ヲ受ケルコトヲ得ス

第十七條 執達吏第十二條ノ場合ニ於テ臨時職務執行ノ委任ヲ爲シタル時ハ其委任ヲ受ケタル者ニ報酬ヲ付テ手数料十分ノ三ヲ支給スヘシ

第十八條 第十三條

タル訴訟

第二 占有ノミニ係ル訴訟

第三 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一個年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

第四 左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若シハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

第五 贈料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

第六 旅店若シハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷物、金錢又ハ有價物

第七 此他財産權上ノ請求ニ關シ金額又ハ價額ニ於テ二十圓ヲ超過セザル訴訟但其物ノ價額ニ付テハ第三條乃至第六條ノ規定ヲ適用ス

ノ場合ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行ヒタルモノハ其職務ニ付定メタル手数料ヲ受ケ及立替金ノ辯濟ヲ受ク

第十九條 執達吏一年間ニ收入セシ手数料百八十圓ニ充タサルトキハ國庫ヨリ其不足額ヲ支給ス

第二十條 執達吏死シタルトキ又ハ停職免職若シハ拘留セラレタルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若シハ監督判事ハ左ノ處

何々請求ニ付假執行ノ申立

何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村何何

原告 何 某

被告 何 某

右當事者間ノ何年(何)月何日何々請求ニ付此裁判官渡下同時ニ民事訴訟法第何條第何号ニ依リ假執行ノ宣言ニ相成度候也

月 日 原告人 何 某印

何々裁判所 判事 何 某印

第五百三條 前二條ニ掲ケタル外左ノ場合ニ於テハ財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ限リ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント申出ツルトキ

第二 債權者カ判決ノ確定ト爲ルマテ執行ヲ中止セハ償ヒ難キ損害又ハ計リ難キ損害ヲ受ク可キコトヲ疏明スルトキ

分チ爲スヘシ

第一 官印帳簿其
他職務ニ關スル書
類チ區裁判所ニ差
出サシムルコト

第二 執達吏職務
上保管シタル物品
及書類ノ保全ニ必
要ノ手續チ爲ス

第二十一條 執達吏
ハ官吏恩給法ニ照シ
恩給ヲ受ク其恩給年
額ハ第十九條ニ定メ
タル金額ヲ俸給額ト
看做シテ算定ス
第二十二條 執達吏
ハ此規則ニ依ルノ外

何々請求ニ付仮執行ノ申立

原告 何府何市何町何番地族籍職業
何

被告 何府何市何町何番地族籍職業
何

右當事者間ノ何年(何)第何号何々事件ニ付御指定ニ從ヒ相當ノ保証
相立可申候間若クハ判決ノ確定トナル迄執行ヲ中止セバ償ヒ難キ
損害之アル裁判言渡ト同時ニ民事訴訟法第五百三條(第一号)(第二号)
ニ依リ仮執行ノ宣告相成度候也

月 日 原告 被告

何々裁判所 判事 何 某 殿

第五百四條 債務者カ判決ノ確定ト爲ル前ニ判決ヲ執行セハ回復ス
ルコトヲ得サル損害ヲ受ク可キコトヲ疏明シタルトキハ其申立ニ
因リ左ノ宣言ヲ爲ス可シ

總テ一般官吏ノ例ニ
依ル

附則

第二十三條 執達吏
ヲ置カサル間ハ區裁
判所書記執達吏ノ職
務ヲ行フ此ノ場合ニ
於テハ自己ノ責ヲ以
テ第十一條ニ掲グル
者又ハ自己ノ適當ト
思量スル者ニ臨時其
財務ノ執行ヲ委任ス
ルコトヲ得
裁判所書記前項ノ委
任チナシタルトキハ
委任ヲ受ケタル者ニ
執達吏ノ職務ニ付定

第一 第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行ス可カラサル

コト

第二 第五百二條及ヒ第五百三條ノ場合ニ於テハ債權者ノ假執
行ノ申立チ却下スルコト

何々請求事件ニ付假執行停止ノ申立

原告 何府何市何町何番地族籍職業
何

被告 何府何市何町何番地族籍職業
何

右當事者間ノ何年(何)第何号何々事件ニ付原告人何某ハ無資力ナル
ヲ以テ判決ヲ假ニ執行セバ到底回復スベカラサルノ損害ヲ受クベ
ク候間民事訴訟法第五百四條(第一号)(第二号)ニ依リ仮執行中止相成
度候也

但原告人ノ無資力タル証明ハ附屬書類トシテ証明仕候
月 日 被告人 某 印

メナル手数料十分ノ
七以上ヲ支給スルヘ
シ

執達吏手数料規則

第一條 執達吏ハ此
規則ニ從ヒ手数料ヲ
受ク

第二條 書類送達ノ
手数料ハ一通ニ付五
錢トス

第三條 有体動産及
未土地ヨリ離レサル
果實並ニ爲替券其他
裏書ヲ以テ移轉スル
コトヲ得ル証券ノ差
押、仮差押ニ付テノ
手数料ハ左ノ區別ニ

從フ

執行スルキ債權額
手 數 料

二十圓マテ

三十 錢

五十圓マテ

五十 錢

百圓マテ

七十五 錢

三百圓マテ

一 圓

五百圓マテ

一圓廿五錢

千圓マテ

一圓五十錢

千圓ヲ超ユルトキ

ハ二圓トス

何々裁判所

判 事 何 某 段

第五百五條 總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ債權者
豫メ保證ヲ立ツルトキハ假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣言スルコトヲ
得

債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルコトヲ申出テサルトキハ債務者
ノ申立ニ因リ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行
ヲ免カルコトヲ許ス可シ

第五百六條 假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結
前ニ之ヲ爲ス可シ

第五百七條 假執行ニ付テノ裁判ハ判決主文ニ之ヲ掲シ可シ

第五百八條 職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ場合ニ於テ假執
行ニ付テノ裁判ヲ爲ササルトキ又ハ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ債

權者ノ申立ヲ看過シタルトキハ第二百四十二條及ヒ第二百四十二
條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲スコトヲ得

第五百九條 第一審又ハ第二審ノ判決ニシテ假執行ノ宣言ナカリシ
モノ又ハ條件附ノ假執行ノ宣言アリタルモノハ上訴ヲ以テ不服ヲ
申立テサル部分ニ限リ口頭辯論ノ進行中ニ爲シタル原告若クハ被
告ノ申立ニ因リ上級審ニ於テ其判決ニ假執行ノ宣言ヲ付ス可シ

第五百十條 本案ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變
更スル判決ノ言渡アルトキハ假執行ハ其廢棄若クハ破毀又ハ變更
ヲ爲ス限度ニ於テ効力ヲ失フ

假執行ノ宣言アリタル本案ノ判決ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スル
トキハ判決ニ基キ被告ノ支拂又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ被告ノ
申立ニ因リ判決ヲ以テ原告ニ言渡ス可シ

第五百十一條 第二審ニ於テハ申立ニ因リ先ツ假執行ニ付キ辯論及

若シ執務三時間以上ニ涉ルトキハ一時間毎ニ本條ニ定メタル手数料ノ十分ノ三ヲ加フ但其執務一時間ニ滿サルモ一時間ト看做シテ算定ス

第四條 執達吏差押仮差押ヲ爲ス場所ニ臨ムト雖差押フヘキ物ナキトキ又ハ差押フヘキ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ前條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

七裁判ヲ爲ス可シ
口頭辯論ノ延期ニ付テノ第四百十條ノ規定ハ此場合ニ於テハ之ヲ適用セス

第二番ニ於テ假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百十三條 假執行ノ宣言ヲ付シタル判決ニ對シ故障ヲ申立又ハ上訴ヲ起シタルトキハ第五百條ノ規定ヲ準用ス

第五百十三條 本編ノ規定ニ從ヒ原告若クハ被告ニ保證ヲ立ツル義務ヲ負ハシメ若クハ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ許シタル場合ニ於テハ原告若クハ被告ハ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ執行裁判所ニ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲スコトヲ得

保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタルコトニ付テハ求ニ因リ證明書ヲ付與ス可シ

第五條 民事訴訟法第五百五十六條第二項、第五百八十六條第二項、第六百十五條ノ場合及ヒ既ニ差押、仮差押ニ着手シタル執達吏ノ死亡若クハ其他ノ理由ニ依リ委任ノ消滅シタル片物ヲ換價スル爲其委任ヲ引受ケタル場合ニ於テハ執達吏ハ第三條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第六條 特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ債務者ヨリ取

第五百十四條 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制執行ハ本邦ノ裁判所ニ於テ執行判決ヲ以テ其適法ナルコトヲ言渡シタルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

執行判決ヲ求ムル訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル裁判所之ヲ管轄ス

執行判決請求ノ申請

原告 何府何市何町何番地族籍職業 某
何縣何郡何村何番地族籍職業 某

被告 何府何市何町何番地族籍職業 某
何縣何郡何村何番地族籍職業 某

判決ノ表示
何々國何々ノ裁判所ニ於テ左ノ如ク言渡サレ確定仕候也
判決正本ノ寫

以上ノ如ク判定セラレ確定仕候間執行ノ判決被成下度此段申請仕

調子爲ス場合ニ於テ
ハ第三條ニ定メタル
區別ニ從ヒ其手數料
ヲ受ク

第九條 動産不動産
及船舶ノ競賣ニ付テ
ノ手數料ハ左ノ區別
ニ從フ但競賣ニ依リ
タル金額執行スヘキ
債權額ニ超過スルト
キハ其債權額ヲ以テ
競賣金額ト看做ス
競賣金額ノ手數料
二十圓マテ
六十錢
五十圓マテ
一圓

何々裁判所
判事 何 某段
第五百十七條 執行文ハ判決ノ正本ノ末尾ニ之ヲ附記ス
其文式左ノ如シ

前記ノ正本ハ被告某若クハ原告某ニ對シ強制執行ノ爲メ原告某
若クハ被告某ニ之ヲ付與ス

執行文ニハ裁判所書記署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押ス可シ
第五百十八條 執行力アル正本ハ判決ノ確定シタルトキ又ハ假執行
ノ宣言アリタルトキニ限り之ヲ付與ス
判決ノ執行力其旨趣ニ從ヒ保證ヲ立ツルコトニ繋ル場合ノ外地ノ
條件ニ繋ル場合ニ於テハ債權者カ證明書ヲ以テ其條件ヲ履行シタ
ルコトヲ證スルトキニ限り執行力アル正本ヲ付與スルコトヲ得
第五百十九條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人

ノ爲ニ之ヲ付與シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ一般ノ承繼人ニ
對シ之ヲ付與スルコトヲ得但其承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキ
又ハ證明書ヲ以テ之ヲ證スルトキニ限ル
此承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキハ之ヲ執行文ニ記載ス可シ

承繼ニ對スル執行ノ申請
原告 何 某
何府何市何町何番地族籍職業
被告 何 某
何府何市何町何番地族籍職業

百圓マテ 一圓五十錢
二百五十圓マテ 二圓
五百圓マテ 二圓五十錢
千圓マテ 四圓
以上千圓毎ニ一圓ヲ加フ
任意競賣ニ付テモ亦前項ニ同シ
第十條 執達吏執行行爲ヲ爲スヘキ場所ニ臨マサル以前ニ民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ

右當事者間ノ何年(何)第何號何々事件ニ付何年何月何日何々裁判所
ノ判決ニヨリ強制執行致度候處被告ハ何年何月何日死亡致シ何年
何月何日家督相續致シ候ニ付承繼人(何某)ニ對シ執行文附與相成度
依テ證據物相添ヘ申請仕候也
年月日 原告人 何 某印
何々裁判所 判事 何 某段

消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若シハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手数料ノ十分ノ三ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手数料ヲ三十錢トス

承繼人ノ執行シ得ヘキ執行交付與ノ申請
 原告 何府何市何町何番地族籍職業
 被告 何 某
 右當事者間ノ何年(何)第何號何々請求事件ニ付何年何月何日何々裁何所ノ判決ニヨリ強制執行致度候處原告ハ何年何月何日死亡シ何年月日自分家督相續承繼致候ニ付承繼人ニ於テ強制執行ナシ得ヘキ様執行交付與相成度依テ此段相續證明書相添ヘ申請仕候也
 年月日 原告 何 某印
 何々裁判所 判事 何 某股
 第五百二十條 第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テハ執行力アル正本ハ裁判長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ得

若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手数料ヲ五十錢トス
 第十二條 第三條乃至第十一條ノ手数料ヲ受クヘキ行為ニハ強制執行ノ場合ニ於テ左ノ行為ヲ包含ス
 第一 警察上ノ援助ヲ求メ又ハ証人鑑定人ノ立會ヲ爲サシムルト
 第二 執行行為ニ

裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債權者ヲ審訊スルコトヲ得
 右命令ハ執行文ニ之ヲ記載ス可シ
 第五百二十一條 第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ニ依リ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキハ債權者ハ判決ニ基キ執行文ノ付與ニ付キ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ得
 執行交付與ノ訴
 原告 何府何市何町何番地族籍職業
 被告 何 某
 訴訟ノ目的物 何 某
 何々ノ訴ニ付執行交付與 事實

屬スル催告其他通知ヲ爲シ又ハ書類ノ送達ヲ爲スコト
 第三 記名証券ヲ買主ノ氏名ニ書替ヘ及必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲スコト
 第四 支拂其他ノ給付、差押金錢及賣却受取リ、交付等若シハ供託必又ハ受取証書ヲ交付シ又ハ差押物ヲ還付スルコト
 第五 競賣ノ公告ヲ爲スコト

原告人ハ何年(何)第何號何々事件ニ付何年何月何日何々裁判所ノ判決ニ基キ被告人(何々條件ヲ履行シタルモ被告ハ其請求ニ應セサルヲ以テ之カ判決ノ執行ヲ求ム云々(事實ノ大略))
 證據方法
 甲第何號
 申立
 被告ニ對シ何々ノ義務ヲ履行スヘキ執行交付與被成下度候也
 年月日 原告 何 某印
 何々裁判所
 判事 何 某段
 第五百二十二條 執行文ノ付與ニ對シ債務者カ異議ヲ申立テタルキハ其執行文ヲ付與シタル其裁判所書記ノ屬スル裁判所之ヲ裁判ス
 裁判長ハ其裁判前ニ假處分ヲ爲スコトヲ得殊ニ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスコトヲ強制執行ヲ一時停止シ又ハ保證ヲ立テシ

第十三條 執達吏ハ立替金トシテ左ノ費用ノ辨濟ヲ受ク

- 第一 書記料
- 第二 郵便料、電信料
- 第三 公告料
- 第四 証人、鑑定人、手當
- 第五 百工、役夫ノ手當
- 第六 有價証券ノ記名書換書流通ヲ止メタル証券流通ヲ回復スル爲ノ費用
- 第七 人及物ノ送

メテ強制執行ヲ續行ス可キヲ命スルコトヲ得

執行文附與ニ付テ異議ノ申立

原告 何 某
 被告 何 某
 何府何市何町何番地族籍職業
 何縣何郡何村何番地族籍職業
 右當事者間ノ何年(何)第何號何々事件ニ付何年何月何日何々裁判所ノ判決ニ對シ何年何月何日執行交付與相成度候得共被告ハ何年何月何日何々裁判所ニ(控訴)(上告)提起致シ候ニ付執行文取消有之度申請仕候也
 年月日 原告 何 某印
 何々裁判所
 判事 何 某段

第五百二十三條 債權者カ執行力アル正本ノ數通ヲ求メ又ハ前ニ付與シタル正本ヲ返還セシテ更ニ同一判決ノ正本ヲ求ムルトキハ

第九 費用

第八 物ノ保存並
監視ノ費用

第九 果實收穫ノ
費用

第十 旅費

第十四條 前條ノ書
記料ハ左ノ場合ニ於
テ之ヲ受シ

第一 法律ニ依リ
又ハ利害關係人ノ
求ニ依リ証書及記
録中ニ存スル書類
ノ謄本ヲ作リタル
トキ
但法律ニ依リ交付
スヘキ送達証書ノ

裁判長ノ命令アルトキニ限り之ヲ付與スルコトヲ得

裁判長ハ其命令ノ前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコト
ヲ得

相手方ヲ審訊セスシテ執行力アル正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正
本ヲ付與シタルトキハ其旨ヲ相手方ニ通知ス可シ

正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルトキハ其旨ヲ明記
ス可シ

執行文何通付與ノ申請

原告 何
被告 何
何府何市何町何番地族籍職業

右當事者間ノ何年(何)第何號何々請求事件ニ付何年何月何日何々裁
判所ノ判決ニ基キ執行セントスルモ(被告ノ所在地隔絶)若クハ(被告
人ニ對シ不動產ト有体動産ノ差押ヘニ付同時強制執行着手致度候

間執行力アル正本何通付與相成度候也

年月日 原告 何 某印

何々裁判所

判事 何 某印
原告 何
被告 何
何府何市何町何番地族籍職業

右當事者間ノ何年(何)第何號何々請求事件ニ付何年何月何日何々
裁判所ノ判決ニ基キ何年何月何日執行力アル正本付與ノ申請ヲ受
ケ債務者所在ノ有体動産差押ノ上競賣候處其價格債權額ニ充タサ
ルニ付更ニ同人所有ノ不動産ニ對シ強制執行ニ着手致度候間更ニ
執行力アル正本付與被成下度此段申請仕候也

年月日 原告 何 某印

何々裁判所

判事 何 某印

第十五條 強制執行

第二 供託ヲ爲ス
ニ際シ執行裁判所
ニ差出スヘキ届書
ヲ作リタルトキ
第三 差押命令ノ
送達後第三債務ノ
爲メ陳述ヲ筆記シ
タルトキ
書記料ハ半枚十二
行二十字詰ニ付二
錢五厘トス但シ十
二行ニ滿タサルモ
半枚ト看做シテ算
定ス

ニ關セサル告知及催告ヲ爲ストキハ其手數料十錢ヲ受ク
 第十六條 執達吏拒證書ヲ作リタルキハ手數料十錢ヲ受ク拒者ノ營業場又ハ住居ノ間合ヲ爲シ拒證書ヲ作リタルトキハ手數料二十錢ヲ受ク
 第十七條 証人ニ支給スヘキ日當ハ二十錢以下鑑定人ニ支給スヘキ日當ハ五十錢以下トシ執達吏土地ノ情況ニ從ヒ之ヲ支給ス若シ二里以上ノ地

第五百二十四條 執行力アル正本ノ付與前ニ判決ノ原本ニ原告ノ爲メ若クハ被告ノ爲メ之ヲ付與スル旨且之ヲ付與スル日時ヲ記載ス可シ
 第五百二十五條 執行力アル正本ノ効力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラス總テ本邦ノ裁判區域内ニ及フモノトス
 第五百二十六條 債務者ハ一箇ノ地又ハ二箇ノ方法ニテ強制執行ヲ爲スモ完全ナル辨濟ヲ得ル能ハサルトキハ數通ノ執行力アル正本ニ基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制執行ヲ爲ス權利ヲ有ス
 第五百二十七條 債權者ハ執行ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサルトキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ
 第五百二十八條 強制執行ハ之ヲ求ムル者及ヒ之ヲ受クル者ノ氏名

ヨリ呼出シタルトキハ第十八條ノ規定ニ從ヒ旅費ヲ支給ス
 第十八條 執達吏自己ノ役場ヨリ一里以上ノ地ニ至リ職務ヲ行フトキハ一里毎ニ十條以下ノ旅費ヲ受ク但シ一里ニ滿タサルモノ一里ト看做シテ算定ス
 右旅費ノ額ハ控訴院長ノ認可ヲ經テ地方裁判所長之ヲ定ム
 第十九條 執達吏ハ總テノ事務ヲ擔任スルニ當リ手數料及立

チ判決又ハ之ニ附記スル執行文ニ表示シ且判決ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキハ限り之ヲ始ムルコトヲ得
 判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明ス可キ事實ノ到來ニ際ルトキ又ハ判決ノ執行カ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ爲シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ニ對シ爲ス可キトキハ執行ス可キ判決ノ外尙ホ之ニ附記スル執行文ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達スルコトヲ要ス
 若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルトキハ亦其證書ノ謄本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス
 第五百二十九條 請求ノ主張カ或ル日時ノ到來ニ際ルトキハ其日時ノ滿了後ニ限り強制執行ヲ始ムルコトヲ得
 若シ執行カ債權者ヨリ保證ヲ立ツルコトニ繋ルトキハ債權者カ保證ヲ立テタルコトニ付テノ公正ノ證明書ヲ提出シ且其謄本ヲ既ニ

替金ノ概算額ヲ委任者ヨリ豫納セシム若シ豫納セサルトキハ委任ニ應セサルコトヲ得但裁判所及検事局ノ命令ニ依ルトキ又ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ爲ニ事務ヲ担任スルトキハ此限ニ在ラス

第二十條 執達吏ハ委任ノ終了シタル後手敷料及立替金ノ辨濟ヲ受クヘキモノトス但民事訴訟法第五百五十四條ニ規定シタル場合ハ此限ニ在

送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限り其執行ヲ始ムルコトヲ得

第五百三十條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對シテ爲ス強制執行ハ其上班司令官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限り之ヲ始ムルコトヲ得

此官廳ハ債權者ノ求ニ因リ通知ノ受取證ヲ付與ス可シ

第五百三十一條 強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキトキニ限り執達吏之ヲ實施ス

債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲ニ區裁判所書記ノ補助ヲ求ムルコトヲ得

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

第五百三十二條 執達吏ハ債權者ノ委任ニ因リテ爲ス行爲及ヒ職務上ノ義務ノ違背ヨリシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損害ヲ生ゼシメ

ラス

第二十一條 執達吏裁判所及検事局ノ命令ニ依リ其職務ヲ行フ爲メニ要シタル立替金三ヶ月毎ニ確定シテ之ヲ支給ス

右立替金ハ之ヲ國庫ヨリ支辨ス

第二十二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シタル場合ニ於テハ執達吏ノ立替金ハ國庫ヨリ支辨ス但債務者ヨリ辨濟シ能ハサル場合ニ限ル

第二十三條 執達吏

メタルトキハ第一ニ其責ニ任ス

第五百三十三條 債權者執行力アル正本ヲ交付シテ強制執行ヲ委任シタルトキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサトキト雖モ支拂其他ノ給付ヲ受取り其受取りタルモノニ付キ有效ニ受取ノ證書ヲ作り之ヲ交付シ且債權者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本ヲ債務者ニ交付スルコトヲ得

第五百三十四條 執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルヲ以テ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ掲ケタル行爲ヲ實施スル權利ヲ有ス債權者ハ此等人者ニ對シ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ主張スルコトヲ得ス

執達吏ハ其正本ヲ携帶シ關係人ノ求アルトキハ其資格ヲ證スル爲ニ之ヲ示ス可シ

第五百三十五條 執達吏ハ債務者カ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ

ハ其職務執行ニ付作
 リタル書類ノ正本又
 ハ謄本ニ手数料及立
 替金ノ額ヲ附記スヘ
 シ又執務時間ニ應シ
 其辨濟ヲ受クヘキト
 キハ調書ニ執務時間
 ナ附記スヘシ若シ之
 ナ附記セサルトキハ
 最短ノ時間ニ付テ定
 メタル金額ヲ以テ算
 定ス

執達吏登用規則

第一條 執達吏ニ任
 セラル、ニハ左ノ諸
 件ヲ具備スルコトヲ
 要ス

執行力アル正本及ヒ受取ノ證ヲ之ニ交付シ又其義務ノ一分ヲ盡シ
 タルトキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取ノ證ヲ債務者ニ
 交付ス可シ
 債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムル權利ハ前項ノ規定ニ
 因リテ妨ケラルコト無シ

第五百三十六條 執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ債務者
 ノ住居倉庫及ヒ筐匣ヲ搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉及ヒ筐匣ヲ開カ
 シムル權利ヲ有ス
 抵抗ヲ受クル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用非且警察上ノ援助ヲ
 求ムルコトヲ得若シ兵力ヲ要スルトキハ之ヲ執行裁判所ニ申立ツ
 可シ

第五百三十七條 執達吏ハ執行行爲ヲ爲スニ際シ抵抗ヲ受クルトキ
 又ハ債務者ノ住居ニ於テ執行行爲ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シ

第一 年齢滿廿五
 年以上ナルコト
 第二 陸海軍現役
 ナ終ハ又ハ之ヲ免
 セラレタルコト
 第三 身体健全ナ
 ルコト
 第四 家計ノ整理
 シタルコト
 第五 品行方正ナ
 ルコト
 第六 試験ニ及第
 シタルコト

第二條 左ニ掲グル
 者ハ執達吏ニ任セラ
 ルコトヲ得ス

第一 重罪ヲ犯シ

タル其家族若クハ雇人ニ出會ハサルトキハ成丁者二人又ハ市町村
 若クハ警察ノ吏員一人ヲ證人トシテ立會ハシム可シ

第五百三十八條 強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル各人ニハ其求
 ニ因リ執達吏ノ記録ノ閱覽ヲ許シ及ヒ記録中ニ存スル書類ハ謄本
 ナ付與スルコトヲ要ス

第五百三十九條 夜間及ヒ日曜日並ニ一般ノ祝祭日ニハ執行裁判所
 ノ許可アルトキニ限り執行行爲ヲ爲スコトヲ得
 右許可ノ命令ハ強制執行ノ際之ヲ示ス可シ

第五百四十條 執達吏ハ各執行行爲ニ付キ調書ヲ作ル可シ此調書ニ
 ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 調書ヲ作りタル場所、年月日
 第二 執行行爲ノ目的物及ヒ其重要ナル事情ノ略記
 第三 執行ニ與カリタル各人ノ表示

タルモノ但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ非ス
 第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 身代限りノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者
 第四 懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者

第三條 執達吏ノ試験ヲ受ケントスルモノハ少クモ六ヶ月間區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ

第四 右各人ノ署名捺印

第五 調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ閱覽セシメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコトノ開示

第六 執達吏ノ署名捺印

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハサルトキハ其理由ヲ記載ス可シ

第五百四十一條 執行行爲ニ屬スル催告其他ノ通知ハ執達吏口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且調書ニ之ヲ記載ス可シ

若シ口頭ヲ以テ催告又ハ通知ヲ爲ス能ハサルトキハ第三百二十九條第四百十條及ヒ第四百十五條乃至第四百十九條ノ規定ヲ準用シテ其調書ノ謄本ヲ送達シ又別ニ送達證ヲ作ラサルトキハ調書ニ其送達ヲ爲シタルコトヲ記載ス可シ
 若シ強制執行ノ地ニ於テモ執行裁判所ノ管轄内ニ於テモ送達ヲ爲

修習シ傍ラ書記ノ職務ヲ修習スルヲ必要ス

職務ノ修習ヲ爲ス者ハ職務上ノ秘密ヲ洩スヘカラス

第四條 職務修習ヲ願フニハ願書ニ兵役ニ關スル証書及履歷書ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ差出シ其許可ヲ受ク可シ

第五條 職務修習ノ許可ヲ爲シタルトキハ控訴院長ハ修習者ニ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ

ス能ハサルトキハ催告又ハ通知ヲ受ク可キ者ニ郵便ヲ以テ調書ノ謄本ヲ送達シ且之ヲ郵便ニ付シタルコトヲ調書ニ記載ス可シ

第五百四十二條 執行行爲ノ際債務者ニ爲ス可キ送達及ヒ通知ハ債務者ノ所在明カナラサルトキ又ハ外國ニ在ルトキハ之ヲ必要トセ

第五百四十三條 此法律ニ於テ裁判所ニ任カセタル執行行爲ノ處分又ハ其行爲ノ共力ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス

法律ニ於テ別段ニ裁判所ヲ指定セサル各箇ノ場合ニ於テハ執行手續ヲ爲ス可キ地又ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ以テ執行裁判所ト看做ス

執行裁判所ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
 第五百四十四條 強制執行ノ方法又ハ執行ニ際シ執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立及ヒ異議ニ付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス又執

區裁判所ハ一人ノ判事若シハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁判所書記ヲ選定シ職務ノ訓導ヲ爲サシムヘシ

第六條 控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏トナルニ不適當ナリト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得

第七條 職務修習者試験ヲ受ントスルニハ第一條第一乃至第五ノ諸件ヲ具備シタルヲ及ヒ第二條ノ諸件ニ觸レサルコトヲ

行裁判所ハ第五百二十二條第二項ニ定メタル命ヲ發スル權ヲ有ス執達吏カ執行委任ヲ受クルヲ拒ミ若シハ委任ニ從ヒ執行行爲ヲ實施スルコトヲ拒ミタルトキ又ハ執達吏ノ計算セシ手數料ニ付キ異議アルトキハ執行裁判所ハ之ヲ裁判スル權ヲ有ス

執行手續ニ對スル異議之申立

原告 何府市町何番地族職職業
被告 何

被告 何

何

某

右債權者何某ヨリ債務者何某ニ對シ強制執行ニ依リ有体動産差押ニ付何々裁判所執達吏何某ハ法律上ノ規定ニ背キ……別紙目錄ノ通差押候間該差押御取消相成度此段申請仕候也

年月日

被告

何

某印

何々裁判所

判事 何

某段

執行委任拒證ニ對スル申請

債權者何某ヨリ債務者何某ニ對シ強制執行ノ爲メ何々裁判所執達吏何某ハ執行ノ行爲ヲ委任候處正當ノ理由ナク委任拒絶致候間速ニ執行行爲ヲ實施候様御命令相成度此段申請仕候也

年月日

債權者

何

某印

何々裁判所

判事 何

某段

第五百四十五條 判決ニ因リテ確定シタル請求ニ關スル債務者ノ異議ハ訴ヲ以テ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ主張ス可シ

右ノ異議ハ此法律ノ規定ニ從ヒ遅クモ異議ヲ主張スノコトヲ要スル口頭辯論ノ終結後ニ其原因ヲ生シ且故障ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得サルトキニ限り之ヲ許ス

債務者カ數箇ノ異議ヲ有スルトキハ同時ニ之ヲ主張スルコトヲ要ス

證明シ並修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ前項ノ願書ニ意見ヲ付スヘシ
控訴院長ハ書類ヲ調査シ試験ノ許否ヲ定ムヘシ
第八條 試験ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ
第九條 試験委員長及試験委員ハ地方裁

判所及區裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第十條 控訴院長ハ試験ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試験委員長ニ送付スヘシ前項ノ送付アリタルトキハ試験委員長ハ試験期日ヲ定メ之ヲ修習者ニ告知スヘシ

第十一條 試験ハ筆記口述ノ二様トス口述試験ハ筆記試験ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ

第十二條 試験ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ
第一 民事訴訟法及治罪法ノ中書類送達及執行ニ關ル規程
第二 執達吏ニ關ル諸規則
第三 算術(加減乗除分數比例)
第四 讀書筆寫
第十三條 筆記試験ノ問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム
試験委員長ハ受験者

強制執行ニ對スル異議ノ訴

何府市何町何番地族籍職業

原告 何

被告 何

訴訟物

強制執行ノ停止

請求ノ原因

被告ハ何年(何)第何號何々裁判所ノ判決ニ基キ強制執行ニ着手シタルモ何々ノ事實若クハ何々ノ證據ノ如ク(理由ヲ述スベシ)ナルヲ以テ假令判決ハ確定シタリト雖モ執行ヲナシ得ヘキモノニアラサルヲ以テ該執行ノ停止ヲランヨリ請求ス

立証

甲第一號ヲ以テ何々ノ事實ヲ證明ス

一定ノ申請

以上ノ事實ナルヲ以テ強制執行ヲ停止スベキ様御判決相成度候也

年月日 原告 被告 右 何 某印

何々裁判所

判事 何 某印

第五百四十六條 前條ノ規定ハ第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テ債務者カ執行文付與ノ際證明シタリト認メラレタル事實ノ到來ニシテ此ニ因リ判決ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭ヒ又ハ認メラレタル承繼ヲ爭フトキハ亦之ヲ準用ス但此場合ニ於テ第五百二十二條ノ規定ニ從ヒ執行文ノ付與ニ對シ異議ヲ申立ツル債務者ノ權ハ此方爲ニ妨ケラレルルコト無シ

第五百四十七條 強制執行ノ續行ハ前二條ノ場合ニ於ケル異議ノ訴ノ提起ニ因リテ妨ケラレルルコト無シ然レトモ異議ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリト見ユ且事實上ノ點ニ付キ疏明アリタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ判決ヲ爲スニ至ルマテ保護ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制

第十三條 筆記試験ノ問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム
試験委員長ハ受験者

ノ申立アルトキハ區
裁判所ニ於テ筆記試
驗問題ノ答案ヲ作ラ
シムルコトヲ得
第十四條 受験者ノ
及第落第及及第者ノ
優劣ハ筆記試験口述
試験ノ成績並對スル
委員過半數ノ意見ニ
從テ之ヲ決ス
及第落第ニ付テノ意
見數相半スルトキハ
落第ト看做スヘシ
第十五條 試験ニ及
第シタル者ニハ試験
委員長及試験委員ノ
選署シタル及第證書

執行ヲ停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續
行ス可キコトヲ命シ又ハ其爲シタル執行處分ヲ保證ヲ立テシメテ
取消ス可キヲ命スルコトヲ得ル
右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ又急迫ナル場合ニ於テハ裁
判長之ヲ爲スコトヲ得
急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所モ亦此權利ヲ行使スルコトヲ得
此場合ニ於テハ執行裁判所ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ提出セシムル爲
ニ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ヲ徒過シタルトキハ債權者ノ申立
ニ因リ強制執行ヲ續行ス
第五百四十八條 受訴裁判所ハ異議ノ訴ニ付キ裁判スル判決ニ於テ
前條ニ掲ケタル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ取消シ之ヲ變更シ
若シハ之ヲ認可スルコトヲ得
判決中前項ニ掲グル事項ニ限リ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可

ニ授與ス

第十六條 試験ニ落
第シタル者ハ更ニ三
箇月以上修習ヲ爲ス
ニ非ラサレハ再ビ試
驗ヲ受クルコトヲ得
第十七條 不正ノ方
法ヲ以テ及第ヲ企テ
ル者ハ再ビ試験ヲ受
クルコトヲ得ス其及
第シタル者ハ及第ノ
効ナキモノトス
第十八條 試験委員
ハ試験ノ問題及成績
ヲ記録ニ記載スヘシ
第十九條 試験委員

右裁判ニ對スル不服ニ付テハ第五百十一條ノ規定ヲ準用ス
第五百四十九條 第三者ヲ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ主張シ
其他目的物ノ讓渡若シハ引渡ヲ妨クル權利ヲ主張スルトキハ訴ヲ
以テ債權者ニ對シ其強制執行ニ對スル異議ヲ主張シ又債務者ニ於
テ其異議ヲ正當ナリトセサルトキハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ之
ヲ主張ス可シ
右訴ヲ債權者及債務者ニ對シテ起ストキハ之ヲ共同被告ト爲ス
右訴ハ執行裁判所ノ管轄ニ屬ス然レトモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄
ニ屬セサルトキハ執行裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ
管轄ス
強制執行ノ停止及ヒ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ニ付テハ第五百
四十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ヲ準用ス但執行處分ノ取消ハ

長ハ及第者ノ氏名及其試験成績ヲ控訴院長ニ報告ス可シ

第三十條 左ニ掲グル者ハ試験ヲ要セス執達吏ニ任セラルコトヲ得

- 第一 官立府縣中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校司法省舊法學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學期ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學

保證ヲ立テシメスシテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十條 強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シタル場合ニ於テ之ヲ停止シ又ハ之ヲ制限ス可シ

- 第一 執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ宣言シ若クハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル執行力アル裁判ノ正本
 - 第二 執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本
 - 第三 執行ヲ免カラル爲メ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正ノ證明書
 - 第四 執行ス可キ判決ノ後ニ債權者ガ辨濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル旨ヲ記載シタル證書
- 第五百五十一條 前條第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲモ取消ス可ク第四號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可ク第二號ノ場合ニ於テハ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行爲ノ取消ヲ命セサルトキニ限り既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可シ

校ノ卒業證書ヲ有スル者

第二 裁判所書記ノ登用試験ニ及第シタル者

第三 判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者

第四 陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者

第二十一條 第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ掲ケタル者ニモ亦之ヲ適用ス

前條第四ニ該ル者ハ

ル執行處分ヲモ取消ス可ク第四號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可ク第二號ノ場合ニ於テハ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行爲ノ取消ヲ命セサルトキニ限り既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可シ

第五百五十二條 強制執行ノ開始後ニ債務者カ死亡スルトキハ強制執行ハ遺産ニ對シ之ヲ續行ス可シ

債務者ノ知ルコトヲ要スル執行行爲ヲ實施スル場合ニ於テ相續人アラサルトキ又ハ相續人ノ所在明カナラサルトキハ執行裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ特別代理人ヲ任ス可シ

第五百五十三條 強制執行ノ開始後ニ戶主タリシ債務者カ其地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒタルトキハ此變更ノ生セシ當時債務者ノ所持シタル財産ニ付キ前條ノ規定ヲ準用ス

第五百五十四條 強制執行ノ費用ハ必要ナリシ部分ニ限り債務者ノ

職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル區裁判所ヲ記載シ陸軍大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘシ司法大臣ハ願書ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ

第二十二條 試験及第者及第二十條ニ掲ケタル者ニシテ職務修習ヲ終リタル者ノ任補ハ執達吏ノ欠員アルヲ待テ控訴院長之ヲ攝行ス

第二十三條 執達吏ニ任セラレタル者ハ

負擔ニ歸ス此費用ハ強制執行ヲ受クル請求ト同時ニ之ヲ取立ツ可シ

強制執行ノ基本タル判決ヲ廢棄若クハ破毀シタルトキハ其費用ハ之ヲ債務者ニ辨濟ス可シ

第五百五十五條 執行ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必要トスルトキハ裁判所ハ其援助ヲ官廳ニ求ム可シ

第五百五十六條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對シ兵營及ヒ軍事用廳舎又ハ軍艦ニ於テ強制執行ヲ爲ス可キトキハ債權者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ管轄ノ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス

囑託ニ因リ差押ヘタル物ハ債權者ノ委任シタル執達吏ニ之ヲ交付ス可シ

第五百五十七條 外國ニ於テ強制執行ヲ爲ス可キ場合ニ於テ其外國

官廳カ本邦裁判所ニ法律上ノ共助ヲ爲ス可キトキハ債權者ノ申立ニ因リ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ外國官廳ニ囑託ス可シ

外國駐在ノ本邦領事ニ依リ強制執行ヲ爲シ得ヘキトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ其領事ニ囑託ス可シ

第五百五十八條 強制執行ノ手續ニ於テ口頭辯論ヲ經テ之ヲ爲スコトヲ得ル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五百五十九條 強制執行ハ左ノ諸件ニ付テモ亦之ヲ爲スコトヲ得

任補ノ日ヨリ三十日內ニ保証金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間內ニ保証金ヲ差出ササルトキハ職務ヲ罷免ス

保証金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ定ム

保証金ハ相當ノ價格アル公債證書若クハ日本銀行株券ヲ以テ之ニ代メルコトヲ得

第二十四條 執達吏保証金ヲ納メタルトキハ裁判所ハ官印ヲ

第一 抗告ヲ以テノミ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル裁判

第二 執行命令

第三 訴ノ提起後受訴裁判所ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ爲シタル和解

第四 第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所ニ於テ爲シタル和解

第五 公證人カ其權限內ニ於テ成規ノ方式ニ依リ作りタル證書但

交付ス
執達吏ハ官印ノ交付
ヲ得タル後ニ非サレ
ハ職務ヲ行フコトヲ
得ス

附則

第二十五條 本則實
施ノ際ハ職務修習ヲ
要セス試験及任補ヲ
行フコトヲ得ス

○家資分散法

第一條 民事訴訟法
ノ強制執行處分ニ因
リ義務ヲ辨濟スル資
力ナキ債務者ニ對シ
テハ管轄裁判所ハ職
權ニ因リ又ハ申立ニ

一定ノ金額ノ支拂又ハ他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數額
ノ給付ヲ以テ目的トスル請求ニ付キ作リタル證書ニシテ直チニ
強制執行ヲ受ク可キ旨ヲ記載シタルモノニ限ル

第五百六十條 前條ニ掲ケタル債務名義ニ因レル強制執行ニハ第五
百十六條乃至第五百五十八條ノ規定ヲ準用ス但第五百六十一條第
五百六十二條ノ規定ニ依リ差異ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

第五百六十一條 執行命令ニハ其命令ヲ發シタル後債權者又ハ債務
者ニ於テ承繼アル場合ニ限り執行又チ附記スルコトヲ要ス

請求ニ關スル異議ハ執行命令ノ送達後ニ生シタル原因ニ基クトキ
ニ限り之ヲ許ス

執行交付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議ヲ主張スル訴又ハ執行
交付與ノ際到來シタリト認メタル承繼者爭フ訴ハ執行命令ヲ發シ
タル區裁判所之ヲ管轄ス但其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルモ

因リ決定ヲ以テ家資
分散者タルノ宣告ヲ
ナス可シ

右ノ決定ハ口頭辯論
ヲ要セシテ之ヲ爲ス
コトヲ得

第二條 前條ノ申立

ハ書面又ハ口頭ヲ以
テ之ヲ爲スコトヲ得

第三條 第一條ノ宣

告ハ裁判所及市町村
ノ揭示場ニ揭示シテ
之ヲ公告ス可シ

第四條 家資分散者

ハ其宣告ヲ受ケタル
ヨリ選舉權及被選舉
權ヲ失フ

ソナルトキハ管轄地方裁判所ニ其訴ヲ起ス可シ

第五百六十二條 公證人ノ作リタル證書ノ執行力アル正本ハ其證書
ヲ保存スル公證人之ヲ付與ス

執行交付與ニ關スル異議ニ付テノ裁判及ヒ更ニ執行交付與ニ付テ
ノ裁判ハ公證人職務上ノ住所ヲ有スル地ヲ管轄スル區裁判所ニ於
テ之ヲ爲ス

請求ニ關スル異議ノ主張ニ付テハ第五百四十五條第二項ニ規定シ
タル制限ニ從ハス

執行交付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議ヲ主張スル訴又ハ執行
交付與ノ際證明シタリト認メタル事實ノ到來ニ係リ此ニ因リテ證
書ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭フ訴ハ債務者カ本邦ニ於テ普通裁

判藉ヲ有スル地ノ裁判所又ハ此裁判所ナキトキハ第十七條ノ規定
ニ從ヒテ債務者ニ對シ訴ヲ起シ得ヘキ裁判所之ヲ管轄ス

家資分散者ノ復権ニ付テハ商法第千五百五條以下ヲ準用ス

第五條 商法及本法

實施以後ニ於テ從前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ効力ヲ有ス

法律第四百四號

婚姻事件養子縁組事件及禁治産事件ニ關スル訴訟規則

第五百六十三條 本編ニ定メタル裁判籍ハ專屬ナリトス

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第五百六十四條 動産ニ對スル強制執行ハ差押ヲ以テ之ヲ爲ス
差押ハ執行力アル正本ニ掲ケタル請求ヲ債權者ニ辨濟スル爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フ爲ニ必要ナルモノノ外ニ及ホスコトヲ得ス

差押フ可キ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ強制執行ヲ爲スコトヲ得ス

第五百六十五條 第三者カ差押ヲ受ク可キ物ニ付キ物上ノ擔保權ヲ有スルモ差押ヲ妨クルコトヲ得ス然レトモ第五百四十九條ノ規定ニ從ヒ訴ヲ以テ賣得金ニ付キ優先ノ辨濟ヲ請求スル權利ハ此カ爲

第一章 婚姻事件及

ヒ養子縁組事件ノ

訴訟手續

第一條 婚姻ノ無効

離婚又ハ同居ヲ目的トスル訴訟ハ夫カ普通裁判籍ヲ有スル地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス

縁組ノ無効又ハ離縁ヲ目的トスル訴訟ハ養子ヲ爲シタル者カ普通裁判籍ヲ有スル地方裁判所ニ專屬ス

婚姻又ハ縁組ノ不成立ニ關スル訴訟ハ被

ニ妨ケラルルコト無シ

此場合ニ於テ請求ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリト見エ且事實上ノ點ニ付キ疏明アリタルトキハ裁判所ハ賣得金ノ供託ヲ命ス可シ但此事項ニ付テハ第五百四十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ヲ準用ス

優先辨濟請求ノ訴

何府何市何町何番地族籍職業

原告 何 某

被告 全 何 某

優先辨濟請求ノ訴

訴訟物

一金何圓也

優先辨濟ノ請求高

右擔保ノ賣得金

事實

告カ普通裁判籍ヲ有
スル地ノ地方裁判所
ニ專屬ス

第二條 婚姻事件及
ヒ縁組事件ニ付テハ
檢事ハ口頭辯論ニ立
會ノ外受命判事若ク
ハ受託判事ノ面前ニ
於テ爲ス審問ニモ亦
立會フコトヲ得檢事
ニハ職權ヲ以テ總テ
ノ期日ヲ通知ス可シ
檢事ハ婚姻又ハ縁組
ヲ維持スル爲メ新ナ
ル事實及ヒ證據方法
ヲ提出スルコトヲ得
調書ニハ檢事ノ氏名

被告人ハ何年(何)第何號何々裁判所ノ命令ヲ以テ何々物件若クハ
地所家屋ヲ賣却シタルモ該物件ハ已ニ原告人貸金ノ担保物ナルヲ
以テ該買得金ヨリ優先ノ弁償ヲ請求ス

立 証

甲第何號ハ何々ヲ証明ス

一定ノ申立

原告ニ右擔保物ノ賣上高ヨリ優先ノ辨濟ヲナスヘキ樣裁判相成度
候也

年月日

右

某印

何々裁判所

何

某段

第五百六十六條 有體動産ニ對スル強制執行

第五百六十六條 債務者ノ占有中ニ在ル有體動産ノ差押ハ執達吏其
物ヲ占有シテ之ヲ爲ス
其物ハ債權者ノ承諾アルトキ又ハ其運搬ヲ爲スニ付キ重大ナル困

及ヒ申立ヲ記載スハ

第三條 婚姻ノ不成
立、無効、離縁及ヒ同
居ノ訴ハ之ヲ併合ス
ルコトヲ得縁組ノ不
成立、無効及ヒ離縁
ノ訴モ亦全シ
婿養子縁組ノ場合ニ
於テハ婚姻ノ不成立
無効、離縁又ハ同居
ノ訴ニ縁組ノ不成立
無効、又ハ離縁ノ訴
ヲ併合スルコトヲ得
本條ノ訴ニ他ノ訴ヲ
併合シ及ヒ他ノ種類
ノ反訴ヲ提起スルコ

難アルトキハ之ヲ債務者ノ保管ニ任ス可シ此場合ニ於テハ封印其

他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルトキニ限り其効力ヲ生ス

執達吏ハ債務者ニ其差押ヲ爲シタル旨ヲ通知ス可シ

第五百六十七條 前條ノ規定ハ債權者又ハ物ノ提出ヲ拒マサル第三

者ノ占有中ニ有ル物ノ差押ニ付テモ亦之ヲ準用ス

第五百六十八條 果實ハ未タ土地ヨリ離レサル前ト雖モ之ヲ差押フ

ルコトヲ得然レトモ其差押ハ通常ノ成熟時期ノ前一个月内ニ非サ

レハ之ヲ爲スコトヲ得ス

蠶ハ其多分カ繭ヲ成造スル爲メ揚リ蠶ト爲リタル後ニ非サレハ之

ヲ差押フルコトヲ得ス

第五百六十九條 差押ノ効力ハ差押物ヨリ生スル天然ノ產出物ニモ

當然及フモノトス

第五百七十條 左ニ掲グル物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

トテ得ズ但本條ノ訴
ノ原因タル事實ヨリ
生スル損害賠償及ヒ
養料ノ請求ニ付テハ
此限ニ在ラス
第四條 判決ニ接着
スル口頭辯論ノ終結
ニ至ル迄ハ訴ニ於テ
提出シタル以外ノ理
由ヲ主張スルコトヲ
得
第五條 婚姻ノ無効
若クハ離婚ノ訴又ハ
縁組ノ無効若クハ離
縁ノ訴ニ付棄却ノ言
渡ヲ受ケタル原告ハ
前訴訟ニ於テ又ハ訴

- 第一 衣服、寢具、家具及ヒ厨但此物カ債務者及ヒ其家族ノ爲メ
缺ク可カラサルトキニ限ル
- 第二 債務者及ヒ其家族ニ必要ナル一ヶ月間ノ食料及ヒ薪炭
- 第三 技術者、職工、勞役者及ヒ穩婆ニ在テハ其營業上缺ク可カ
ラサル物
- 第四 農業者ニ在テハ其農業上缺ク可カラサル農具家畜肥料及
ヒ次ノ收穫マテ農業ヲ續行スル爲メ缺ク可カラサル農産物
- 第五 文武ノ官吏神職僧侶公立私立ノ教育場教師辯護士公證人
及ヒ醫師ニ在テハ其職業ヲ執行スル爲メ缺ク可カラサル物並
ニ身分相當ノ衣服
- 第六 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ニ在テ
ハ第六百十八條ニ規定スル職務上ノ収入又ハ恩給ノ差押ヲ受
ケサル金額但差押ヨリ次期ノ俸給又ハ恩給ノ支拂マテノ日數

ノ併合ニ因リ主張ス
ルヲ得ヘカリシ事實
ヲ獨立ナル訴ノ理由
トシテ主張スルコト
ヲ得ス被告ニ在テハ
反訴ノ理由ト爲スヲ
得ヘカリシ事實ニ付
テモ亦同シ
第六條 民事訴訟法
第百十一條第二項第
三項、第二百十條及
ヒ第二百三十五條乃
至第三百四十一條ノ
規定ハ之ヲ適用セズ
第七條 口頭辯論ノ
期日ニ被告カ出頭セ
サルトキハ原告ノ申

- ニ應シテ之ヲ計算ス
- 第七 藥舖ニ在テハ調藥ヲ爲ス爲メ缺ク可カラサル器具及ヒ藥
品
- 第八 勳章及ヒ名譽ノ標
- 第九 實印其他職業ニ必要ナル印
- 第十 神體、佛像其他禮拜ノ用ニ供スル物
- 第十一 系譜
- 第十二 債務者又ハ其家族ノ未ダ公ニセサル發明ニ關スル物及
ヒ債務者又ハ其家族ノ未ダ公ニセサル著述ノ稿本
- 第十三 債務者又ハ其家族カ學校ニ於テ使用ニ供スル書籍
然レトモ債務者ノ承諾アルトキハ第三號乃至第八號ニ掲ケタル物
ヲ除外シテ差押フルコトヲ得
- 第五百七十一條 差押物保存ノ爲メ特別ノ處分ヲ必要トスルトキハ

立ニ因リ新期日ヲ定
 可シ
 被告ノ在廷セサル場
 合ニ於テ期日ヲ定メ
 タルトキハ其都度被
 告ヲ呼出ス可シ
 闕席判決ハ本條ノ手
 續ノ效アラサルトキ
 ニ限リ被告ニ對シテ
 之ヲ爲スコトヲ得
 第八條 裁判所ハ原
 告若クハ被告ノ自身
 出頭ヲ命ジテ其原告
 若クハ被告又ハ其相
 手方若クハ檢事ノ主
 張シタル事實ニ付原
 告若クハ被告ヲ審訊

執達吏ハ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スコト若シ此カ爲ニ費用ヲ要ス
 ルトキハ債權者ヲシテ之ヲ豫納セシメ又債權者數名關係スルトキ
 其要求額ノ割合ニ從ヒテ其各債權者ヨリ之ヲ豫納セシム可シ
 第五百七十二條 執達吏ハ差押ヲ實施シタル後債權者又ハ裁判所ノ
 特別委任ヲ要セスシテ以下數條ノ規定ニ從ヒテ公ノ競賣法方ヲ以
 テ其差押物ヲ賣却ス可シ
 第五百七十三條 競賣ス可キ物ノ中ニ高價ノモノ有ルトキハ執達吏
 ハ適當ナル鑑定人ヲシテ其評價ヲ爲サシム可シ
 第五百七十四條 差押金錢ハ之ヲ債權者ニ引渡スコト
 執達吏カ金錢ヲ取立テタルトキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノ
 ト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カルルコトヲ債
 務者ニ許シタルトキハ此限ニ在ラス
 第五百七十五條 差押ノ日ト競賣ノ日トノ間ニハ少ナクトモ七日ノ

スルコトヲ得
 審訊ヲ受クヘキ原告
 若クハ被告ガ受訴裁
 判所ニ出頭スル能ハ
 サルトキ又ハ受訴裁
 判所ノ所在地ヨリ遠
 隔ノ地ニ在ルトキハ
 受命判事若クハ受托
 判事ニ依リ審訊ヲ爲
 スコトヲ得
 出頭セサル原告若ク
 ハ被告ニ對シテハ審
 訊期日ニ出頭セサル
 証人ニ對スル規定ヲ
 適用ス
 第九條 和譜ノ調フ
 可キ見込アルトキハ

時間ヲ存スルコトヲ要ス但差押債權者執行力アル正本ニ因リ配當
 ヲ要求スル債權者又ハ債務者カ競賣ヲ更ニ早ク爲サンコトヲ合意
 シタルトキ又ハ差押物ヲ永ク貯藏スルニ付キ不相應ノ費用若クハ
 其物ノ價格ノ著シク減少スル危害ヲ避ケン爲メ競賣ヲ早ク爲スコ
 トノ必要ナルトキハ此限ニ在ラス
 第五百七十六條 競賣ハ差押ヲ爲シタル市町村ニ於テ之ヲ爲ス但差
 押債權者及ヒ債務者カ他ノ地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ合意シタルト
 キハ此限ニ在ラス
 競賣ノ日時及ヒ場所ハ之ヲ公告ス但其公告ニハ競賣ス可キ物ヲ表
 示ス可シ
 第五百七十七條 最高價競買ノ爲メノ競落ハ其價額ヲ三回呼上ケタ
 ル後之ヲ爲ス
 競落物ノ引渡ハ代金ト引換ヘ之ヲ爲ス

裁判所ハ職權ヲ以テ離婚又ハ離縁ノ訴ニ關スル手續ヲ長クモ一個年間に止スルコトヲ得

第十條 裁判所ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ當事者ノ提出セサル事實ヲ斟酌シ且職權ヲ以テ證據調ヘテ爲スコトヲ得但裁判所ニ當事者ヲ審訊スヘシ

第十一條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若シハ無効又ハ離婚若シハ離縁ヲ言渡ス判決ハ

職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第十二條 婚姻事件及縁組事件ノ判決ニ付テハ仮執行ノ宣告ヲ付スルコトヲ得ス第十三條 假處分ニ關シ殊ニ配偶者ノ一方又ハ養子カ住家ヲ去ルノ許可及ヒ養料ノ供給ヲ申立テタル場合ニ於テハ民事訴訟法第七百五十六條乃至第七百六十三條ノ規定ヲ準用ス第十四條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若シ

最高價競買人競買條件ニ定メタル支拂期日又ハ其定ナキトキハ競買期日ノ終ル前ニ代金ノ支拂ヲ爲シテ物ノ引渡ヲ求メサルトキハ更ニ其物ヲ競買ス可シ此場合ニ於テハ前ノ最高價競買人ハ競買ニ加ハルコトヲ得ス且再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キトキハ不足ヲ擔任ス可シ其高キトキハ剩餘ヲ請求スルコトヲ得ス

第五百七十八條 競買ハ賣得金ヲ以テ債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ルニ至ルトキハ直チニ之ヲ止ム可シ第五百七十九條 執達吏賣得金ヲ領收シタルトキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カルルコトヲ債務者ニ許シタルトキハ此限ニアラス

第五百八十條 金銀物ハ其金銀ノ實價ヨリ以下ニ競落スルコトヲ許サス其實價マテニ競買ヲ爲ス者ナキトキハ執達吏ハ金銀ノ實價ニ達スル價額ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却スルコトヲ得

第五百八十一條 執達吏有價證券ヲ差押ヘタルトキハ相場アルモノハ賣却日ノ相場ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却シ其相場ナキモノハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ競買ス可シ第五百八十二條 有價證券ノ記名ナルトキハ執行裁判所ハ買主ノ氏名ニ書換ヲ爲シシメ及ヒ此カ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲ス權ヲ執達吏ニ與フルコトヲ得第五百八十三條 無記名ノ證券ニシテ記名ニ換ヘ又ハ他ノ方法ニ依リ流通ヲ止メタルモノナルトキハ執行裁判所ハ其流通回復ヲ爲カシメ及ヒ此カ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リテ爲ス權ヲ執達吏ニ與フルコトヲ得第五百八十四條 土地ヨリ離レサル前ニ差押ヘタル果實ノ競買ハ其成熟ノ後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス執達吏ハ競買ノ爲メ其收穫ヲ爲サシムル權利アリ

ハ無効又ハ離婚若クハ離縁ヲ言渡シタル判決確定シタルハ

裁判所ノ揭示板ニ揭示シテ之ヲ公告ス可シ

第十五條 民法ノ規定ニ從ヒ檢事ノ職權ヲ以テ起スヲ得ハ

キ無効ノ訴ニ付テハ以下數條ニ定メタル特別ノ規定ニ從フ

第十六條 檢事又ハ第三者ヨリ訴ヲ起ストキハ夫婦又ハ養親子ヲ以テ相手方ト爲ス

夫婦又ハ養親子ノ一方ヨリ訴ヲ起ストキハ他ノ一方ヲ以テ相手方ト爲ス

第十七條 檢事ハ自ラ訴ヲ起サ、ルビト雖モ訴訟ヲ進行シ殊ニ獨立シテ申立ヲ爲シ及ヒ上訴ヲ爲スコトヲ得

第十八條 檢事上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ前審ノ當事者雙方ヲ相手方ト看做ス

檢事ハ訴訟人タル場合ニ於テ當事者ノ一

差押ヘタル額ノ競賣ハ全ク爾ト爲リタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百八十五條 差押債權者、執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者又ハ債務者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ前數條ノ規定ニ依ラス他ノ方法又ハ他ノ場所ニ於テ差押物ノ賣却ヲ爲スコキ旨又ハ執達吏ニ依ラス他ノ者ヲシテ競賣ヲ爲サシム可キ旨ヲ命スルコトヲ得

第五百八十六條 執達吏ハ既ニ差押ヘタル物ニ付キ他ノ債權者ノ爲メ更ニ差押ノ手續ヲ爲スコトヲ得ス
執達吏ハ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ差押調書ノ閱覽ヲ求メテ物ノ照査ヲ爲シ未ダ差押ニ係ラサル物アルトキハ之ヲ差押ヘ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ差押調書ヲ交付シ且總テノ差押物ヲ競賣ニ付スコキモノヲ求ム可シ若シ差押ヲ可キ物アラサルトキハ照査調書ヲ作り既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ之ヲ交付ス可シ

前項ノ求ニ因リ執行ニ關スル債權者ノ委任ハ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ法律上移轉ス
假差押ニ係ル物ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

第五百八十七條 前條ニ掲ケタル物ノ照査手續ハ配當要求ノ効力ヲ生シ又既ニ爲シタル差押ヲ取消ト爲リタルトキハ差押ノ効力ヲ生ス

第五百八十八條 適當ナル期間經過スルモ執達吏競賣ヲ爲ササルトキハ差押債權者及ヒ執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者ハ一定ノ期間内ニ競賣ヲ爲スコキコトヲ催告シ其催告ノ効アラサルトキハ相當ノ命令アラントキ執行裁判所ニ申請スルコトヲ得
第五百八十九條 民法ニ從ヒ配當ヲ要求シ得ヘキ債權者ハ執行力アル正本ニ因ラスシテ賣得金ノ配當ヲ要求スルコトヲ得

方カ上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ他ノ一方ト檢事トヲ相手方ニ看做ス

第五百九十條 前條ノ配當要求ハ其原因ヲ開示シ且裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル者ハ假住所ヲ選定シ執達吏ニ之ヲ爲ス可シ

第十九條 訴訟人タル檢事カ敗訴スル場合ニ於テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ニ從ヒ勝訴者タル相手方ニ生ズル費用ハ國庫ノ負擔トス

第五百九十一條 第五百八十六條第二項及ヒ第五百九十條ノ場合ニ於テ執達吏ハ配當要求ノ有リタルコトヲ配當ニ與カル各債權者及ヒ債務者ニ通知ス可シ
執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者アルトキハ債務者ハ執達吏ノ通知アリタルヨリ三日ノ期間内ニ其債權ヲ認諾スルヤ否ヤヲ執達吏ニ申立ツ可シ
債務者カ認諾セサルコトヲ執達吏ヨリ通知アリタルトキハ債權者ハ其通知アリタルヨリ三日ノ期間内ニ債務者ニ對シ訴ヲ起シ其債權ヲ確定ス可シ

第二十條 禁治産ノ申立ハ治産ヲ禁セラシル可キ者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第五百九十二條 配當ノ要求ハ競賣期日ノ終ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得

第二十一條 申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其申立ニハ申立ノ理由及ル事實及ヒ證據方法ノ表示ヲ包含ス可シ

第五百九十三條 賣得金ヲ以テ配當ニ與カル各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於テ債權者間ニ配當ノ協議調ハサルトキハ其賣得金ヲ供託ス可シ
數多ノ債權者ノ爲メ同時ニ金錢ヲ差押ヘタルトキ之ヲ以テ各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於テモ亦同シ

第二十二條 裁判所ハ申立ニ表示シタル事實及ヒ證據方法ニ依リ職權ヲ以テ心神喪失ノ常況ニ在ルヤ否ヤヲ定ムル爲メニ必要ナル探知ヲ爲シ且適當トスル證據方法ヲ調フ可シ

右ノ場合ニ於テ執達吏ハ其事情ヲ執行裁判所ニ届出ツ可ク其届書ニハ執行手續ニ關スル書類ヲ添附ス可シ

第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行

第五百九十四條 第三者(第三債務者)ニ對スル債權者ノ債權ニシテ金錢ノ支拂又ハ他ノ有體物若クハ有價證券ノ引渡若クハ給付ヲ目的トスルモノノ強制執行ハ執行裁判所ノ差押命令ヲ以テ之ヲ爲ス
第五百九十五條 執行裁判所トシテハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル

開始スルノ前診斷書ノ提出ヲ命スルコトヲ得
 檢事ハ總テノ場合ニ於テ申立ヲ爲シテ訴訟手續ヲ進行スルコトヲ得
 證人及鑑定人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ民事訴訟法第二編第一章第六節及第七節ノ規定ヲ適用ス
 第二十三條 裁判所ハ公開セサル法廷ニ於テ一人又ハ數人ノ鑑定人ノ立會ヲ以テ治産ヲ禁セラル可キ

地ノ區裁判所若シ此區裁判所ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル區裁判所管轄權ヲ有ス
 第五百九十六條 債權者ハ差押命令ノ申請ニ差押ヲ可キ債權ノ種類及ヒ數額ヲ開示ス可シ
 右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
 債權差押ノ命令申請書
 何府何市何町何番地族籍職業
 何縣何郡何村何番地族籍職業
 債權者 何 某
 何府何市何町何番地族籍職業
 何縣何郡何村何番地族籍職業
 第三債務者 何 某
 請求金額
 一金何百圓也
 貨 金
 一右ハ債務者何某ヨリ第三債務者何某ヘノ貸金ニシテ第三債務者何某ヨリ債務者ニ支拂フ可キモノナリ
 二以上ノ如クナルヲ以テ債權者ヨリ債務者ニ係ル何年(何)第何號何

モノヲ訊問ス可シ此訊問ハ受託判事ヲシテ之ヲ爲サシムコトヲ得
 右訊問ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ實施シ難シ又ハ裁判ノ爲メニ必要ナラス又ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ健康ニ害アリトスルハ之ヲ爲サルコトヲ得
 第二十四條 禁治産ノ宣言ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス
 右宣言ハ豫メ治産ヲ禁セサル可キ者ノ心

々裁判所ノ執行力アル判決ニ基ク金額并ニ訴訟費用辯償ノ爲メ該債權ニ對シ差押命令ヲ發セラレ度候也
 年月日 債務者 何 某印
 何々裁判所 判事 何 某印
 第五百九十七條 差押命令ハ豫メ第三債務者及ヒ債務者ノ審訊ヲ經スシテ之ヲ發ス
 第五百九十八條 金錢ノ債權ヲ差押フ可キトキハ裁判所ハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲スコトヲ禁シ又債務者ニ對シ債權對處分殊ニ其取立ヲ爲スコトヲ命ス可シ
 差押命令ハ職權ヲ以テ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達シ又債權者ニハ其送達シタル旨ヲ通知ス可シ
 差押ハ第三債務者ニ對スル送達ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス
 第五百九十九條 抵當アル債權ノ差押ノ場合ニ於テハ債權者ハ債務

神喪失ノ常況ニ付キ
一人又ハ數人ノ鑑定
人ヲ訊問シタル後ニ
非サレハ之ヲ爲スコ
トヲ得ス

第二十五條 裁判所
ハ治産ヲ禁セラル可
キ者ノ身體ノ監護又
ハ財産ノ保存ニ付キ
必要ナル處分ヲ命ス
ルコトヲ得

第二十六條 訴訟手
續費用ハ治産ヲ禁シ
タル場合ニ於テハ禁
治産者之ヲ負担シ其
他ノ場合ニ於テハ禁
治産ノ申立ヲ爲シタ

者ノ承諾ヲ要セスシテ其債權ノ差押ヲ登記簿ニ記入スル權利アリ
此記入ノ申請ハ裁判所ニ之ヲ爲スコシ其申請ハ差押命令ノ申請ト
之ヲ併合スルコトヲ得

裁判所ハ義務ヲ負フタル不動産ノ所有者(第三債務者)ニ差押命令
ヲ送達シタル後記入ノ手續ヲ爲スコシ

第六百條 差押ヘタル金錢ノ債權ニ付テハ差押債權者ノ選擇ニ從ヒ
代位ノ手續ヲ要セスシテ之ヲ取立ツル爲メ又ハ支拂ニ換ヘ券面額
ニテ差押債權者ニ之ヲ轉付スル爲メ命令アランコトヲ申請スルコ
トヲ得

右命令ノ送達ニ付テハ第五百九十八條第二項ノ規定ヲ準用ス

債權(取立轉付)ノ命令申請

債權者
何府何市何町何番地族籍職業
何縣何郡何村何番地族籍職業
何府何市何町何番地族籍職業

第三債務者

何

右債權者ヨリ債務者何某ニ係ル何年何月何日ノ差押命令ニ依リ差
押ヘタル第三債務者何某ヨリ債務者ヘ支拂フ可キ(物件)ノ債權ニ付
(取立)ノ命令御發相成度候也

年月日 債權者 右 某
何々裁判所 判事 何 某殿 某印

第六百一條 支拂ニ換ヘ券面額ニテ債權ヲ轉付スル命令アル場合ニ
於テハ其債權ノ存スル限リハ第五百九十八條第二項ノ手續ヲ爲ス
ニ因リ債務者ハ債權ノ辨濟ヲ爲シタルモノト看做ス

第六百二條 取立ノ爲メノ命令ハ其債權ノ全額ニ及フモノトス但執
行裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ差押債權者ヲ審訊シテ差押額ヲ其
債權者ノ要求額マテニ制限シ其超過スル額ノ處分殊ニ取立ヲ爲ス
ヲ許スコトヲ得其制限シタル部分ニ限リ他ノ債權者ハ配當要求ヲ

ル者之ヲ負擔スヘシ
但檢事ハ申立ヲ爲シ
タルトキハ國庫之ヲ
負擔ス
第二十七條 禁治産
ニ付キ爲シタル決定
ハ職權ヲ以テ申立人
及ヒ檢事ニ之ヲ送達
ス可シ
第二十八條 禁治産
ヲ宣言スル決定ハ法
律上ノ後見人アルハ
ハ其後見人ニ職權ヲ
以テ之ヲ通知ス可シ
第二十九條 申立人
及ヒ檢事ハ禁治産ノ
申立ヲ却下スル決定

ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
 抗告裁判所訴訟手續ニハ第二十二條ノ規定ヲ準用ス
 第三十條 禁治産ヲ宣告スル決定ニ對シテハ一個月ノ期間内ニ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得
 訴ヲ起スノ權利ハ禁治産者、其後見人及民法ノ規定ニ從ヒ禁治産ノ申立ヲ爲スノ權ヲ有スル者ニ屬ス
 右期間ハ禁治産者ニ對シテハ禁治産ヲ知

爲スコトヲ得ス
 右許可ハ第三債務者及ヒ債權者ニ通知ス可シ
 第六百三條 手形其他裏書ヲ以テ移轉スルコトヲ得ル證券ニ因レル債權ノ差押ハ執達吏其證券ヲ占有シテ之ヲ爲ス
 第六百四條 傳給又ハ此ニ類スル繼續收入ノ債權ノ差押ハ債權額ヲ限トシ差押後ニ收入ス可キ金額ニ及フモノトス
 第六百五條 職務上收入ノ差押ハ債務者ノ轉官兼任又ハ増俸ニ因ル收入ニモ亦及フモノトス
 第六百六條 債務者ハ債權ニ關スル所持ノ證書ヲ差押債權者ニ引渡ス義務アリ債權者ハ差押命令ニ基キ強制執行ノ方法ヲ以テ其證書ヲ債務者ヨリ取上ケシムルコトヲ得
 第六百七條 第五百五條第二項ニ從ヒテ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免カルルコトヲ許ス可キトキハ差押ハ

リタル日ヲ以テ始マ
 リ其他ノ者ニ對シテハ後見ノ選定ヲ以テ始マリ又法律上ノ後見人ノ場合ニ於テハ其決定ヲ法律上ノ後見人ニ通知スルヲ以テ始マル
 第三十一條 訴ハ區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス
 第三十二條 禁治産ニ對シテ不服ヲ申立ル訴ニハ他ノ訴ヲ併合スルコトヲ得ス
 反訴ハ之ヲ爲スコト

タル金錢債權ニ付テハ取立ノ命令ノミヲ爲スコシ但此命令ハ第三債務者ヲシテ債務額ヲ供託セシムル效力ノミヲ有ス
 第六百八條 債權者取立ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ執行裁判所へ届出ツ可シ
 債權取立ノ届
 債權者 何府何市何町何番地族籍職業
 債務者 何府何市何町何番地族籍職業
 第三債務者何某ヨリ債務者ニ支拂フ可キ債權(金員物件)ハ何年何月日ノ取立命令ニ依リ第三債務者ヨリ悉皆取立候間此段及御届候也
 年月日 債權者 何 某段
 何々裁判所 判事 何 某段
 第六百九條 差押債權者ハ第三債務者ヲシテ差押命令ノ送達ヨリ七

ヲ許サス
 第三十二條 禁治産者カ訴ヲ起サントスルトキハ其申立ニ因リ受訴裁判所ノ裁判長ハ訴訟代理人トシテ辯護士ヲ之ニ附添ハシム可シ
 第三十四條 第六條及ヒ第七條ノ規定ハ本章ニモ之ヲ準用ス
 第三十五條 第二十三條及ヒ第二十四條第二項ノ規定ハ不服申立ノ訴ニ付テノ訴訟手續ニ之ヲ準用ス
 裁判所ハ區裁判所ニ

日ノ期間内ニ書面ヲ以テ左ノ陳述ヲ爲サシメンコトヲ裁判所ニ申立ツルコトヲ得
 第一 債權ノ認諾ノ有無及ヒ其限度並ニ支拂ヲ爲ス意思ノ有無及ヒ其限度
 第二 債權ニ付キ他ノ者ヨリ請求ノ有無及ヒ其種類
 第三 債權カ既ニ他ノ債權者ヨリ差押ヘラレタルコトノ有無及ヒ其請求ノ種類
 右ノ陳述ヲ求ムル催告ハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ第三債務者陳述ヲ怠リタルトキハ此ニ因リテ生スル損害ニ付キ其責ニ任ス
 第三債務者ヲシテ陳述ヲサシムルノ申請
 債權者某ヨリ債務者某ニ係ル何年何月何々ノ命令ニ基キ第三債務者ヨリ債務者ニ支拂フヘキ債權ノ差押ヲシタルヲ以テ第三債務者ニ訴訟法第六百九條ニ抵觸ノ事情有之時ハ速ニ其旨届出候様御命令相成度此段申請仕候也

年月日

債權者

何

某印

何々裁判所

判事

何

何

某印

於テ爲シタル鑑定ヲ十分ナリト認ムルトキハ鑑定人ノ訊問ヲ爲サハルコトヲ得
 第三十六條 不服申立ノ訴ヲ理由アリトスルトキハ禁治産者ニ宣告シタル決定ヲ取消ス可シ
 然レモ此取消ノ判決ハ後見人ノ既ニ爲シタル行爲ノ効力ニ影響ヲ及ボサス
 第三十七條 不服申立ノ訴ニ關スル訴訟費用ニ付イテハ第二十六條ノ規定ヲ準用

第六百十條 債權者カ命令ヲ旨趣ニ基キ第三債務者ニ對シテ訴ヲ起スニ至リタルトキハ一般ノ規定ニ從ヒテ管轄ヲ有スル裁判所ニ其訴ヲ起シ且債務者内國ニ在リテ住所ノ知レタルトキハ其訴訟ヲ之ニ告知ス可シ
 第六百十一條 債權者カ取立ヲ爲ス可キ債權ノ行用ヲ怠リタルトキハ此カ爲メ債務者ニ生シタル損害ノ責ニ任ス
 第六百十二條 債權者ハ命令ニ因リ取立ノ爲メ取得シタル權利ヲ拋棄スルコトヲ得但此カ爲メ其請求ヲ害セラルコト無シ
 此拋棄ハ裁判所ニ届書ヲ差出シテ之ヲ爲ス但其謄本ハ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達ス可シ
 命令取得ノ拋棄届

ス
 第三十八條 受訴裁判所ハ禁治産事件ニ付キ爲シタル總テノ終局判決ヲ區裁判所ニ通知ス可シ
 第三十九條 禁治産ノ解止ニ付テハ第二十五條ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス
 第四十條 準禁治産事件ニ付テハ左ノ特別ナル規則ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス
 第二十二條第二項ハ浪費者ニ之ヲ適用セ

債權者其ヨリ債務者某ニ係ル何年何月何日何々裁判所第三債務者某ニ對スル債權取立命令ヲ以テ取得シタル權利拋棄致度候間及御届候也
 年月日 債權者 何 某印
 何々裁判所 判事 何 某印
 第六百十三條 差押ヘタル債權カ條件附若クハ有期ナルトキ又ハ反對給付ニ繫リ若クハ他ノ理由アリテ其取立ノ困難ナルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ取立ニ換ヘ他ノ換價方法ヲ命スルコトヲ得
 債務者内國ニ在リテ住所ノ知レタルトキハ其申立ニ許ス決定前ニ之ヲ審訊ス可シ
 第六百十四條 有體物ノ引渡又ハ給付ヲ請求ニ對スル強制執行以下數條ノ規定ヲ斟酌シテ第五百九十八條乃至第六百十二條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

又同條第三項、第二十五條、第三十三條及ヒ檢事ニ關スル規定ハ總テノ準禁治産者ニ之ヲ適用セス
 準禁治産ヲ解止スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
 法律第九十五号
 非訟事件手續法
 第一章 認可及ヒ許可ノ申請手續
 第一條 民法ノ規定ニ從ヒ區裁判所ノ認

第六百十五條 有體物ノ請求ノ差押ニ付テハ其動産ヲ債權者ノ委任シタル執達吏ニ引渡ス可キコトヲ命ス可シ
 右動産ノ換價ニ付テハ差押物ノ換價ニ關スル規定ヲ適用ス
 第六百十六條 不動産ノ請求ノ差押ニ付テハ債權者ノ申立ニ因リ其不動産ヲ不動産所在地ノ區裁判所ヨリ命シタル保管人ニ引渡ス可キコトヲ命ス可シ
 引渡シタル不動産ニ付テノ強制執行ハ不動産ニ對スル強制執行ニ付テノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス
 第六百十七條 有體物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ付テハ支拂ニ換ヘ轉付スル命令ヲ爲スコトヲ得ス
 第六百十八條左ニ掲グル債權ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス
 第一 法律上ノ養料
 第二 債務者カ義捐建設所ヨリ又ハ第三者ノ慈善ニ因リ受クル

可又ハ許可ヲ求ムル申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申請ニ付テハ裁判所ハ事情ニ從ヒ利害關係人ノ出頭又ハ當事者ノ自身出頭ヲ命シ公開セサル法廷ニ於テ審訊スルコトヲ得
第三條 申請ニ付テハ決定ニ對シテハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二章 失踪事

繼續ノ收入但債務者及ヒ其家族ノ生活ノ爲メ必要ナルモノニ限ル

第三 下士兵卒ノ給料並ニ恩給及ヒ其遺族ノ扶助料

第四 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル軍人軍屬ノ職務上ノ收入

第五 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ノ職務上ノ收入、恩給及ヒ其遺族ノ扶助料

第六 職工勞役者又ハ雇人カ其勞力又ハ役務ノ爲ニ受クル報酬
第一號、第五號、第六號ノ場合ニ於テ職務上ノ收入、恩給其他ノ收入カ一个年間ニ三百圓ヲ超過スルトキハ其超過額ノ半額ヲ差押フルコトヲ得

第六百十九條 數名ノ差押債權者ノ爲メ同時ニ爲スコキ債權ノ差押ニ付テハ前數條ノ規定ヲ準用ス

件ニ關スル請求手續

第四條 失踪ノ推定宣言又ハ財産占有其他ノ請求ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
請求ニハ其理由トスル事實ヲ表示シ其證據書類アルトキハ之ヲ添付ス可シ
第五條 前條各種ノ請求ハ之ヲ併合スルコトヲ得
第六條 失踪ノ推定又ハ宣言ノ請求ニ付テハ前二條ノ外尙ホ

第六百二十條 執行力アル正本ヲ有スル債權者及ヒ民法ニ從ヒ配當

ノ要求ヲ爲シ得ヘキ債權者ハ差押債權者カ取立ヲ爲シ其旨ヲ執行裁判所ニ届出ツルマテ又ハ執達吏カ賣得金ヲ領收スルマテ配當ヲ要求スルコトヲ得但執行力アル正本ニ因ラヌコト配當ヲ要求スル債權者ニ付テハ第五百九十一條及ヒ第五百九十一條第二項第三項ノ規定ヲ適用ス
支拂ニ換ヘテノ轉付ノ命令アリタル後ハ配當ノ要求ヲ爲スコトヲ得ス

右配當要求ハ職權ヲ以テ之ヲ第三債務者債務者及ヒ差押債權者ニ送達シ又既ニ爲シタル差押カ取消ト爲リタルトキハ執行力アル正本ニ因リ要求シタル債權者ノ爲メ要求ノ順序ニ因リ差押ノ効力ヲ生ス

配當要求書

辨シ若シ之ヲ言渡サ
ルトキハ請求者之
ヲ負擔ス
但檢事請求ヲ爲シタ
ルトキハ本人ノ負擔
トス

第三章 相續ノ

限定受諾ニ關

スル手續

第十條 限定受諾者
ハ適法ノ期間内ニ相
續財産排盡ノ計算ヲ
完了シ其計算書ヲ相
續地ノ區裁判所ニ差
出ス可シ

第十一條 利害關係
人ハ自己ノ費用ヲ以

トシテ呼出アランコトヲ口頭辯論ノ第一期日マテニ申立ツルコト
ヲ得

右ノ場合ニ於ケル裁判ハ呼出ヲ受ケタル債權者ニ利害ヲ及ホス効
力アリ

第六百二十四條 差押債權者取立手續ヲ怠リタルトキハ執行力アル
正本ニ因リ要求シタル各債權者ハ一定ノ期間内ニ取立ヲ爲ス可キ
コトヲ催告シ其催告ノ効アラサルトキハ執行裁判所ノ許可ヲ得テ
自ラ取立ヲ爲スコトヲ得

第六百二十五條 不動産ヲ目的トセス又前數條ニ掲ケタル以外ノ財
産權ニ對スル強制執行ニ付テハ本款ノ規定ヲ準用ス

若シ第三債務者ナキトキハ差押ハ債務者ニ權利ノ處分ヲ禁スル命
令ヲ送達シタル日時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

右ノ場合ニ於テハ裁判所ハ特別ノ處分殊ニ其權利ノ管理若クハ讓

渡ヲ命スルコトヲ得

第四款 配當手續

第六百二十六條 配當手續ハ動産ニ對スル強制執行ニ際シ競賣期日
又ハ金錢差押ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ債權者間ノ協議調ハサル
爲メ金額ヲ供託シタルトキ之ヲ爲ス

第六百二十七條 裁判所ハ事情届書ニ基キ七日ノ期間内ニ元金、利
息、費用其他附帶ノ債權ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ各債權者ニ催
告ス可シ

第六百二十八條 前條ノ期間滿了後裁判所ハ配當表ヲ作ル可シ

右期間ヲ遵守セサル債權者ノ債權ハ配當表ヲ作ルニ際シ配當要求
並ニ届書ノ旨趣及ヒ其憑據書類ニ依リ之ヲ計算ス但後ニ債權額ヲ
補充スルコトヲ許サス

第六百二十九條 裁判所ハ配當表ニ關スル陳述及ヒ配當實施ノ爲メ

テ區裁判所ニ計算書
ノ閱覽及ヒ其謄本ノ
下付ヲ求ムルコトヲ
得

第十二條 法律上又
ハ裁判上相續財産ヲ
管理スル者ハ限定受
諾者ト同シノ計算完
了ノ責ニ任ス

第四章 國ニ屬

スル相續財産

領収ノ手續

第十三條 相續人ア
ラサル財産アルトキ
ハ相續地ノ地方行政
官廳ハ財産所在地ノ
區裁判所ニ其引渡ヲ

請求ス可シ

第十四條 財産引渡ノ請求ヲ受ケタル裁判所ハ事實ヲ調査シ其請求ヲ公示ス可シ

第十五條 公示ハ左ノ諸件ヲ具備シ請求ヲ受ケタル區裁判所

ノ揭示板ニ揭示シ且

官報又ハ公報ニ掲載

シテ之ヲ爲ス可シ

第一 被相続人ノ

氏名職業住所居所

及死亡ノ年月日

第二 財産引渡ノ

請求ノ要領

第十六條 民法ノ規

期日ヲ指定シ其期日ニハ各債權者及ヒ債務者ヲ呼出ス可シ但債務者ノ所在明カナラサルトキ又ハ外國ニ在ルトキハ呼出ヲ爲スコトヲ要セス

配當表ハ各債權者及ヒ債務者ニ閱覽セシムル爲メ過クモ期日ノ三日前ニ裁判所書記課ニ之ヲ備置ク可シ

第六百三十條 期日ニ於テ異議ノ申立ナキトキハ配當表ニ從ヒテ其配當ヲ實施ス可シ

停止條件附ノ債權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託シ民法ニ從ヒテ條件ノ成否ニ依リ後ニ之ヲ支拂ヒ又ハ更ニ配當ス可シ

第五百九十一條第三項ノ場合又ハ假差押ノ場合ニ於テ未タ確定セサル債權其他異議アル債權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託ス可シ

配當實施ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

第六百三十一條 異議ノ申立アルトキハ他ノ債權者ハ直チニ陳述ヲ

定ニ從ヒ相續權ヲ有スル者ハ公示ノ日ヨリ六个月内ニ行政官廳ノ請求ニ對シ其請求ヲ受ケタル裁判所ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第十七條 前條ノ期

間内ニ異議ノ申立ア

ラス又ハ其申立ヲ不

當ト爲ス裁判確定シ

タルトキハ裁判所ハ

民法財産取得編第三

百四十六條ノ規定ニ

從ヒテ保存スル供託

所ノ金額領収証ヲ請

求者タル行政官廳ニ

爲ス可シ若シ關係人異議ヲ正當ナリト認ムルトキ又ハ他ノ方法ニ

於テ合意スルトキハ之ニ從ヒ配當表ヲ更正シテ配當ヲ實施ス可シ

異議ノ完結セサルトキハ異議ナキ部分ニ限り配當ヲ實施ス可シ

第六百三十二條 期日ニ出頭セサル債權者ハ配當表ノ實施ニ同意シ

タルモノト看做ス

若シ期日ニ出頭セサル債權者カ他ノ債權者ヨリ申立タル異議ニ

關係ヲ有スルトキハ其債權者ハ異議ヲ正當ナリト認メサルモノト

看做ス

第六百三十三條 期日ニ於テ異議ノ完結セサルトキハ異議ヲ申立テ

タル債權者ハ他ノ債權者ニ對シ訴ヲ起シタルコトヲ期日ヨリ七日

ノ期間内ニ裁判所ニ證明ス可シ若シ其期間ヲ徒過シタル後ハ裁判

所ハ異議ニ拘ハラズ配當ノ實施ヲ命ス可シ

第六百三十四條 異議ヲ申立タル債權者前條ノ期間ヲ怠リタルト

交付ス可シ

第五章 財産ノ封印及ヒ目錄調製手續

第十八條 財産ノ封印ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ其財産所在地ノ區裁判所ノ裁判事之ヲ爲ス

封印ニハ官印ヲ用ニ可シ

第十九條 封印ヲ爲ス可キ財産カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ區裁判所ノ裁判事ハ市町村長ニ囑託シテ封印ヲ爲サシムルコトヲ得封

シ

囑託ヲ受ケタル市町村長ニ付テモ下敷條ノ規定ヲ準用ス

第二十條 封印ハ証人二人立會ノ上之ヲ爲ス可シ封印ヲ請求シタル者ハ其封印ニ立會フコトヲ得

第二十一條 封印ヲ爲シタルトキハ直ニ調書ヲ作り立會人ニ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ區

キト雖モ配當表ニ從ヒテ配當ヲ受ケタル債權者ニ對シ訴ヲ以テ優先權ヲ主張スル權利ハ配當實施ノ爲メ妨ケラルルコト無シ

第六百三十五條 異議ヲ申立テタル債權者ノ訴ニ付テハ配當裁判所之ヲ管轄ス然レトモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ其配當裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス若シ數箇ノ訴ノ提起アリタル場合ニ於テ一ノ訴ヲ地方裁判所カ管轄スルトキハ其他ノ訴ヲモ亦之ヲ管轄ス但各債權者總テノ異議ニ付キ配當裁判所ノ裁判ヲ受ク可キコトヲ合意シタルトキハ此限ニ在ラス

第六百三十六條 異議ニ付キ裁判ヲ爲ス判決ニハ配當額ノ係争部分ヲ如何ナル債權者ニ如何ナル數額ヲ以テ支拂フ可キヤ決定ム可シ若シ之ヲ定ムルコトヲ適當トセサルトキハ判決ニ於テ新ナル配當者ノ調製及ヒ他ノ配當手續ヲ命ス可シ

第六百三十七條 異議ヲ申立テタル債權者カ口頭辯論ノ期日ニ出席セサルトキハ異議ヲ取り下ケタルモノト看做ス旨ノ闕席判決ヲ爲ス可シ

第六百三十八條 前二條ノ判決確定ノ證明アルトキハ配當裁判所ハ其判決ニ基キ支拂又ハ他ノ配當手續ヲ命ス

第六百三十九條 裁判所ハ配當表ニ依リテ左ノ手續ヲ爲シ配當ヲ實施ス可シ

債權全部ノ配當ヲ受ク可キ債權者ニハ配當額支拂證ヲ交付スルト同時ニ其所持スル執行力アル正本又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス可シ

債權一分ノミノ配當ヲ受ク可キ債權者ニハ執行力アル正本又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ニ配當額ヲ記入シテ返還シ且配當額支拂證ヲ交付スルト同時ニ右債權者ヨリ金額ヲ證記シタル受取書ヲ差出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス可シ

出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス可シ

裁判所判事其事由ヲ
附記ス可シ

第二十二條 調書ニ
ハ左ノ諸件ヲ具備ス
可シ

第一 封印ヲ請求
シタル者ノ氏名職
業及住所

第二 封印ノ理由

第三 封印ヲ爲シ
タル場所及ヒ物

第二十三條 日用品
其他封印ヲ附セサル
物アルトキハ之ヲ調
書ニ略記ス可シ

第二十四條 封印ヲ
附シタルモノニ鎖鑰

期日ニ出頭セサル債權者ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託ス可シ
右ノ手續ヲ爲シタルトキハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ニス可シ

第二節 不動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第六百四十條 不動産ニ對スル強制執行ハ左ノ方法ヲ以テ之ヲ爲ス

第一 強制競賣

第二 強制管理

債權者ハ自己ノ選擇ニ依リ一箇ノ方法ヲ以テ又ハ二箇ノ方法ヲ併
シテ執行セシムルコトヲ得

強制管理ハ假差押ノ執行ノ爲ニモ亦之ヲ爲ス

第六百四十一條 不動産ニ對スル強制執行ニ付テハ其不動産所在地
ノ區裁判所執行裁判所トシテ之ヲ管轄ス若シ其不動産數箇ノ區裁
判所ノ管轄區内ニ散在スルトキハ第二十六條ノ規定ヲ適用ス

強制執行ハ申立ニ因リテ裁判所之ヲ爲ス

第二款 強制競賣

第六百四十二條 強制競賣ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要
ス

第一 債權者、債務者及ヒ裁判所ノ表示

第二 不動産ノ表示

第三 競賣ノ原因タル一定ノ債權及ヒ其執行ヲ得ヘキ一定ノ債
務名義

不動産強制競賣ノ申請

何府何市何町何番地族籍職業

何縣何郡何村何番地族籍職業

某

債權者

何府何市何町何番地族籍職業

何

某

債務者

何

某

請求金額

アルトキハ之ヲ閉鎖
シテ封印除去ニ至ル
迄區裁判所書記課其
鑰ヲ預ル可シ

第二十五條 封印ヲ
終リタルトキハ其財
産ノ保管人ヲ命ス可
シ但保管人ハ成年者
ナルコトヲ要ス

第二十六條 區裁判
所判事封印之請求ヲ
受ケタルトキハ速ニ
之ヲ爲ス可シ若シ後
レタルトキハ其理由
ヲ調書ニ記載スルコ
トヲ要ス

第二十七條 封印ノ

調書ハ判事ト同伴シタル書記之ヲ二通ニ作リ其一通ハ區裁判所ノ書記課ニ保存シ他ノ一通ハ封印請求者又ハ保管人ニ交付シ受領証ヲ取置ク可シ

第二十八條 何人ニ限ラス區裁判所判事ヨリ封印ノ立會ヲ求メラレタルモノ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムトキハ刑法第七十九條ニ掲グル刑ニ處ス

第二十九條 封印ノ

一金何圓也
 貸付金
 自何年何月利子
 至何年何月

合計金何圓

右金額ハ債權者ヨリ債務者ニ係ル何年何月何日何々裁判所ノ執行力アル判決ニ依リ債務者ヨリ支拂フ可キモノニ付債務者所有ノ別紙目錄ノ通り地所建物競賣決定被成下度此段申請仕候也

年月日 債權者 何 某

何々裁判所 判事 何 某 股

競賣地所目錄

所有主 何府何市何町何番地 何 某 印

何府何市何町何番地
 何縣何郡何村何番地
 何府何市何町何番地
 何縣何郡何村何番地

此地價金何圓何十錢

一全

除去ヲ請求スル權利ヲ有スル者左ノ如シ

第一 封印ヲ請求スル權利ヲ有スル者

第二 財産ノ管理

人

第三條 封印ノ除去ハ豫メ其日時ヲ定メ既ニ知レタル利害關係人及ヒ財産ノ管理

第六百四十三條 申立ニハ執行力アル正本ノ外左ノ證書ヲ添附ス可シ

第一 登記簿ニ債務者ノ所有トシテ登記シタル不動産ニ付テハ登記判事ノ認證書

第二 登記簿ニ登記アラサル不動産ニ付テハ債務者ノ所有タルコトヲ證ス可キ證書

一土藏
 但全

一土藏
 但全

第三十一條 封印ハ一箇ノ物ニ付キ之ヲ除去シ其目錄ヲ作り了リタル後ニ非サレハ次ノ物ニ付キ之ヲ除去スルコトヲ得ス

第三十二條 封印ノ除去ハ封印ヲ爲ス時ト同ク証人立會ノ上之ヲ爲ス可シ

第三十三條 左ニ記載シタル者ハ封印ノ除去ニ付キ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第一 利害關係人

第二 財産ノ管理人

第三 地所ニ付テハ國郡市町村、字、番地、地目、反別若クハ坪數、土地臺帳ニ登錄シタル地價及ヒ其地所ニ付キ納ム可キ一年ノ租稅其他ノ公課ヲ證ス可キ證書

第四 建物ニ付テハ國郡市町村、字、番地、構造ノ種類、建坪及ヒ其建物ニ付納ム可キ一年ノ公課ヲ證ス可キ證書

第五 地所建物ニ付キ貸貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ借賃ヲ證ス可キ證書

第三號、第三號及ヒ第四號ノ要件ニ付テハ債權者公簿ヲ主管スル官廳ニ其證明書ヲ求ムルコトヲ得

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ證明スル能ハサルトキハ債權者ハ競賣申立ノ際其取調ヲ執行裁判所ニ申請スルコトヲ得但此場合ニ於テハ裁判所ハ執達吏ヲシテ其取調ヲ爲サシム可シ

強制管理ノ爲メ既ニ不動産ヲ差押ヘタル場合ニ於テ其執行記録ニ

第三 檢事

第三十四條 封印ノ除却シタルトキハ第二十一條ノ規定ニ從ヒ直チニ其調書ヲ作ルヘシ

第三十五條 調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印除去ノ異議アラザリシコト又異議アリタルトキハ其異議申立ノ却下セラレ又ハ之ヲ取下ケタルコト

第二 封印ヲ爲シ

第一號乃至第五號ノ要件ヲ記載シタルモノ有ルトキハ其證書ヲ添附スルコトヲ要セス

第六百四十四條 競賣手續ノ開始決定ニハ同時ニ債權者ノ爲メ不動産ヲ差押フルコトヲ宣言ス可シ

差押ハ債務者カ不動産ノ利用及ヒ管理ヲ爲スコトヲ妨ケス

差押ハ其決定ヲ債務者ニ送達スルニ因リ其効力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第六百四十五條 裁判所ハ競賣手續開始ノ決定ヲ爲シタル不動産ニ付キ強制競賣ノ申立アルモ更ニ開始決定ヲ爲スコトヲ得ス

右申立ハ執行記録ニ添附スルニ因リ配當要求ノ効力ヲ生シ又既ニ開始シタル競賣手續取消ト爲リタルトキハ第六百四十九條第一項ノ規定ヲ害セサル限りハ開始決定ヲ受ケタル効力ヲ生ス

假差押ノ命令アリタル不動産ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

タルヨリ之ヲ除去スルニ至ルマテ其封印ニ何等ノ變更ヲ來サ、リシコト若シ變更ヲ來セシトキハ其事情

第三十六條 封印ヲ爲シ及ヒ之ヲ除去スル費用ハ其財産ノ負擔トス

第三十七條 封印除去ノ異議ハ其封印ヲ爲シタル區裁判所ニ之ヲ申立ツ可シ

異議申立ニハ申立人ノ關係及ヒ申立ノ理由ヲ包含ス可シ

第六百四十六條 配當要求ハ其原因ヲ開示シ且裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル者ハ假住所ヲ選定シテ執行裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

右要求ハ競落期日ノ終ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得

配當要求ノ申請

債權者	何府何市何町何番地族職職業	某
債務者	何府何市何町何番地族職職業	某
請求金額	何	
一金何圓	貸付元金	
一金何圓	自何年何月何日利子	
一金何圓	至何年何月何日	

合計金何圓

右金額ハ債權者債務者ノ何年(何)第何號何々裁判所ノ判決ニ依リ債務者ヨリ受取ルヘキ權利ヲ有シ候ニ付キ債權者何某ノ申立ニ因リ開始セラレタル債務者何某所有ノ不動産競賣會却代金ヨリ配當ヲ

第三十八條 異議ヲ申立タルトキハ其申立ノ却下セラレ又ハ之ヲ取下ケタル後ニ非サレハ封印ノ除去ヲ爲スコトヲ得ス

第三十九條 封印除去ノ異議ハ其除去ニ着手シタル後ハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第四十條 異議申立ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四十一條 財産目

第六百四十七條 執行裁判所ハ前二條ノ申立及ヒ要求アリタルコトヲ利害關係人ニ通知ス可シ

執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者アルトキハ債務者ハ右通知アリタルヨリ三日ノ期間内ニ其債權ヲ認諾スルヤ否ヤヲ裁判所ニ申出ツ可シ

債權者カ認諾セサルコトヲ裁判所ヨリ通知アリタルトキハ債權者ハ其通知アリタルヨリ三日ノ期間内ニ債務者ニ對シ訴ヲ起シ其債權ヲ確定ス可シ

第六百四十八條 左ニ掲クル者ヲ競賣手續ニ於テノ利害關係人ト爲ス

受ケ度此段及ヒ要求候也	年月日	債權者	何	某印
何々區裁判所	判事	何	某段	

録ハ財産ニ封印アルトキハ其除去ノ際公証人ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第四十二條 財産目錄ハ左ノ各人ヲ適法ニ呼出シ區裁判所判事ノ面前ニ於テ之ヲ作ルヘシ

第一 知レタル利害關係人

第二 財産ノ管理人

第三 檢事

第六百四十九條 差押債權者ノ債權ニ先ダツ債權ニ關スル不動産ノ負擔ヲ競落人ニ引受ケシムルカ又ハ賣却代金ヲ以テ其負擔ヲ辨濟スルニ足ル見込アルトキニ非サレハ賣却ヲ爲スコトヲ得ス

不動産ハ賣却ニ因リ登記簿ニ記入ヲ要スル總テノ不動産上ノ負擔ヲ免カルルモノトス但競落人其負擔ヲ引受ケタルトキハ此限ニ在ラス

登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産ノ負擔ハ競落人之ヲ引受クルモノトス

第一 差押債權者及ヒ執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者

第二 債務者

第三 登記簿ニ記入アル不動産上權利者

第四 不動産上權利者トシテ其債權ヲ證明シ執行記録ニ備フ可キ届出ヲ爲シタル者

第四十三條 目錄ニハ左ノ諸件ヲ具備スヘシ

第一 適法ニ呼出サレタル人

第二 出席シタル者及闕席シタル者

第三 各不動産ノ形狀

第四 動産ノ種類及ヒ數量

第五 証書類

第四十四條 財産目錄ニハ立會タル各人署名捺印ス可シ

第六百五十條 權利ヲ取得スル第三者其取得ノ際差押又ハ競賣ノ申立アリタルコトヲ知リタルトキハ差押ノ効力ニ對シ其善意ナリシコトヲ主張スルコトヲ得ス

若シ不動産カ差押ノ原因タル債權ノ爲メ義務ヲ負擔スルトキハ差押後所有ノ移轉シタル場合ニ限り新所有者其取得ノ際差押又ハ競落ノ申立アリタルコトヲ知ラサルトキト雖モ競賣手續ヲ續行ス可シ

競賣申立ノ取下ニ因リテ差押ハ消滅ス

第六百五十一條 裁判所ハ競賣手續開始ノ決定ヲ爲ス際聽權ヲ以テ競賣ノ申立アリタルコトヲ登記簿ニ記入ス可キ旨ヲ登記判事ニ囑託ス可シ

登記判事ハ前項ノ囑託ニ從ヒテ記入ヲ爲ス可シ

第四十五條 目錄調製ニ關スル費用ハ其財産ノ負担トス

証券印税規則

○明治十七年五月

一日第十一号布告

明治十七年(七月)第八

十一號布告証券印税

規則別冊ノ通政正シ

明治十七年七月一日

ヨリ施行ス

第一條 凡ソ財産ノ

授受及契約ノ證明ニ

用ラル証書帳簿ハ此

第六百五十二條 登記判事ハ前條ニ掲ケタル記入ヲ爲シタル後登記

簿ノ謄本ヲ裁判所ニ送付シ不動産上權利者ヨリ差出シタル證書ア

ルトキハ其抄本ヲモ送付ス可シ

第六百五十三條 豫メ知ルニ於テハ手續ノ開始ヲ妨ク可キ事實カ登

記判事ノ通知ニ依リ顯ハルトキハ裁判所ハ其事情ニ因リ直チニ

手續ヲ取消シ又ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル期間内ニ其障碍ノ消

滅シタルコトヲ證明ス可キコトヲ債權者ニ命ス可シ其期間内ニ此

證明ヲ爲ササルトキハ期間ノ滿了後職權ヲ以テ手續ヲ取消ス可シ

第六百五十四條 裁判所ハ競賣開始ノ決定ヲ爲シタルトキハ租稅其

他ノ公課ヲ主管スル官廳ニ通知シ其不動産ニ對スル債權ノ有無及

ヒ限度ヲ申出ツ可キコトヲ期間ヲ定メテ催告ス可シ

第六百五十五條 裁判所ハ登記判事及ヒ租稅其他ノ公課ヲ主管スル

官廳ヨリ通知ヲ受ケタル後鑑定人ヲシテ不動産ノ評價ヲ爲サシメ

其評價額ヲ以テ最低競賣價額ト爲ス

第六百五十六條 裁判所ハ最低競賣價額ヲ以テ差押債權者ノ債權ニ

先ツ不動産上ノ總テノ負擔及ヒ手續ノ費用ヲ辨濟シテ剩餘アル

見込メシトスルトキハ差押債權者ニ其旨ヲ通知ス可シ

右通知ヨリ七日ノ期間内ニ差押債權者カ前項ノ負擔及ヒ費用ヲ辨

濟シテ剩餘アル可キ價額ヲ定メ且其價額ニ應スル競買人ナキ場合

ニ於テハ自ラ其價額ヲ以テ買受ク可キ旨ヲ申立テ十分ナル保證ヲ

立テサルトキハ競賣手續ヲ取消ス可シ

第六百五十七條 裁判所ハ前條第一項ノ債權及ヒ費用ヲ辨濟シ剩餘

ヲ得ル見込アルトキ又ハ差押債權者前條第二項ノ申立ヲ爲シ十分

ナル保證ヲ立テサルトキハ職權ヲ以テ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定

メテ之ヲ公告ス

第六百五十八條 競賣期日ノ公告ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要

規則ニ循ヒ印紙ヲ貼

用スヘシ

第二條 証書帳簿ヲ

分テ二類ト爲シ其稅

率ハ左ノ如シ

第一類

左ニ掲ケル所ノ証書

帳簿ハ金高ノ有無多

寡ニ拘ハラヌ下ニ定

ムル所ノ印紙ヲ貼用

スベシ

但當坐預リ金引出小

切手ハ大藏省ノ稅印

ノ押捺ヲ請フコトヲ得

- 一 當坐預リ金引出小切手 印税五厘
- 一 委任狀 全 五厘
- 一 金高記載ナキ約定証文 全 一錢
- 一 遺(金、物)証文 全 一錢
- 一 跡式讓証文 全 一錢
- 一 讓與証文 全 一錢
- 一 期限ヲ定メサル預リ証文 全 一錢
- 一 耕地小作証文 全 一錢

- 第一 不動産ノ表示
- 第二 租税其他ノ公課
- 第三 貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ借賃
- 第四 強制執行ニ因リ競賣ヲ爲ス旨
- 第五 競賣期日ノ場所、日時及ヒ競賣ヲ爲ス可キ執達吏ノ氏名並ニ住所
- 第六 最低競賣價額
- 第七 競落期日ノ場所及ヒ日時
- 第八 執行記録ヲ閲覧シ得ヘキ場所
- 第九 登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産上權利ヲ有スル者其債權ヲ申出ツ可キ旨
- 第十 利害關係人競賣期日ニ出頭ス可キ旨

- 一 雇人請合狀 全 一錢
- 一 金高記載ナキ諸物品預証文 全 一錢
- 一 金高記載ナキ諸物品借用証文 全 一錢
- 一 地所(家屋)預証文 全 一錢
- 一 諸物品切手 全 一錢
- 一 借地(借家)証文 全 一錢
- 一 賣買仕切書 全 一錢
- 一 保險証文 全 一錢

第六百五十九條 競賣期日ハ公告ノ日ヨリ少ナクトモ十四日ノ後ヲル可シ

此期日ハ裁判所ノ意見ヲ以テ裁判所内又ハ其他ノ場所ニ於テ執達吏ヲシテ之ヲ開カシム

第六百六十條 競落期日ハ競賣期日ヨリ七日ヲ過シルコトヲ得ス

此期日ハ裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第六百六十一條 競賣期日ノ公告ハ左ノ箇所ニ揭示シテ之ヲ爲ス

- 第一 裁判所ノ揭示板
- 第二 不動産所在地ノ市町村ノ揭示板

此他公告ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ掲載スルコトヲ得

第六百六十二條 最低競賣價額ヲ除ク外本款ニ掲ケタル賣却條件ノ變更ハ利害關係人ノ合意アルトキニ限り之ヲ許ス但此合意ハ競賣

一 諸會社株券
 全 一 錢
 一 送金手形全 一 錢
 一 金錢(諸物品)通帳
 一年以上一冊ニ付
 全 一 錢
 一 金錢(諸物品)判取
 帳 全 二十 錢
 一 結社約定書
 全 一 錢
 但結社約定書ニ金
 圓授受貸借ニ係ル
 條項アリテ之カ効
 カチ確定スル証書

期日ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得
 第六百六十三條 競賣期日ヲ開キタル後執達吏ハ執行記録ヲ各人ノ
 閱覽ニ供シ又特別ノ賣却條件アルトキハ之ヲ告知シ且競買價額申
 出ヲ催告ス可シ
 第六百六十四條 利害關係人カ或ル競買人ヨリ保證ヲ立テシメシコ
 トヲ申立ツルトキハ其競買人カ保證トシテ競買價額十分ノ一ニ當
 ル金額ヲ現金又ハ有價證券ヲ以テ直チニ執達吏ニ預シルトキニ非
 サレハ其競買ヲ許サス
 右申立ハ競買價額ノ申出アリタル後直チニ之ヲ述フルコトヲ要ス
 其申立ハ同一ナル競買人ノ其後ノ各競買ニ付テモ亦效力アリ
 第六百六十五條 競賣ヲ許サレタル各競買人ハ更ニ高價ノ競買ヲ許
 アルマテ其申出テタル價額ニ付キ拘束ヲ受クルモノトス
 競買ハ競買價額ヲ申出ツ可キ催告後滿ニ時間ヲ過クルニ非サレハ

帳簿ハ金高記載ナ
 シト雖モ第二類金
 高記載アル諸般ノ
 契約證書ニ準シ印
 紙ヲ貼用スヘシ
 左ニ掲クル所ノ証書
 ハ金高五圓以上ノモ
 ノニ限り下ニ定ムル
 所ノ印紙ヲ貼用スヘ
 シ
 一 營業ニ關スル送狀
 印税一 錢
 一 營業ニ關スル請取
 書 全 一 錢

之ヲ終局スルコトヲ得ス
 第六百六十六條 執達吏ハ最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケ
 タル後競賣ノ終局ヲ告知ス可シ
 他ノ各競買人ハ右ノ告知ニ因リ其競買ノ責務ヲ免カレ且預ケタル
 保證アルトキハ即時ニ其返還ヲ求ムル權利アリ
 第六百六十七條 競賣ニ付キ作ル可キ調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スル
 コトヲ要ス
 第一 不動産ノ表示
 第二 差押債權者ノ表示
 第三 執行記録ヲ各人ノ閱覽ニ供シタルコト又特別賣却條件ア
 ルトキハ之ヲ告知シタルコト
 第四 競買價額ノ申出ヲ催告シタル日時
 第五 總テノ競買價額並ニ其申出人ノ氏名住所又ハ許スコキ競

右証書ヲ帳簿ト爲ストキハ都テ一年以内一冊ニ付一錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第二類

右ニ掲クル所ノ証書ハ金高ノ多寡ニ從ヒ下ニ定ムル所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ
但爲替手形約束手形ハ手形用紙ヲ用フヘシ

買ノ申出ナキコト

第六 競買ノ結局ヲ告知シタル日時

第七 申立ニ因リ競買ノ爲メ保證ヲ立テタルコト又ハ申立アル

モ保證ヲ立テサル爲メ其競買ヲ許ササルコト

第八 最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケタルコト

最高價競買人及ヒ出頭シタル利害關係人ハ調書ニ署名捺印ス可シ若シ此等ノ者調書ノ作成前ニ退席シタルトキハ其旨ヲ附記ス可シ競買ノ保證ノ爲メ預リタル金銭又ハ有價證券ヲ返還シタルトキハ執達吏ハ受取證ヲ取り之ヲ調書ニ添附ス可シ

第六百六十八條 執達吏ハ調書及ヒ總テ競買ノ保證ノ爲メ預リタル金銭又ハ有價證券ニシテ返還セサルモノハ三日内ニ裁判所書記ニ之ヲ渡ス可シ

第六百六十九條 最高價競買人執行裁判所ノ所在地ニ住居シモ事務

一金錢借用文

一地所(家屋)賣買

証文

一金高記載アル諸

物品預リ証文

一金高記載アル諸

物品借用証文

一金錢定期預証文

一金錢記載アル諸

般ノ契約證書

金高一圓以上二十

圓未滿

印税一錢

所ヲモ有セサルトキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ若シ之ヲ忘リタルトキハ第四百四十三條第三項ノ規定ヲ準用ス

住所ノ選定ハ執達吏ニ口述シ其調書ヲ作ラシメテ之ヲ爲スコトヲ得

第六百七十條 競買期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキハ

第六百四十九條第一項ノ規定ヲ害セサル限リハ裁判所ハ其意見ヲ

以テ最低競買價額ヲ相當ニ低減シ新競買期日ヲ定ム可シ若シ其期

日ニ於テ仍ホ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキモ亦同シ

新競買期日ハ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ

第六百七十一條 裁判所ハ競落期日ニ出頭シタル利害關係人ニ競落

ノ許可ニ付キ陳述ヲ爲サシム可シ

競落ノ許可ニ付テノ異議ハ期日ノ終ニ至ルマテニ之ヲ申立ツ可シ

金高二十圓以上五十圓未満
全 二 錢

金高五十圓以上百圓未満
全 四 錢

金高百以上百五十圓未満
全 六 錢

金高百五十圓以上二百圓未満
全 八 錢

金高二百圓以上三百圓未満
全 十 一 錢

金高三百圓以上四百圓未満
全 十 四 錢

金高四百圓以上六百圓未満
全 二十 錢

金高六百圓以上八百圓未満
全 二十 六 錢

金高八百圓以上千圓未満
全 三十 六 錢

既ニ申立テタル異議ニ對スル陳述ニ付テモ亦同シ
第六百七十二條 競落ノ許可ニ付テノ異議ハ左ノ理由ニ基クコトヲ要ス

第一 強制執行ヲ許ス可カラサルコト又ハ執行ヲ續行ス可カラサルコト

第二 最高價競買人賣買契約ヲ取結ヒ若クハ其不動産ヲ取得スル能力ナキコト

第三 法律上ノ賣却條件ニ抵觸シテ競買ヲ爲シタルコト又ハ總テノ利害關係人ノ合意ヲ得スシテ法律上ノ賣却條件ヲ變更シタルコト

第四 競賣期日ノ公告ニ第六百五十八條ニ掲ケタル要件ノ記載ナキコト

第五 競賣期日ノ公告ハ法律上規定シタル方法ニ依リテ之ヲ爲

百圓未満
全 十 一 錢

金高三百圓以上四百圓未満
全 十 四 錢

金高四百圓以上六百圓未満
全 二十 錢

金高六百圓以上八百圓未満
全 二十 六 錢

金高八百圓以上千圓未満
全 三十 六 錢

ササルコト

第六 第六百五十九條ニ規定シタル期間ヲ存セサリシコト

第七 第六百六十五條第二項及ヒ第六百六十六條第一項ノ規定ニ違背シタルコト

第八 第六百六十四條ノ規定ニ違背シ最高價競買人ナリト呼上ケタルコト

競落許可ニ付テノ異議ノ申請

何府何市何町何番地族籍職業

申立人 何 某

債權者何某ト債務者何某間ノ何年(何)第何号不動産競賣事件ニ付キ何年何月何日(何處)ニ於テ爲シタル不動産ノ競賣ハ何々ノ事ヲセサルモノニシテ……民事訴訟法第六百六十五條第何項ニ違背シタル不法ノモノニ付異議申立候也

年月日 申立人 何 某印

全三十二錢

金高千五百圓以上千

四百未滿

全三十八錢

金高千四百以上千

七百圓未滿

全四十四錢

金高千七百圓以上

二千圓未滿

全五十錢

金高二千圓以上二

千五百圓未滿

全六十錢

何々裁判所

判事 何 某段

第六百七十三條 異議ハ他ノ利害關係人ノ權利ニ關スル理由ニ基テハ之ヲ許サス

第六百七十四條 裁判所ハ異議ノ申立ヲ正當トスルトキハ競落ヲ許サス

第六百七十二條第一號乃至第八號ニ掲ケタル事項ノ一アルトキハ職權ヲ以テモ競落ヲ許サス但第一號ノ場合ニ於テハ競賣シタル不動産カ讓渡スコトヲ得サルモノナルトキ又ハ競賣手續ノ停止ヲ爲シタルトキニ限リ第二號ノ場合ニ於テハ能力若クハ資格ノ欠缺カ除去セラレサルトキニ限リ第三號ノ場合ニ於テハ利害關係人手續ノ續行ニ付キ承諾セサルトキニ限ル

第六百七十五條 數箇ノ不動産ヲ競賣ニ付シタル場合ニ於テ或ル不

金高二千五百圓以

上三千圓未滿二

全七十錢

金高三千圓以上三

千五百圓未滿

全八十錢

金高三千五百圓以

上四千圓未滿

全九十錢

金高四千圓以上

全一圓

右證書ヲ通帳ト爲ス
トキハ其附込見積リ

動産ノ賣得金ヲ以テ各債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ル可キトキハ他ノ不動産ニ付テハ競落ヲ許サス
此場合ニ於テ債務者ハ其不動産中賣却ス可キモノヲ指定スルコトヲ得

第六百七十六條 第六百七十二條及ヒ第六百七十四條ノ規定ニ從ヒ全ク競落ヲ許ササル場合ニ於テ更ニ競賣ヲ許ス可キトキハ職權ヲ以テ新競賣期日ヲ定ム可シ

新競賣期日ハ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ

第六百七十七條 前條ノ規定ニ從ヒテ新競賣期日ヲ定ムル場合ノ外競落ヲ許シ又ハ許ササル決定ノ言渡ヲ爲ス可シ

競落期日ノ調書ニ付テハ第百二十九條乃至第百三十二條及ヒ第百三十四條ノ規定ヲ準用ス

第六百七十八條 競賣期日ト競落期日トノ間ニ天災其他ノ事變ニ因

金高二圓以下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ

金高百圓未満

印税四 錢

金高百圓以上總テ

諸證書稅率ニ據ル

ヘシ

一 金錢當坐預リ證文

一 質物(預リ書)(小札)

金高二圓以上二十

圓未満

リ不動産カ著シク毀損シタルトキハ最高價競買人タル呼上ヲ受ケタル者ハ其競買ヲ取消ス權利アリ其毀損ノ著シキヤ否ヤハ裁判所事情ヲ斟酌シテ之ヲ定ム

第六百七十九條 競落ヲ許ス決定ニハ競賣ヲ爲シタル不動産競落人及ヒ競落ヲ許シタル競買價額ヲ掲ケ又特別ノ賣却條件ヲ以テ競落ヲ爲シタルトキハ其條件ヲモ掲ケ可シ

右決定ハ之ヲ言渡ス外尙ホ裁判所ノ掲示板ニ掲示シテ公告ス可シ第六百八十條 利害關係人ハ競落ノ許否ニ付テハ決定ニ因リ損失ヲ被ルル可キ場合ニ於テハ其決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

競落ヲ許ス可キ理由ナキコト又ハ決定ニ掲ケタル以外ノ條件ヲ以テ許ス可キコトヲ主張スル競落人又ハ競落ヲ求メ之ヲ許ス可キコトヲ主張スル競買人モ亦即時抗告ヲ爲スコトヲ得
右抗告ハ執行停止ノ效力ヲ有ス

印税一 錢

金高二圓以上

同 二 錢

右諸證書ヲ通帳ト爲

スキハ其附込積金高

ニ隨ヒ下ニ定ムル所

ノ印紙ヲ貼用スヘシ

金高百圓未満

印税二 錢

金高百圓以上

全 四 錢

一 爲替手形 一 荷爲
替手形 一 約束手

第二項ノ場合ニ於テ競落ヲ求メタル競買人ハ其申出テタル價額ニ付キ拘束ヲ受クルモノトス

第六百八十一條 競落ヲ許ササル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ掲ケタル總テノ不許ノ原因ナキコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

競落ヲ許シタル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ掲ケタル競落ノ許可ニ對スル異議ノ原因ノ一ヲ理由トスルトキ又ハ競落決定カ競落期日ノ調書ノ旨趣ニ牴觸シタルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

取消ノ訴若クハ原狀回復ノ訴ノ要件ヲ理由トスル抗告ハ前二項ノ規定ニ依リ妨ケラルルコト無シ

第六百八十二條 抗告裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ反對陳述ヲ爲サシムル爲メ抗告人ノ相手方ヲ定ム可シ

形
 金高五十圓未満
 印税一錢
 金高五十圓以上百圓未満
 印税二錢
 金高百圓以上二百圓未満
 全四錢
 金高二百圓以上五百圓未満
 全八錢
 金高五百以上千圓

一ノ決定ニ關スル數箇ノ抗告ハ互ニ之ヲ併合ス可シ
 第六百七十三條及ヒ第六百七十四條ノ規定ハ抗告審ニモ亦之ヲ準用ス
 第六百八十三條 執行裁判所ノ決定ヲ變更シ又ハ廢棄シタル抗告裁判所ノ裁判ハ執行裁判所之ヲ裁判所ノ掲示板ニ掲示シテ公告ス可シ
 第六百八十四條 競落ヲ許ササル決定確定シタルトキハ競落人及ヒ競落ヲ求メタル競買人ハ其競買ノ責務ヲ免カレ
 第六百八十五條 第六百七十八條ノ場合ニ於テ競買取消ノ爲メ競落ヲ許ササルトキハ第六百五十五條乃至第六百五十七條ノ規定ヲ準用ス
 第六百八十六條 競落人ハ競落ヲ許ス決定ニ因リテ不動産ノ所有權ヲ取得スルモノトス

未滿
 全十五錢
 金高千圓以上二千圓未満
 全二十五錢
 金高二千圓以上
 全五十錢
 第三條 前ニ掲グル所ノ證書帳簿ト効用ヲ同フスルモノハ其名稱ニ拘ハラヌ稅率ニ照シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第六百八十七條 競落人ハ代金ノ全額ヲ支拂ヒタル後ニ非サルハ不動産ノ引渡ヲ求ムルコトヲ得ス
 競落人若クハ債權者競落ヲ許ス決定アリタル後引渡アルマテ管理人ヲシテ不動産ヲ管理セシメノコトヲ申立テタルトキハ裁判所ハ之ヲ命ス可シ
 債權者カ引渡ヲ拒ミタルトキハ競落人若クハ債權者ノ申立ニ因リ裁判所ハ執達吏ヲシテ債權者ノ占有ヲ解キ其不動産ヲ管理人ニ引渡サシム可シ
 競落不動産管理ノ申立
 何府何市何町何番地族籍職業
 何 何 某
 債權者何某ト債務者何某間ノ何年(何)第何號不動産競賣事件ニ付キ何年何月何日競賣許可ノ決定アリタル(家付地所)ハ代金ノ支拂ヲナシ引渡ヲ受クルマテ何某ヲ以テ管理人ト定メ同人ニ右地所ノ管理

第四條 印紙ヲ貼用

スハキ證書帳簿ニシテ第五條ノ手續ニ循ヒ印紙ヲ貼用セサル

モノハ民事裁判上之ヲ受理セス但處罰ヲ受クル後印紙ヲ貼用

シタルモノハ此ノ限リニ在ラス

第五條 印紙ハ證書

ノ差出人又ハ帳簿主ニ於テ證書ヲ授受シ

前帳簿ハ使用ノ前ニ

ヲ命セラレ度此段申請仕候也

年月日

何々裁判所

列事 何

某段

右 何

某印

競落不動産強制引渡申立

何府市何町何番地族籍職業

債權者

何

某

債務者

何

某

右當事者間ノ何年何第何號不動産競賣事件ニ付競落シタル土地建物明渡方請求スルモ債務者ガ引渡ヲ拒ムヲ以テ執達吏ヲシテ債務者ノ占有ヲ解キ速ニ管理人ニ引渡サシムヘキ様命令發セラレ度此段申請仕候也

年月日

右 何

某印

何々裁判所

列事 何

某段

第六百八十八條

競落人カ代金支拂期日ニ其義務ヲ完全ニ履行セザルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ不動産ノ再競賣ヲ命ス可シ

最初ノ競賣ノ爲ニ定メタル最低競賣價額其他賣却條件ハ再競賣ノ手續ニモ亦之ヲ適用ス

再競賣期日ハ少ナクモ十四日ノ後タル可シ

競落人ガ再競賣期日ノ三日前マテニ買入代金及ヒ手續ノ費用ヲ支拂ヒタルトキハ再競賣手續ヲ取消ス可シ

再競賣ヲ爲ストキハ前ノ競落人ハ競買ニ加ハルコトヲ許サス且再

度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キトキハ不足ノ額及ヒ手續

ノ費用ヲ負擔シ其高キトキハ剩餘ノ額ヲ請求スルコトヲ得ス

第六百八十九條

共有物持分ノ強制競賣ニ付テハ債權者ノ債權ノ爲

トヲ得ス

第八條 印紙ヲ貼用スヘキ帳簿仕切書送り狀ハ主任官之ヲ檢査スルコトアルヘシ

第九條 左ニ掲ケル所ノ証書帳簿ハ印紙ヲ貼用スルコトヲ要セス

- 一 官廳ヨリ差出ス
- 一 証書帳簿
- 一 官吏準官吏若クハ布告布達又ハ達ヲ以テ定メタ

メ債務者ノ持分ニ付キ強制競賣ノ申立アリタルコトヲ登記簿ニ記入ス但他ノ共有者ニハ其強制競賣ノ申立ヲ通知ス可シ
最低競賣價額ハ共有物全部ノ評價額ニ基キ債務者ノ持分ニ付キ之ヲ定ム可シ

第六百九十條 競賣申立カ競落ヲ許スコト無クシテ完結シタルトキハ裁判所ハ第五百五十一條ノ規定ニ從ヒテ爲シタル記入ヲ抹消シ登記簿ニ囑託ス可シ

第六百九十一條 競賣ヲ許ス決定確定スルトキハ賣却代金カ配當ニ與カル各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於テハ民法、商法及ヒ特別法ニ從ヒテ之ヲ配當ス可シ

第六百九十二條 各債權者ハ競落期日マテニ其債權ノ元金利息費用其他附帶ノ債權ノ計算書ヲ差出ス可シ
前項ノ規定ニ從ハサル債權者ニ付テハ第六百二十八條第二項ノ規

定ヲ準用ス

債權計算書

債權者	何府何市何町何番地族籍職業	何	某
一金 何 圓	何年何月貸付元金		
一金 何圓何十錢	自何年何月何日利子		
一金 何圓何十錢	至何年何月何日		
一金 何圓何十錢	訴訟費用		
一金 何圓何十錢	配當要求費用		
合計金何圓何十錢			

右債務者何某所有ノ不動産競賣ノ代金ヨリ配當ヲ受クヘキ價額額ニ有之依テ此段申立候也

年月日

右 何 某印

何々裁判所

判事 何 某殿

第六百九十三條 代金ノ支拂及ヒ配當ハ競落ヲ許ス決定ノ確定後ニ

- ル議員若クハ公立學校病院ニ從事スルモノ各其職務ニ依テ用フ
- ル用書
- 一 國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ官廳ニ差出ス預リ
- 金ニ對スル抵當証書
- 一 國庫金取扱所又ハ爲換方ヨリ官廳ニ對シタル諸

上納金ノ預リ証

書帳簿

一金員記載アル官

廳ヨリノ命令書

ニ對シ國庫金取

扱所又ハ爲換方

ヨリ差出ス請書

一諸上納金ニ付國

庫金取扱所又ハ

爲換方ヨリ納人

ハ差出受取證書

一切手形類ノ裏

面ニ記載シタル

裁判所カ職權ヲ以テ定ムル期日ニ於テ之ヲ爲ス

此期日ニハ利害關係人、執行力ナル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者及ヒ競落人ヲ呼出ス可シ

第六百九十四條 期日ニ於テハ先ツ配當ス可キ不動産ノ賣却代金ノ幾許ナルヤヲ定ム可シ

左ノモノヲ賣却代金トス

第一 代金

第二 不動産カ果實其他金錢ニ見積ルコトヲ得ヘキ利益ヲ生ス

ル場合ニ於テハ競落決定言渡ヨリ代金支拂マテノ利息

代金支拂ハ裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

最高競買價額ノ保證ノ爲メ預リタル金額ハ代金ニ之ヲ算入ス

第六百九十五條 裁判所ハ出頭シタル利害關係人及ヒ執行力アル正

本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ヲ訊問シテ配當表ヲ確定ス

受取書 (廿三年四月法

律、第二十

號改正)

一罹災救助金獻金

寄附金ニ關シ人

民ヨリ官廳ニ差

出ス證書

第十條 第二類ノ帳

簿ハ初丁ハ附込見積

金高及ヒ使用期限紙

數ヲ記載スヘシ但物

品ノ授受ニ關スルモ

ノハ其代價ヲ記載ス

可シ

第六百九十六條 配當表ニハ賣却代金、各債權者ノ債權ノ元金利息、

費用友ヒ配當ノ順位並ニ配當ノ割合ヲ記載ス可シ

若シ出頭シタル總テノ利害關係人及ヒ執行力アル正本ニ因ラスシ

テ配當ヲ要求スル債權者一致シタルトキハ其一致ニ基キ配當表ヲ

作ル可シ

第六百九十七條 配當表ニ對スル異議ノ完結及ヒ配當表ノ實施ニ付

テハ第六百三十條以下ノ規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ別段ノ規

定ヲ設ケタルモノハ此限ニ在ラス

第六百九十八條 期日ニ出頭シタル債務者ハ各債權者ノ債權ニ對シ

又ハ其債權ノ爲メ主張スル順位ニ對シ異議ヲ申立ツル權利アリ

出頭シタル各債權者ハ自己ノ利害ニ關シテハ他ノ債權者ニ對シ前

項ト同一ノ權利アリ

第十一條 證書帳簿ニ税率ノ異ナル者ヲ雜記スルキハ各相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十二條 印紙貼用濟第二類ノ帳簿見積金高又ハ使用期限ノ滿チタルトキハ其旨該帳簿ニ記載シ置キ主任官検査ノ節之レニ檢印ヲ受クヘシ

第十三條 前條ノ帳簿餘白アリテ尙ホ之

執行スルヲ得ヘキ債權ニ對スル債務者ノ異議ハ第五百四十五條、第五百四十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ完結ス

第六百九十九條 競落人ハ賣却條件ニ因リ不動産ノ負擔ヲ引受クル外配當表ノ實施ニ際シ買入代金ノ額ニ滿ツルヲ限トシ關係債權者ノ承諾ヲ得テ買入代金ノ支拂ニ換ヘ債務ヲ引受クルコトヲ得若シ債權者競落人ナルトキハ其債權ノ配當額カ買入代金ノ額ニ滿ツル限リハ買入代金トシテ之ヲ計算スルニ因リテ消滅ス然レトモ引受ク可キ債務又ハ計算ス可キ競落人ノ債權ニ對シ適當ナル異議アルトキハ之ニ相當スル代金ヲ支拂ヒ又ハ保證ヲ立ツ可シ

第七百條 配當表ヲ實施シタル後裁判所ハ配當調書及ヒ競落決定ノ正本ヲ登記判事ニ送付シテ左ノ諸件ヲ囑託ス可シ

第一 競落人ノ所有權ノ登記

第二 競落人ノ引受ケサル不動産上負擔記入ノ抹消

ヲ使用セントスルトキハ第十條ノ手續ヲ以テ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十四條 第二類ノ帳簿見積金高未タ滿タサルカ又ハ使用期限未タ盡キサルニ紙數盡キタルトキハ更ニ紙數ヲ増加スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其帳簿初了見積金高又ハ期限ノ側ニ

第三 第六百五十一條ノ規定ニ從ヒ爲シタル記入ノ抹消

右登記及ヒ抹消ニ關スル總テシ費用ハ競落人之ヲ負擔ス可シ

第七百一條 數多ノ差押債權者ノ爲メ同時ニ爲ス可キ不動産ノ競賣手續ニ付テハ前數條ノ規定ヲ準用ス

第七百二條 裁判所ハ競賣期日ノ公告前利害關係人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ競賣ニ換ヘテ入札拂ヲ命スルコトヲ得但入札拂ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ナキモノハ前數條ノ規定ヲ準用ス

競賣ニ換ヘ入札拂申立

何府市町何番地族籍職業

何縣郡何村何

債務者 何

債權者何某債務者何某間ノ何年(何)第何號不動産競賣事件ハ競賣ニ換ヘ入札拂ヲ命セラレ度此段申請仕候也

年月日

何々裁判所 判事 何 某 印

其ノ事由及ヒ増加シタル紙數ヲ記載スヘシ

第十五條 證券帳簿

ニ外國貨幣ヲ以テ員數ヲ記載スルキハ内國ノ貨幣ニ改算シタル金高ニ附記シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十六條 取換セ證書ハ雙方トモ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十七條 證書ニ副

第七百三條 入札ハ入札期日ニ於テ執達吏ニ之ヲ差出ス可シ

入札ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 入札人ノ氏名及ヒ住所

第二 不動産ノ表示

第三 入札價額

第七百四條 執達吏ハ入札人ノ面前ニ於テ入札ヲ開封シ之ヲ朗讀ス可シ

二人以上同價額ノ入札アルトキハ執達吏ハ其者ヲシテ追加ノ入札ヲ爲サシメ最高價入札人ヲ定ム

一定ノ金額ヲ以テ入札價額ヲ表セシテ他ノ入札價額ニ對スル比例ヲ以テ價額ヲ表シタル入札ハ之ヲ許サス

第七百五條 最高價入札人タル呼上ヲ受ケタル者第六百六十四條ノ規定ニ從ヒ保證ヲ立ツ可キ求テ受ケルモ之ヲ立テサルトキハ其次

位ノ入札人ヲ以テ最高價入札人ト定ム但此場合ニ於テハ最初呼上ヲ受ケタル者ハ其入札價額ト次位ノ入札價額トノ差金ヲ負擔スル義務アリ

第三款 強制管理

第七百六條 強制管理ニ付テハ第六百四十二條、第六百四十三條、第六百四十四條第一項第三項及ヒ第六百五十一條乃至第六百五十四條ノ規定ヲ準用ス

不動産カ債權者ノ債權ニ付キ不動産上ノ義務ヲ負フタル場合ニ於テハ總六百四十三條第一號第二號ニ依リ提出ス可キ證書ハ不動産ヲ債務者カ占有スルコトヲ説明スル證書ヲ以テ足ル

強制管理ノ申請

何府何市何町何番地族籍職業

何

債權者

某

第三號強制管理

三十五十一

三十五十一

スルコトヲ得

第十九條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニ之ヲ貼用セス若クハ貼用不足スルモノ及ヒ手形用紙ヲ用ヒス若クハ不足税ノ手形用紙ヲ用ヒタルモノハ脱税高二十倍ノ料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦全シ

第二十條 第十八條

債務者 全 何 某
請求ノ目的物 何
何年何月貸付元金 某
自何年何月 至何年何月 利息
訴訟費用請求高

一金 何 圓 何十錢
一金 何圓 何十錢
合計金何圓何十錢

右金額ハ何年何月何日何を裁判所ノ執行力アル判決及訴訟費用確定決定ニ依リ債務者ヨリ受取ル可キ權利ヲ有シ候ニ付債務者所有ノ別紙目錄ノ地所家屋強制管理ノ決定相成度此段申請仕候也

年月日

何

某印

何を裁判所

判事 何

某段

強制管理地所目錄

何府何市何町何番地
何縣何郡何村何番地
何府何市何町何番地
何縣何郡何村何番地

所有主

某

ノ場合ヲ除ク外第五條ノ手續ニ據テ消印ヲ爲サス又ハ他ノ印ヲ以テ消印シタルモノハ印税高十倍ノ料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十一條 此規則ヲ犯シタル證書帳簿ニ請人証人トシテ加印シタルモノハ各正犯ニ係ル科料罰金ノ半

何府何市何町何番地
何縣何郡何村何番地
一(田畑)何(町反)何(畝步)
此地價金何圓何十錢

強制管理建物目錄

何府何市何町何番地
何縣何郡何村何番地
何府何市何町何番地
何縣何郡何村何番地

所有主

某

一建 家 壹棟
但木造(瓦葺、板葺)此建坪 何坪
全 一土 藏 壹棟

第七百七條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ニ於テ債務者カ管理人ノ事務ニ干渉スルコト及ヒ不動産ノ收益ニ付キ處分スルコトヲ禁シ

額ニ相當ナル科料又ハ罰金ニ處ス

第廿二條 第八條ノ證書帳簿ノ検査ヲ拒ミタルモノハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第廿三條 第十條及ヒ第十三條ヲ犯タルモノハ二圓以上十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條第十二條及ヒ第十四條ヲ犯シタルモノハ二圓以下ノ罰金ニ處ス

又不動産ノ收益ノ給付ヲ爲ス可キ第三者アルトキハ其第三者ニ其後ノ給付ヲ管理人ニ爲ス可キコトヲ命ス可シ

既ニ收穫シ若クハ收穫ス可ク又ハ期限ノ到來シ若クハ到來ス可キ果實ハ收益ニ屬ス

開始決定ハ第三者ニ對シテハ之ヲ送達スルニ因リ其効力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第七百八條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ヲ爲シタル不動産ニ付キ強制管理ノ申立アルモ更ニ開始決定ヲ爲スコトヲ得ス

右申立ハ執行記録ニ添附スルニ依リ配當要求ノ効力ヲ生シ又既ニ開始シタル強制管理ノ取消ト爲リタルトキハ開始決定ヲ受ケタル効力ヲ生ス

假差押ノ命令アリタル不動産ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

第七百九條 配當要求ハ執行力アル正本ニ因リ且裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル者ハ假住所ヲ選定シテ執行裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

第七百十條 執行裁判所ハ前二條ノ申立及ヒ要求アリタルコトヲ債權者債務者及ヒ管理人ニ通知ス可シ

第七百十一條 管理人ハ裁判所之ヲ任命ス但債權者ハ適當ノ人ヲ推薦スルコトヲ得

管理人ハ管理及ヒ收益ノ爲メ自ラ不動産ヲ占有スル權ヲ有ス此場合ニ於テ抵抗ヲ受ケルトキハ執達吏ヲ立會ハシムルコトヲ得

管理人ノ任命ハ債務者ニ代リ第三者ノ給付ス可キ收益ヲ取立ツル權ヲ授與スルモノトス

第七百十二條 裁判所ハ債權者及ヒ債務者ヲ審訊シタル後又適當トスル場合ニ於テハ鑑定人ヲ立會ハシメタル上管理人ニ管理ニ關シ必要ナル指揮ヲ爲シ又管理人ニ與フ可キ報酬ヲ定メ且管理人ノ業

減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

裁判所ニ於テハ一應
 訴狀採上ケ直チニ失
 跡者所管ノ戸長へ申
 付失跡ノ年月日ヲ訊
 明シタル上債主差出
 シタル証書ニ負債者
 何年何月何日家出ノ
 末行衛相分ラサルニ
 付追テ本人見當ルカ
 又ハ三十六ヶ月ノ滿
 月后跡相續ヲ爲ス可
 キモノニ掛リ此裏書
 証書ヲ以テ再訴訟致

差引殘額金何圓十錢
 之ヲ債權額ニ配當スルハ債權何圓ニ付何圓十錢ノ額ナリ
 右ハ債務者何某ノ不動産強制管理ノ計算如斯候也

年月日 強制管理人 何 某印
 何々裁判所 何 某段

右期間内ニ異議ノ申立ナキトキハ計算ニ付キ全ク異議ナク且管理
 人ノ卸任ヲ承諾シタルモノト看做ス

異議ノ申立アルトキハ裁判所ハ管理人ヲ審訊シタル後之ヲ裁判ス
 可シ若シ異議ノ申立ナク又ハ申立テタル異議ヲ完結シタルトキハ
 裁判所ハ管理人ヲ卸任セシム可シ

強制管理人ノ計算ニ對スル異議ノ申立
 何府何市何町何番地族籍職業
 異議申立人 何 某

可キ旨ヲ記載シ訴狀
 下戻スヘキ事

第四條 債主ニ於テ

前條ノ裏書証書ヲ受
 取置キタル上本人見
 當リ又ハ探索三十六

ヶ月ノ時期ハ明治六
 年十一月第三百六十

二條布告出訴期限ノ
 限内ニハ加算致サ、
 ル事

明治十年二月十九日
 (第十九号)

債務者何某所有ノ不動産強制管理上計算書何年何月何日送達相成
 候處何某ノ計算ハ事實ニ背反シタル不法ノ計算ト存候ニ付異議申
 立候也

年月日 右 何 某印
 何々裁判所 何 某段

第七百十六條 強制管理ノ取消ハ裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

此取消ハ各債權者不動産ノ收益ヲ以テ辨濟ヲ受ケタルトキハ職權
 ヲ以テ之ヲ爲ス

若シ管理續行ノ爲メ特別ノ費用ヲ要スルトキ債權者カ必要ナル金
 額ヲ豫納セサルニ於テハ裁判所ハ強制管理ノ取消ヲ命スルコトヲ
 得

裁判所ハ右ノ取消ヲ決定スル際登記判事ニ強制管理ニ關スル記入

明治八年一月廿日

第六號布告

民事裁判上負債者失跡后ノ訴訟ハ失跡后三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケサル成規ニ有之候處本年三月一日ヨリ以后ハ左ノ通り相改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債主ノ失跡ヲ知ル時ハ定約

務施行ヲ監督ス可シ

裁判所ハ管理人ニ保證ヲ立テシメ又ハ貳拾圓以下ノ過料ヲ言渡シ又ハ其職ヲ免スルコトヲ得

第七百十三條 第三者不動産ニ付キ強制管理ヲ許スコトヲ妨クル權利ヲ主張スルトキハ第五百四十九條ノ規定ヲ準用ス

第七百十四條 管理人ハ直チニ不動産ニ付キ得タル收益ヨリ其不動産ノ負擔ニ係ル租稅其他ノ公課ヲ扣除シタル後別段ノ手續ヲ要セ

スシテ管理ノ費用ヲ辨濟シ其變額ノ配當ニ付キ債權者間ニ協議調ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

前項ノ届出アリタルトキハ裁判所ハ第六百九十一條、第六百九十六條乃至第六百九十八條ノ規定ヲ準用シテ配當表ヲ作り其配當表ニ基キ管理人ヲシテ債權者ニ支拂ヲ爲サシム可シ

第七百十五條 管理人ハ毎年及ヒ其業務施行ノ終了後各債權者、債

滿期ニ至リ直チニ裁判所へ出スヘキ事

第二條 債主未タ負債者ノ失跡ヲ知ラス

定約滿期又ハ出訴期限將ニ盡ントスルヲ

以テ裁判へ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負

債ニ掛合始メテ其失跡ノ事ヲ知ル時ハ右

ノ與書訴狀ヲ再呈シ其旨届出ス可キ事

第三條 前條ノ場合

務者及ヒ裁判所ニ計算書ヲ差出ヌ可シ各債權者及ヒ債務者ハ計算書ノ送達アリタルヨリ七日ノ期限内ニ執行裁判所ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

強制管理計算書

一金何圓何十錢

收 入

内

金何圓何十錢

何々代金

但(田畑)何反何畝歩ノ小作米何石何斗何升ノ代金一石ニ付金何圓

金何圓何十錢

地代及家賃

但(宅地)何坪一坪ニ付金何十錢、家屋一棟一坪ニ付金何圓何十錢)

一金何圓何十錢

支 出

内

金何圓何十錢

地 租

金何圓何十錢

市 稅

金何圓何十錢

村 稅

金何圓何十錢

諸 雜 費

裁判所ニ於テハ一應
 訴狀採上ケ直テニ失
 跡者所管ノ戸長ヘ申
 付失跡ノ年月日ヲ訊
 明シタル上債主差出
 シタル証書ニ負債者
 何年何月何日家出ノ
 末行衛相分ラサルニ
 付追テ本人見當ルカ
 又ハ三十六ヶ月ノ満
 月后跡相續チ爲ス可
 キモノニ掛リ此裏書
 証書ヲ以テ再訴訟致

差引殘額金何圓何十錢

之ヲ債權額ニ配當スルハ債權何圓ニ付何圓何十錢ノ割ナリ

右ハ債務者何某ノ不動産強制管理ノ計算如斯候也

何市何町何番地族籍職業

年月日

強制管理人

何

某印

何々裁判所

判事 何

某殿

右期間内ニ異議ノ申立ナキトキハ計算ニ付キ全ク異議ナク且管理
 人ノ卸任ヲ承諾シタルモノト看做ス

異議ノ申立アルトキハ裁判所ハ管理人ヲ審訊シタル後之ヲ裁判ス
 可シ若シ異議ノ申立ナク又ハ申立タル異議ヲ完結シタルトキハ
 裁判所ハ管理人ヲシテ卸任セシム可シ

強制管理人ノ計算ニ對スル異議ノ申立

何府何市何町何番地族籍職業

異議申立人

何

某

可キ旨ヲ記載シ訴狀
 下戻スヘキ事

第四條 債主ニ於テ

前條ノ裏書証書ヲ受

取置キタル上本人見

當リ又ハ探索三十六

ヶ月ノ時期ハ明治六

年十一月第三百六十

二條布告出訴期限ノ

限内ニハ加算致サ、

ル事

明治十年二月十九日

(第十九号)

債務者何某所有ノ不動産強制管理上計算書何年何月何日送達相成
 候處何某ノ計算ハ事實ニ背反シタル不法ノ計算ト存候ニ付異議申
 立候也

年月日

右

某印

何々裁判所

判事 何

某殿

第七百十六條 強制管理ノ取消ハ裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

此取消ハ各債權者ノ不動産ノ收益ヲ以テ辨濟チ受ケタルトキハ職權
 ヲ以テ之ヲ爲ス

若シ管理續行ノ爲メ特別ノ費用ヲ要スルトキ債權者カ必要ナル金
 額ヲ豫納セサルニ於テハ裁判所ハ強制管理ノ取消ヲ命スルコトヲ
 得

裁判所ハ右ノ取消ヲ決定スル際登記判事ニ強制管理ニ關スル記入

第十六條 上告ハ其

上告狀ニ添ヘテ金拾圓ヲ上告裁判所ニ預クヘシ若シ其金高ナリ預ケサル時ハ上告ナスコトヲ得ス

第一 若シ上告ヲ

取上ケサル時ハ其

預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ

取上ケ原裁判ヲ破

毀シタルトキハ預

金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ

ノ抹消ヲ囑託ス可シ

第三節 船舶ニ對スル強制執行

第七百十七條 商船其他ノ海船ニ對スル強制執行ハ不動産ノ強制競賣ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス但事物ノ性質ニ因リテ差異ノ顯ハルルトキ又ハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタルトキハ此限ニ在ラス

端舟其他構權ノミチ以テ運轉シ又ハ主トシテ構權ヲ以テ運轉スル舟ニハ本節ノ規定ヲ適用セス

船舶強制競賣申請

債權者	何府何市何町何番地族籍職業	何	某
債務者	何府何市何町何番地族籍職業	何	某
請求金額			

取上ケ被告人ト對

審シタルノ后之ヲ

斥ケテ原裁判ヲ破

毀セサルトキハ預

金ヲ没入シ又訴訟

入費規則ニ照シテ

被告人ノ費用ヲ償

ハシム

(被告人トハ上告

者ノ相手方ヲ云

フ)

●手形法

第一節 爲替手形

一金 何	圓	何々代金
一金 何圓何十錢		訴訟費用

合計金何圓何十錢

右金額ハ何年何月何日何々裁判所ノ執行力アル判決及ヒ何年何月何日同裁判所ノ訴訟費用決定ニヨリ債務者ヨリ請取ル可キ權利ヲ有シ候ニ付債務者所有ノ(船名)ニ對シ強制競賣決定相成度別紙證明書相添ヘ申請仕候也

年月日	債權者	何	某印
何々裁判所			
判事	何	某	股

別紙ハ第七百二十條ノ第一、第二ノ証明書

第七百十八條 船舶ノ強制競賣ニ付テハ船舶カ差押ノ當時碇泊スル

港ノ區裁判所ヲ以テ管轄執行裁判所トス

第七百十九條 船舶ハ執行手續中差押ノ港ニ之ヲ碇泊セシム可シ然

テ支拂ヲ爲スコトヲ
 要ス
 第七百二十二條 裏書
 替手形ノ受取人及ヒ
 其後ノ各所持人ハ若
 シ其手形ニ反對テ明
 記セサルトキハ裏書
 チ以テ之ヲ他人ニ轉
 付スルコトヲ得
 第七百二十三條 裏
 書ニハ其年月日、場
 所、裏書讓渡人ノ署
 名、捺印及ヒ裏書讓
 渡人ノ氏名アルコト
 ヲ要ス然レトモ裏書
 讓渡人ノ署名捺印ノ
 ミヲ以テモ亦裏書讓
 渡ヲ爲スコトヲ得
 第七百二十四條 裏
 書ニハ其ノ日ヨリ前
 ノ日附ヲ爲スコトヲ
 禁ス之ニ違フコトハ
 偽造、變造ノ刑ニ處
 ス
 第七百二十五條 無

債務者 何 債權者 何
 年月日 債權者 何
 何々裁判所 判事 何 某段 右 某印
 若シ此處分ヲ續行スル爲メ債權者カ必要ナル金額ヲ豫納セサルト
 キハ裁判所ハ之ヲ取消スコトヲ得
 第七百二十二條 船長ニ對シ爲シタル判決ニ基キ船舶債權者ノ爲メ
 船舶ノ差押ヲ爲ストキハ其差押ハ所有者ニ對シテモ効力アリ此場
 合ニ於テハ所有者モ亦利害關係人トス
 差押後所有者若クハ船長ノ變更アルモ手續ノ續行ヲ妨ケス
 差押後新ニ船長ト爲リタル者ハ之ヲ利害關係人トス此場合ニ於テ

記名式ニテ振出シ又
 ハ裏書讓渡人ノ署名
 捺印ヲ爲シタル爲替
 手形ハ交付ノミヲ以
 テ之ヲ轉付スルコト
 ヲ得
 第七百二十六條 爲
 替手形ハ滿期後ト雖
 モ裏書讓渡ヲ爲スコ
 トヲ得又代理若クハ
 擔保ノ爲メ裏書讓渡
 ヲ爲スコトヲ得
 第七百二十七條 支
 拂ノ爲メニスル呈示
 及ヒ拒證書ノ作成チ
 事情ニ因リテ正當時
 期內ニ爲スコトヲ得
 サル爲替手形ノ裏書
 讓渡ハ滿期後ノ爲替
 手形ノ裏書讓渡ニ同
 シ
 第七百二十八條 滿
 期後ノ爲替手形ノ裏
 書讓渡ハ其裏書讓渡
 人ノ權利及ヒ義務ノ

ハ前船長ハ其關係人タル責務ヲ免カル
 第七百二十三條 船舶カ差押ノ當時其裁判所管轄內ニ存セサルコト
 ノ顯ハルルトキハ其手續ヲ取消ス可シ
 第七百二十四條 競賣期日ノ公告ニハ第六百五十八條第一號ニ掲ケ
 タル旨趣ニ換ヘテ船舶ノ表示及ヒ其碇泊ノ場所ヲ掲ク可シ
 第七百二十五條 定繫港ノ區裁判所管轄外ニ於テ差押ヲ爲シタルト
 キハ執行裁判所ハ競賣期日ノ公告ヲ定繫港ノ區裁判所ニ送付シ其
 裁判所ノ揭示板ニ揭示ス可キコトヲ囑託ス可シ
 第七百二十六條 船舶ノ股分ニ對スル強制執行ハ第六百二十五條ノ
 規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス其執行ニ付テハ定繫港ノ區裁判所之ヲ管轄
 ス
 第七百二十七條 債權者ハ差押命令ノ申請ニ債權者カ船舶ノ股分ニ
 付キ所有權ヲ有スルコトヲ證ス可キ船舶登記簿ノ抄本又ハ信用ス

ミテ裏書讓受人ニ轉付スルモノトス然レトモ裏書讓受人ハ滿期後ニ手形ノ裏書讓渡ヲ爲シタル各人ニ對シテ如何ナル方式ニモ羈束セラレズ且獨立シタル償還請求權ヲ取得ス

第七百二十九條 代理ノ爲メ又ハ擔保ノ爲メニスル裏書讓渡ハ其目的ヲ爲替手形ニ記載セサルトキハ第三者ニ對シテ眞ノ裏書讓渡ナリ

第七百三十條 代理ノ爲メニスル裏書讓渡ニシテ其目的ヲ記載シタル時ハ其裏書讓受人ハ裏書讓渡人ノ權利及ヒ義務ヲ履行フ但特別ノ記載アルニ非ラザレハ眞ノ裏書讓渡ナラスコトヲ得ス

可キ證明書ヲ添附ス可シ

差押命令ハ債務者ノ外船舶管理人ニモ之ヲ送達ス可シ

差押ハ此命令ヲ船舶管理人ニ送達スルニ因リ債務者ニ送達スルト同一ノ効力ヲ生ス

第七百二十八條 船舶股分ノ競賣代金ノ配當ニ付テハ第六百二十六條以下ノ規定ヲ準用ス

第七百二十九條 外國ノ船舶ヲ差押ヘタルトキ又ハ登記簿ニ登記セサル船舶ヲ差押ヘタルトキハ登記簿ニ記入ス可キ手續ニ關スル規定ヲ適用セス

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

第七百三十條 債務者カ特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ引渡ス可キトキハ執達吏ハ之ヲ債務者ヨリ取上ケテ債權者ニ引渡ス可シ

第七百三十一條 擔保ノ爲メニスル裏書讓渡ニシテ其目的ヲ記載シタル時ハ其裏書讓受人ハ裏書讓渡人ト同一ノ權利義務ヲ履行フ但債權者ノ辨濟ヲ受ケサル場合ノ外眞ノ裏書讓渡ヲ爲スコトヲ得ス

第七百三十二條 裏書讓渡ハ各裏書讓受人ニ至ルマテ關斷ナキトキニ限リ裏書讓受人ノ爲メ効力アリ但代理又ハ擔保ノ爲メ裏書讓渡ヲ爲シタル爲替手形ハ裏書讓渡人ニ於テ更ニ裏書讓渡ヲ爲スコトヲ得

第七百三十三條 裏書讓渡ノ法律上ノ効力ハ爲替手形ニ裏書讓渡ヲ禁スル旨ヲ記載

第七百三十二條 債務者カ不動産又ハ人ノ住居スル船舶ヲ引渡シ又ハ明渡ス可キトキハ執達吏ハ債務者ノ占有ヲ解キ債權者ニ其占有ヲ得セシム可シ

此強制執行ハ債權者又ハ其代理人カ受取ノ爲メ出頭シタルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

強制執行ノ目的物ニ非サル動産ハ執達吏之ヲ取除キテ債務者ニ引渡ス可シ若シ債務者不在ナルトキハ其代理人又ハ債務者ノ成長シタル家族若クハ雇人ニ之ヲ引渡ス可シ

債務者及ヒ前項ニ掲ケタル者不在ナルトキハ執達吏ハ右ノ動産ヲ債務者ノ費用ニテ保管ニ付ス可シ

債務者カ其動産ノ受取ヲ怠ルトキハ執達吏ハ執行裁判所ノ許可ヲ得テ差押物ノ競賣ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ賣却シ其費用ノ扣除シタル後其代金ヲ供託ス可シ

載シタル爲メ之ヲ失フコト無シ但之ヲ禁シタル者ニ對スル償還請求權ハ此カ爲メニ消滅ス

第七百三十四條 爲替手形ノ所持人ハ其手形ニ別段ノ記載ナキトキハ滿期日前ニ引受ノ爲メ支拂人ニ之ヲ呈示スルコトヲ得若シ支拂人引受チ爲ササルトキハ拒證書ヲ作ルコトヲ得振出人ハ所持人ニ於テ引受ノ爲メ其手形ノ呈示ヲ爲ス可ク若シ爲ササルトキハ償還請求權ヲ失フ旨ヲ記スルコトヲ得此場合同ニ於テ支拂人引受ラ爲ササルトキハ其翌日拒證書ヲ作ル可シ第七百三十五條 覽後定期拂ノ爲替手

第七百三十二條 引渡ス可キ物カ第三者ノ手中ニ存スルトキハ債務者ノ引渡ノ請求ハ申立ニ因リ金錢債權ノ差押ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ債權者ニ轉付ス可シ

第七百三十三條 債務者カ爲ス可キ行爲ヲ爲ササル場合ニ於テ第三者之ヲ爲シ得ヘキモノナルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ民法(財産編第二百八十二條第三項第四項)ノ規定ニ從ヒテ判定ヲ爲ス

債權者ハ同時ニ其行爲ヲ爲スニ因リ生ス可キ費用ヲ豫メ債務者ニ支拂ヲ爲サシムル決定ノ宣言アラノコトヲ申立ツルコトヲ得但其行爲ヲ爲スニ因リ此ヨリ多額ノ費用ヲ生スルトキ後日其請求ヲ爲ス權利ヲ妨ケス

第七百三十四條 債務者カ其意思ノミニ因リ爲シ得ヘキ行爲ニシテ第三者之ヲ爲シ得ヘカラサルモノナルトキハ第一審ノ受訴裁判所

ハ申立ニ因リ民法(財産編第二百八十六條第三項)ノ規定ニ從ヒテ決定ヲ爲ス

第七百三十五條 前二條ノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得但決定前債務者ヲ審訊ス可シ

第七百三十六條 債務者カ權利關係ノ成立ヲ認諾ス可キコト又ハ其他ノ意思ノ陳述ヲ爲ス可キコトノ判決ヲ受ケタルトキハ其判決ノ確定ヲ以テ認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲シタルモノト看做ス反對給付ノ有リタル後認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ第五百十八條及ヒ第五百二十條ノ規定ニ從ヒ執行力アル正本ヲ付與シタルトキ其効力ヲ生ス

第四章 假差押及ヒ假處分

第七百三十七條 假差押ハ金錢ノ債權又ハ金錢ノ債權ニ換フルコトヲ得ヘキ請求ニ付キ動産又ハ不動産ニ對スル強制執行ヲ保全スル

形ハ別ニ短キ呈示期間ノ記載ナキトキハ日附後週クトモ二個年内ニ引受ノ爲メ之ヲ呈示ス可シ若シ之ヲ呈示セサルトキハ振出人及ヒ裏書讓渡人ニ對スル償還請求權ヲ失フ支拂人カ方式ニ依リ引受チ拒ミ若クハ日附ヲ爲スコトヲ拒ムトキハ拒證書ヲ作ルコトヲ得此場合ニ於テハ拒證書作成ノ日ヲ以テ呈示ノ日ト看做ス若シ拒證書ヲ作ラサルトキハ呈示期間ノ末日ヲ以テ呈示ノ日ト看做ス但テ其翌日マテ拒證書ヲ作ラサルハ振出人及ヒ裏書讓渡人ニ對シテ擔保ヲ求ムルコトヲ得ス第七百三十六條 引

受ハ支拂人カ爲替資
 金ヲ受取リタルト否
 トヲ問ハス爲替手形
 ノ所持人ニ對シテ滿
 期日ニ爲替金額ヲ支
 拂フ義務ヲ支拂人ニ
 負ハシム又所持人ニ
 引受ノ旨ヲ記シタル
 爲替手形ヲ還付シタル
 後ハ強暴又ハ詐欺
 ノ場合ヲ除ク外之ヲ
 取消スコトヲ得ス
 第七百三十七條 引
 受ハ支拂人カ爲替手
 形ニ引受ノ旨ヲ記シ
 テ署名捺印ヲ爲シ又
 ハ署名捺印ノ方式ニ依
 リテ成ル此方式ニ依
 リテ成ル引受ノ効力ハ
 第八百五條ノ規定ニ
 從フ
 第七百三十八條 即
 日ニ引受ヲ爲サス又
 ハ條件若クハ其他ノ
 制限ヲ以テ之ヲ爲シ
 タルトキハ引受人ノ

爲メ之ヲ爲スコトヲ得
 假差押ハ未タ至ラサル請求ニ付テモ亦之ヲ爲スコトヲ得
 第七百三十八條 仮差押ハ之ヲ爲ササレハ判決ノ執行ヲ爲スコト能
 ハス又ハ判決ノ執行ヲ爲スニ著シキ困難ヲ生スル恐アルトキ殊ニ
 外國ニ於テ判決ノ執行ヲ爲スニ至ル可キトキハ之ヲ爲スコトヲ得
 第七百三十九條 仮差押ノ命令ハ仮ニ差押フ可キ物ノ所在地ヲ管轄
 スル區裁判所又ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス
 第七百四十條 仮差押ノ申請ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ
 第一 請求ノ表示若シ其請求カ一定ノ金額ニ係ラサルトキハ其
 價額
 第二 假差押ノ理由タル事實ノ表示
 請求及ヒ假差押ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ
 申請ハ口頭ヲ以テ爲スコトヲ得

其引受ノ爲メ當然
 束セラルモ所持人
 ハ之ヲ拒ミタリト看
 做スコトヲ得若シ爲
 替金額ノ一分ニ付テ
 ノミ引受ヲ爲シタル
 トキハ其他ノ部分ニ付
 テハ其引受ヲ拒ミタ
 リト看做ス
 第七百三十九條 所
 持人引受ノ拒證書ヲ
 作リタル時ハ其作成
 ナ遅延ナク振出人又
 ハ裏書讓渡人ニ通知
 ス可シ
 右ノ通知ヲ爲シタル
 所持人ハ振出人又ハ
 裏書讓渡人ニ對シテ
 爲替金額及ヒ拒證書
 ノ費用並ニ戻爲替ノ
 費用ヲ滿期日ニ支拂
 フコトニ付テノ擔保
 ナ求ムル權利ヲ有シ
 各裏書讓渡人ハ自ラ
 擔保ヲ爲シタルト否
 トヲ問ハス前者ニ對

有体動産假差押申請
 申請人 何府何市何町何番地族籍職業
 何
 被申請人 何
 某
 請求金額
 一金 何 圓
 何年何月日貸付元金
 自何年何月日
 至何年何月日
 利息
 請求高
 債權者ハ債務者ニ對シ右金額ノ請求ヲナサントスルモ債務者ハ其
 行爲中執行ヲ免レン爲メ財産ヲ賣却又ハ隠匿セントスルノ恐レア
 ルヲ以テ前記債權ノ強制執行保全ノ爲メ債務者所有ノ有体動産ニ
 對シ假差押命令ヲ發セラレ度此段申請仕候也
 年月日 債權者 何 右
 何々裁判所 判事 何 某 印

シテ右同一ノ權利ヲ有ス但拒證書ノ交付ヲ受ルニ非サレハ擔保ヲ供スル義務ナシ當事者ノ一人カ爲シタル通知及其受ケタル擔保ハ其後者總員ノ爲メニモ効力アリ第七百四十二條 振出人及ヒ裏書讓渡人ハ擔保ヲ爲スニ換ヘテ前條ニ掲ケタル一切ノ金額ヲ即時ニ所持人ニ支拂ヒ又ハ即時ニ供託所ニ寄託スルコトヲ得

第七百四十一條 擔保又ハ寄託ハ後ニ至リ爲替手形ノ引受アリタルトキ又ハ爲替金額若クハ償還金額ノ支拂アリタルトキ又ハ所持人カ時効若クハ懈怠ニ因リテ爲替手形上ノ權利ヲ失ヒタルトキハ其生シ

第七百四十一條 假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

請求又ハ假差押ノ理由ヲ説明セサルトキト雖モ假差押ニ因リ債務者ニ生ス可キ損害ノ爲メ債權者カ裁判所ノ自由ナル意見ヲ以テ定ムル保證ヲ立テタルトキハ裁判所ハ假差押ヲ命スルコトヲ得

又請求及ヒ假差押ノ理由ヲ説明シタルトキト雖モ裁判所ハ保證ヲ立テシメ假差押ヲ命スルコトヲ得

保證ヲ立テタルトキハ其保證ヲ立テタルコト及ヒ如何ナル方法ヲ以テ之ヲ立テタルコトヲ假差押ノ命令ニ記載ス可シ

第七百四十二條 假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ爲ス場合ニ於テハ終局判決ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

假差押ノ申請ヲ却下シ又ハ保證ヲ立テシムル裁判ハ債務者ニ之ヲ

タル費用ヲ引去リテ之ヲ還付スルコトヲ要ス

第七百四十二條 第七百四十條ノ規定ニ從ヒテ爲替金額及ヒ費用ヲ人ニ支拂ヒタル者ハ其所持人ニ對シテ裏書讓渡ヲ求メ且爲替手形ト共ニ受取證書ヲ記シタル償還計算書ノ交付ヲ求ムルコトヲ得

通知スルコトヲ要セス

第七百四十三條 假差押ノ命令ニハ假差押ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ル爲メ又ハ執行シタル假差押ヲ取消スコトヲ得ル爲メ債務者ヨリ供託ス可キ金額ヲ記載ス可シ

第七百四十四條 債務者ハ假差押決定ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得

此異議ニ付テハ假差押ノ取消又ハ變更ヲ申立ツル理由ヲ開示ス可シ

異議ノ申立ハ假差押ノ執行ヲ停止セス

第四款 榮譽引受

第七百四十三條 支拂人カ引受ヲ拒ミタル爲替手形ニ同地ニ於ケル豫備支拂人ヲ掲ケタルトキハ其爲替手形ヲ拒證書ト共ニ引受ノ爲メ遅延ナシ豫備支拂人ニ呈示ス可シ

第七百四十四條 豫備支拂人ヲ掲ケサル

假差押ニ對シ異議申立

申立人 何府何市何町何番地族籍職業 何

被申立人 何府何市何町何番地族籍職業 何

トキト雖モ支拂人及
 ヒ第三者ハ拒マレタ
 ル爲替手形ヲ振出人
 又ハ書讓渡人ノ榮
 譽ノ爲メニ引受クル
 コトヲ得然レトモ所
 持人ハ此ノ如キ參
 加ヲ許諾スル義務ナ
 シ

第七百四十五條 二
 人以上ノ參加人アル
 トキハ最モ多數ノ義
 務者ノ榮譽ノ爲メニ
 引受ヲ爲ス者ヲ以ツ
 テ榮譽引受人トス若
 シ榮譽者ヲ記載セカ
 ルトキハ振出人ヲ受
 榮譽者ト看做ス豫
 第七百四十六條 豫
 備支拂人ノ引受其他
 所持人カ許諾シタル
 參加人ノ引受ハ榮
 譽者及ヒ其後者ニ擔
 保ヲ供スル義務ヲ免
 カレシム

第七百四十七條 榮

何年何月日送達アリタル假差押命令ニ對シ假差押ヲ受クヘキ理由
 無之候間異議申立候也

年月日 申立人 右 何 某印

何々裁判所 判事 何 某段

第七百四十五條 異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ口頭辯論ノ爲
 メ當事者ヲ呼出ス可シ
 裁判所ハ終局判決ヲ以テ假差押ノ全部若クハ一分ノ認可變更又ハ
 取消ヲ言渡シ又自由ナル意見ヲ以テ定ムル保證ヲ立ツ可キコトノ
 條件ヲ附シテ之ヲ言渡スコトヲ得

第七百四十六條 本案ノ未タ繫屬セサルトキハ假差押裁判所ハ債務
 者ノ申立ニ因リ口頭辯論ヲ經スシテ相當ニ定ムル期間内ニ訴ヲ起
 ス可キコトヲ債權者ニ命ス可シ
 此期間ヲ徒過シタル後ハ債務者ノ申立ニ因リ終局判決ヲ以テ假差

譽引受ハ支拂人カ支
 拂ヲ爲サハルトキニ
 於テ參加人ニ滿期後
 爲替金額ヲ支拂フ義
 務ヲ負ハシム

第七百四十八條 榮
 譽引受ハ參加人爲替
 手形ニ之ヲ記載シテ
 署名捺印シ且拒證
 書若シハ其附箋ニ之
 フ記載スルコトヲ要
 ス

第七百四十九條 拒
 證書ハ拒證書費用ノ
 額償チ受ケタル上之
 チ參加人ニ交付シ參
 加人ハ遅クトモ拒證
 書作成ノ翌日受榮譽
 者ニ榮譽引受ヲ爲シ
 タル旨ヲ通知シテ拒
 證書ヲ送付スルコト
 ナ要ス若シ此事ヲ怠
 ルトキハ此ニ因リテ
 生スル損害ニ付キ責
 任ヲ負フ

第七百五十條 受榮

押ヲ取消ス可シ

假差押ニ付本案起訴期間確定申請

債權者 何 府市町何番地族籍職業 何 某

債務者 何 府市町何番地族籍職業 何 某

何年何月何日號假差押命令ニ付債權者ハ未ダ本案ノ訴訟ヲ提起セサ
 ルニ付起訴ノ期間確定相成度此段申請仕候也

年月日 債務者 右 何 某印

何々裁判所 判事 何 某段

假差押取消申請

債權者 何 府市町何番地族籍職業 何 某

債務者 何 府市町何番地族籍職業 何 某

第七百五十條 受榮

保者及ヒ其前者ハ擔保ヲ求ムル權利ヲ有ス然レトモ所持人ハ第七百四十四條ニ依リテ榮譽引受ヲ許諾セサルトキニ非サレハ之ヲ有セス

第七百五十一條 保證爲替手形ニ於テ爲替債務者ノ署名ニ自己ノ署名ヲ添フル第三者ハ其債務者ト連帶シテ義務ヲ負フ

第七百五十二條 前條ノ義務ヲ負擔スルニハ別ニ書面上ノ陳述ヲ以テスルコトヲ得

第七百五十三條 爲替保證ノ義務ハ明示ノ契約ヲ以テ之ヲ制限スルコトヲ得然レトモ其制限ハ契約ヲ爲シタル當事者間ニノミ効力アリ

何年何第何號何々裁判所假差押命令ニ付何年何月日本案起訴ノ時
間定メラレ候處右期間經過スルモ訴訟ヲ提起セサルニ付該假差押
命令取消ノ判決相成度此段申請仕候也

年月日 債務者 何 某印
何々裁判所 何 某股
判事 何 某股

第七百四十七條 債務者ハ假差押ノ理由消滅シ其他事情ノ變更シタルトキ又ハ裁判所ノ自由ナル意見ヲ以テ定ム可キ保證ヲ立テントノ提供ヲ爲シタルトキハ假差押ノ認可後ト難モ假差押ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得

此申立ニ付テハ終局判決ヲ以テ之ヲ裁判ス其裁判ハ假差押ヲ命シタル裁判所又本案カ既ニ繫屬シタルトキハ本案ノ裁判所之ヲ爲ス

第七百四十八條 假差押ノ執行ニ付テハ強制執行ニ關スル規定ヲ準

第六款 支拂
第七百五十四條 爲替金額ハ爲替手形ニ記載シタル貨幣ヲ以テ之ヲ支拂フ可シ若シ特ニ貨幣ノ種類ヲ表示セサルトキハ支拂地ニ於テ商人間ニ流通スル貨幣ヲ以テ支拂チ爲ス意思ナリト推定ス

第七百五十五條 支拂ハ第七百七十八條ノ場合ヲ除ク外ハ支拂人カ引受チ爲シタルト否トヲ問ハス滿期日ニ支拂人ノ方ニテ之ヲ受クルモノトス

支拂恩惠期日ハ之ヲ許サス然レトモ其地慣習ノ支拂日ハ之ヲ遵守スルコトヲ要ス

第七百五十六條 滿期日カ一般ノ休日ニ當ルトキハ其後ノ業

用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

第七百四十九條 假差押ノ命令ニハ其命令ヲ發シタル後債權者又ハ債務者ニ於テ承繼アル場合ニ限り執行文ヲ附記スルコトヲ要ス假差押命令ノ執行ハ命令ヲ言渡シ又ハ申立人ニ命令ヲ送達シタルヨリ十四日ノ期間ヲ徒過スルトキハ之ヲ爲スコトヲ許サス

右執行ハ債務者ニ差押命令ヲ送達スル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

第七百五十條 動産ニ對スル假差押ノ執行ハ各差押ト同一ノ原則ニ從ヒテ之ヲ爲ス

債權ノ假差押ニ付テハ其命令ヲ發シタル裁判所ヲ以テ管轄執行裁判所トス

債權ノ假差押ニ付テハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲スコトヲ禁スル命令ノミヲ爲ス可シ

假差押ノ金錢ハ之ヲ供託ス可シ其他假差押物ノ競賣及ヒ假差押有

替手形ヲ數通ニシテ
振出シタルトキハ債
務者ハ其中ノ孰レニ
依リテ支拂ヲ爲スモ
此ニ因リテ其責ヲ免
カル然レトモ裏書ア
ル一通又ハ支拂人ノ
引受ヲ記シタル一
チ所有者トシテ占有
スル第三者ノ權利ヲ
妨ケス
第七百十條及第七
百十一條ノ規定ハ一
爲替手形ノ數通ノ引
渡及ヒ喪失ニモ之ヲ
適用ス
第七百六十三條 引
受人ハ一爲替手形ノ
數通中ニテ其引受ヲ
記セサルモノニ對シ
テハ擔保ヲ供セシメ
タル上ニ非カレハ支
拂未爲ス義務ナシ引
受ヲ記シタルノ爲替
手形數通アル場合ニ
在テハ之ヲ合シテ引

假差押取消申請

債權者 何府何市何町何番地族籍職業 某
債務者 何府何市何町何番地族籍職業 某
右當事者間ノ何年(何)第何號假差押命令ニ付其命令ニ於テ定メラレ
タル金額ハ別紙ノ通り供託シタルニ假差押ノ命令取消州成度候也
年月日 債務者 何 某印

何々裁判所

判事 何 某段

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

假差押ヲ取消ス決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第七百五十五條 係爭物ニ關スル假處分ハ現狀ノ變更ニ因リ當事者
一方ノ權利ノ實行ヲ爲スコト能ハス又ハ之ヲ爲スニ著シキ困難ヲ
生スル恐アルトキ之ヲ許ス

假處分申請

原告 何府何市何町何番地族籍職業 某
被告 何府何市何町何番地族籍職業 某
目的物 何

何々所在

一 地所(宅地)

(何百町步)

此地價金何圓何十錢

右地所ハ被告ヨリ買受ケ原告ノ所有タルハハ附屬書類ニヨリ証明致候
前記地所ハ原告ガ買受ケタルニ被告ハ登記ノアラザルヲ奇貨トシテ
之ヲ他ニ賣却セント計置致居候間該地所ノ書入ハ勿論讓渡セサル
機假處分ノ命令發セラレ度候也(第七百六十條參觀)

年月日 原告 何 某印

何々裁判所

判事 何 某段

渡サハルトキモ亦同
シ擔保ノ提供ヲ爲ス
ニ拘ハラス引受人カ
支拂ヲ拒ムトキハ所
持人ハ拒證書ヲ作ル
コトヲ得
第七百六十四條 滿
期ノ時又ハ後ニ於テ
爲替手形上ノ正當ノ
所持人ニ爲ス支拂ハ
其所持人ガ破産家資
分散宣告ヲ受ケタル
場合又ハ第七百十條
及ヒ第七百十一條ノ
場合ニ限リ裁判所ノ
命令ヲ以テノ後之ヲ
差押フルコトヲ得
第七百六十五條 支
拂ニ對シ前條以外ノ
方法ヲ以テスル故障
又ハ債務者ノ知ラザ
ル人ニ爲ス支拂ニ付
テハ第四百條ノ規定
ヲ適用スルコトヲ得
第七百六十六條 第
七百十條及ヒ第七百

十一條ノ場合ニ在テハ爲替手形ニ付キ自
己ノ所有權ヲ證明シ
且裁判所ノ命令ヲ得
タル者ハ判決ノ確定
前ニ擔保ヲ供シテ爲
替金額ノ支拂ヲ求メ
又ハ擔保ヲ供セシメ
テ爲替金額ヲ供託所
ニ寄託スルヲ求ムル
コトヲ得此寄託ノ場
合ニ在テモ第七百五
十八條ノ規定ヲ適用
ス

第七百六十七條 支
拂人カ正當ノ理由ナ
クシテ滿期日ニ爲替
金額ノ支拂又ハ寄託
ヲ拒ムトキハ所持人
ハ其次ノ業日ニ拒證
書ヲ作リ目所持人カ
償還請求ヲ爲サント
欲スル者ニ拒證書ノ
作成ヲ通知スルコト
ヲ要ス然レトモ所持
人ハ爲替手形ニ明記

第七百五十六條 假處分ノ命令其他ノ手續ニ付テハ假差押ノ命令及
ヒ手續ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルトキ
ハ此限ニ在ラス

第七百五十七條 假處分ノ命令ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス
右裁判ハ急迫ナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコト
ヲ得

第七百五十八條 裁判所ハ其意見ヲ以テ申立ノ目的ヲ達スルニ必要
ナル處分ヲ定ム

假處分ハ保管人ヲ置キ又ハ相手方ニ行爲ヲ命シ若クハ之ヲ禁シ又
ハ給付ヲ命スルコトヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

假處分ヲ以テ不動産ヲ讓渡シ又ハ抵當ト爲スコトヲ禁シタルトキ
ハ裁判所ハ第七百五十一條ノ規定ヲ準用シテ登記簿ニ其禁止ヲ記
入セシム可シ

アルニ因リテ拒證書
作成ノ義務ヲ免ガル
ルコトヲ得

第七款 榮譽支

第七百六十八條 拒
マレクハ爲替手形ハ
振出人又ハ裏書讓渡
人ノ榮譽ノ爲メ榮譽
引受人ノ支拂人ハ又
第三者之ヲ支拂フコ
トヲ得

第七百六十九條 像
備支拂人其他ノ參加
人ノ引受ヲ記シタル
爲替手形ハ拒證書作
成ノ後直チニ榮譽引
受人ニ支拂ノ爲メ之
ヲ呈示ス可シ

第七百七十條 榮譽
支拂若シハ其拒絶又
ハ其提供ハ何レノ場
合ニ於テモ之ヲ支拂
拒證書又ハ其附箋ニ
記載ス可シ

拒證書ハ爲替手形

第七百五十九條 特別ノ事情アルトキニ限り保證ヲ立テシメテ假處
分ノ取消ヲ許スコトヲ得

第七百六十條 假處分ハ爭アル權利關係ニ付キ假ノ地位ヲ定ムル爲
ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得但其處分ハ殊ニ繼續スル權利關係ニ付キ
著シキ損害ヲ避ケ若クハ急迫ナル強暴ヲ防ク爲メ又ハ其他ノ理由
ニ因リ之ヲ必要トスルトキニ限ル

第七百六十一條 急迫ナル場合ニ於テハ係爭物ノ所在地ヲ管轄スル
區裁判所ハ假處分ノ當否ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ本案ノ管轄裁判
所ニ相手方ヲ呼出ス可キ申立ノ期間ヲ定メ假處分ヲ命スルコトヲ
得

此期間ヲ徒過シタル後區裁判所ハ申立ニ因リ其命シタル假處分ヲ
取消ス可シ

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

ト共ニ拒證書費用ノ辨償ヲ受ケタル上之ヲ榮譽支拂人ニ交付ス

第七百七十一條 榮譽支拂人ハ引受人振出人及ヒ裏書讓渡人ニ對シテ所持人ノ權利ヲ承繼ス但其權利ヲ主張スルニハ所持人ト同一ノ義務ヲ履行スルコトヲ要ス

第七百七十二條 榮譽支拂人受榮譽者ノ後者總員ヲシテ責ヲ免カレシム

第七百七十三條 榮譽支拂人提供スル者二人以上アルトキハ支拂人ヲ以テ榮譽支拂人トシ之ニ次テハ最モ多數ノ義務者ヲシテ責ヲ免カレシムル者ヲ以テ榮譽支拂人トス

第七百七十四條 所

第七百六十二條 本章ノ規定ニ於ケル本案ノ管轄裁判所ハ第一審裁判所トス但本案カ控訴審ニ繫屬スルトキニ限り控訴裁判所トス

第七百六十三條 急迫ナル場合ニ於テ口頭辯論ヲ要セサルモノニ限り裁判長ハ本章ノ申立ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

第七編 公示催告手續

第七百六十四條 請求又ハ權利ノ届出ヲ爲サシムル爲メノ裁判上ノ公示催告ハ其届出ヲ爲ササルトキハ失權ヲ生スル效力ヲ以テ法律ニ定メタル場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

公示催告手續ハ區裁判所之ヲ管轄ス

第七百六十五條 公示催告ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此申立ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

申立ヲ許ス可キトキハ裁判所ハ公示催告ヲ爲スコシ其公示催告ニ

持人ハ榮譽支拂人受ケタル上之ヲ榮譽支拂人ニ交付ス

第七百七十五條 榮譽支拂人カ滿期日ニ爲替手形ノ支拂人爲替手形ノ支拂人ハ振出人及ヒ裏書讓渡人ニ對シテ所持人ノ權利ヲ承繼ス但其權利ヲ主張スルニハ所持人ト同一ノ義務ヲ履行スルコトヲ要ス

第七百七十六條 所

持人ハ爲替手形ヲ呈示ス可シ若シ支拂人爲替手形ノ支拂人ハ滿期日ノ次ノ業日ニ支拂人拒證書ヲ作ル可シ但第七百六十一條第二項ニ掲ケタル一分ノ

ハ殊ニ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 申立ノ表示

第二 請求又ハ權利ヲ公示催告期日マテニ届出ツ可キコトノ催告

第三 届出ヲ爲ササルニ因リ生ス可キ失權ノ表示

第四 公示催告期日ノ指定

第七百六十六條 公示催告ニ付テノ公告ハ裁判所ノ揭示板ニ揭示シ及ヒ官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲シ其他法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ第百五十七條第三項ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第七百六十七條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告期日トノ間ニハ法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ少ナクトモ二个月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第七百六十八條 公示催告期日ノ終リタル後ト雖モ除權判決前ニ届

支拂ノ場合ニ於テモ亦同シ
 第七百七十七條 支拂拒證書ハ既ニ引受ニモ債務者カ死亡シ又ハ破産家資分散官告ヲ受ケ又ハ其所在ノ知レサルトキニモ之ヲ作ル可シ
 第七百七十八條 引受人ニ對シテ替權利ヲ保全スルニ滿期日ニ於ケル呈示及ヒ拒證書ノ作成ヲ要セス然レトモ他所拂爲替手形ハ他所拂人若シ他所拂人ノ記載ナキトキハ支拂人ニ其爲替手形ヲ支拂フ可キ地ニ於テ支拂ノ爲メ之ヲ呈示ス可シ若シ支拂チ爲サハルトキハ同地ニ於テ拒證書ヲ作ル可シ

出テ爲ストキハ適當ナル時間ニ之ヲ爲シタルモノト看做ス

公示催告申請

申請人 何府何市何町何番地族籍職業 何
 何府何市何町何番地族籍職業 何

何府何市何町何番地族籍職業

何府何市何町何番地族籍職業

右地所ハ何(府縣)何(市郡)何(町村)何番地何某ヨリ買入タルヲ以テ世襲財産ニ致度候間公示催告手續被成下度候也(商七一、四〇三)

年月日 申請人 何 某印

何々裁判所

判事 何 某段

第七百六十九條

除權判決ハ申立ニ因リテ之ヲ爲ス

右判決前ニ詳細ナル探知ヲ爲ス可キ旨ヲ命スルコトヲ得

除權判決ノ申請書

申請人 何府何市何町何番地族籍職業 何

第七百七十九條 引受人カ家資分散破産ノ宣告ヲ受ケ其他資力ノ確ナラサルニ至タル場合ニ於テ爲替擔保ヲ供セサルトキハ所持人ハ滿期日前ニ支拂拒證書ヲ作價還請求ヲ爲ス可キ得人ハ振出人及ヒ裏書讓渡人ノ各員又ハ總員ニ對シテ償還請求ヲ爲スコトヲ得又償還請求ヲ受ケタル裏書讓渡人ハ其前者ニ對シテ同一ノ權利ヲ有ス
 第七百八十一條 償還請求ヲ爲ス者ハ第七百三十九條ノ規定ニ依リテ引受拒證書ヲ成テ通知ヲ爲シタルニ拘ハラズ尙ホ其償還請求ヲ爲サント

申請人

何府何市何町何番地族籍職業

何府何市何町何番地族籍職業

右地所ニ對スル何年何月何日當裁判所ノ公示催告ニ基キ權利ノ届出チ爲サルニ付除權判決ノ旨渡相成度此段申請仕候也

年月日 申請人 何 某印

何々裁判所

判事 何 某段

權利ノ届出

申請人 何府何市何町何番地族籍職業 何

權利者

何年何月何日何々裁判所ノ公示催告ニ因リ何某買受ケタル(田畑)地付金何百圓ノ債權ノ爲メ質權ヲ有ス此ノ質ハ何年何月何日村長ノ與書

割印ヲ受ケタルモノニ有之候此段御届候也

年月日 權利者 何 某印

欲スル前者ニ書付テ其請求及ヒ支拂拒證書作成ノ通知ヲ爲スコトヲ要ス其通知ハ所持人ニ在テハ拒證書ヲ作リタル日ノ翌日裏書譲渡人ニ在テハ通知書ヲ受取リタル日ノ翌日之ヲ爲ス可シ但裏書譲渡人ノ通知ハ其後者ノ爲メニモ効力アリ

第七百八十二條 前者ニ對シテ償還請求ヲ爲シタルモ此カ爲メニ其後者ハ償還義務ヲ免カレズ

第七百八十三條 拒證書作成ノ義務免除ノ權利及ヒ償還請求權ハ消滅セズ然レトモ此場合ニ於テ其免除ヲ爲シタル者ノ後者ニ在テハ其免除ヲ爲シタル者ニ對シテ

何々裁判所

判事 何 某段

除權判決ノ申立ヲ却下スル決定及ヒ除權判決ニ付シタル制限又ハ留保ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第七百七十條 申立人ノ申立ノ理由トシテ主張シタル權利ヲ爭フコトノ届出アリタルトキハ其事情ニ從ヒ届出テタル權利ニ付テノ裁判確定スルマテ公示催告手續ヲ中止シ又ハ除權判決ニ於テ届出テタル權利ヲ留保ス可シ

第七百七十一條 申立人ガ公示催告期日ニ出頭セサルトキハ其申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ此申立ハ公示催告期日ヨリ六個月ノ期間内ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

第七百七十二條 公示催告手續ヲ完結スル爲メ新期日ヲ定メタルトキハ其期日ノ公告ヲ爲スコトヲ要セス

本ヲ以テ爲替手形ノ送付ヲ爲スト同時ニ書面ニテ償還請求ノ通知ヲ爲スヲ以テ足レリトス

第七百八十一條 償還請求ハ支拂人カ爲替資金ヲ受取リタルトキ抗辯ノ爲メニ効力ヲ失フコト無シ然レトモ爲替資金ヲ供シタル義務アル者ニ對シテハ其者ガ爲替資金ヲ供セリトシテ抗辯ヲ爲スコトヲ得

第七百八十五條 償還請求ハ左ノ額ニ付キ之ヲ爲スコトヲ得

第一 爲替金額及ヒ満期ノ翌日ヨリ起算シタル年百分ノ利息

第二 拒證書ノ費用其他必要ナル立替金

第三 戻爲替ヲ振

第七百七十三條 裁判所ハ除權判決ノ重要ナル旨趣ヲ官報又ハ公報ニ掲載シテ公告ヲ爲スコトヲ得

第七百七十四條 除權判決ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

除權判決ニ對シテハ左ノ場合ニ於テ申立人ニ對スル訴ヲ以テ公告裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第一 法律ニ於テ公示催告手續ヲ許ス場合ニ非サルトキ

第二 公示催告ニ付テノ公告ヲ爲サス又ハ法律ニ定メタル方法ヲ以テ公告ヲ爲ササルトキ

第三 公示催告ノ期間ヲ遵守セサルトキ

第四 判決ヲ爲ス判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタルトキ

第五 請求又ハ權利ノ届出アリタルニ拘ハラズ判決ニ於テ其届出ヲ法律ニ從ヒ願ミサルトキ

出シタルトキハ其費用

第七百八十六條 償還義務者ハ爲替手形拒證書及ヒ受取證書ヲ記シタル償還計算ノ交付ヲ受ケルニ非レハ支拂ヲ爲ス義務ナシ

第七百八十七條 爲替義務者ハ償還金額ノ支拂ト引換ニテ受取證書ヲ記シタル爲替手形及ヒ支拂拒證書ノ交付ヲ所持人ニ求ムル權利アリ

第九款 拒證書作成

第七百八十八條 拒證書ハ裁判所ノ役員又ハ公證人之ヲ作ルモノトス若シ其地ニ此等ノ人ナキトキハ被拒者ニ於テ證人二人ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ但シ證人ハ

第六 第四百六十九條第一號乃至第五號ノ場合ニ於テ原狀回復ノ訴ヲ許ス條件ノ存スルトキ

第七百七十五條 不服申立ノ訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ此期間ハ原告カ除權判決ヲ知リタル日ヲ以テ始マル然レドモ前條第四號及ヒ第六號ニ掲ケタル不服申立ノ理由ノ一ニ基キ訴ヲ起シ且原告カ右ノ日ニ其理由ヲ知ラサリシ場合ニ於テハ其期間ハ不服ノ理由ノ原告ニ知レタル日ヲ以テ始マル

除權判決ノ言渡ノ日ヨリ起算シテ五午年ノ滿了後ハ此訴ヲ起スコトヲ得

第七百七十六條 裁判所ハ第二百二十條ノ條件ノ存セザルトキト雖モ數箇ノ公示催告ノ併合ヲ命スルコトヲ得

第七百七十七條 盜取ヲレ又ハ紛失若クハ滅失シタル手形其他商法ニ無効ト爲シ得ヘキコトヲ定メタル證書ノ無効宣言ノ爲ニ爲ス

成年ノ男子タルコトヲ要ス

第七百八十九條 拒證書ハ營業場ノ營業場若シ營業場ナキトキハ其住居ノ内若クハ傍ニ於テ之ヲ作ル可シ但シ拒者不在ナルトキ又ハ臨席ヲ肯セズ若クハ來入ヲ拒ムトキト雖モ亦同シ若シ已ムヲ得ザル場合アルトキハ裁判所又ハ公證人役場ニ於テ拒證書ヲ作ルコトヲ得

第七百九十條 拒者ノ營業場及ヒ住居ノ知レサル場合ニ於テ支拂地ノ官署ニ問合フ爲スモ尙ホ知ルコトヲ得ザルトキハ拒證書ハ其官署内ニ於テ之ヲ作ルコトヲ要ス

第七百九十一條 法律上定メタル場所ノ

公示催告手續ニ付テハ以下數條ノ特別規定ヲ適用ス

此規定ハ法律上公示催告手續ヲ許ス他ノ證書ニ付キ其法律中ニ特別規定ヲ設ケザル限リハ之ヲ適用ス

第七百七十八條 無記名證券又ハ裏書ヲ以テ移轉シ得ヘク且略式裏書ヲ付シタル證書ニ付テハ最終ノ所持人公示催告手續ヲ申立ツル權利アリ

此他ノ證書ニ付テハ證書ニ因リ權利ヲ主張シ得ヘキ者此申立ヲ爲ス權アリ

第七百七十九條 公示催告手續ハ證書ニ表示シタル履行地ノ裁判所

之ヲ管轄ス若シ證書ニ其履行地ヲ表示セザルトキハ發行人カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所之ヲ管轄シ其裁判所ナキトキ發行人カ發行ノ當時普通裁判籍ヲ有セシ地ノ裁判所之ヲ管轄ス

證書ヲ發行スル原因タル請求ヲ登記簿ニ記入シタルトキハ其物ノ

外ニ於テモ拒者ノ承
諾アルトキハ拒證書
ヲ作ルコトヲ得
第七百九十二條 一
般ノ休日ニハ拒證書
ヲ作ルコトヲ得ス然
レトモ通常ノ取引時
間外ニ於テ之ヲ作ル
ハ妨ナシ
第七百九十三條 拒
證書ニハ左ノ諸件ヲ
記載スルコトヲ要ス
第一 爲替手形ノ
全文但最後ノ裏書
ニ至ルマテ違漏ナ
ク記載ス可シ
第二 拒者ノ臨席
又ハ不在
第三 引受支拂又ハ
擔保ノ要求及ヒ拒
絶並ニ拒絶ノ理由
第四 右要求及ヒ
拒絶ノ口並ニ場所
第五 榮譽支拂アル
キハ其旨

所在地ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス
第七百八十條 申立人ハ申立ノ憑據トシテ左ノ手續ヲ爲ス可シ
第一 證書ノ原本ヲ差出シ又ハ證書ノ重要ナル旨趣及ヒ證書ヲ
十分ニ認知スルニ必要ナル諸件ヲ開示スルコト
第二 證書ノ盜難紛失滅失及ヒ公示催告手續ヲ申立ツルコトヲ
得ルノ理由タル事實ヲ疎明スルコト
第七百八十一條 公示催告中ニ公示催告期日マテ權利ヲ裁判所ニ
届出テ且其證書ヲ提出ス可キ旨ヲ證書ノ所持人ニ催告ス可シ又失
權トシテ證書ノ無効宣言ヲ爲ス可キ旨ヲ戒示ス可シ
第七百八十二條 公示催告ノ公告ハ裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官報
又ハ公報ニ掲載シ及ヒ新聞紙ニ三回掲載シテ之ヲ爲ス
公示催告裁判所ノ所在地ニ取引所アルトキハ取引所ニモ亦此公告
ヲ揭示ス可シ

第六 年月日、場
所及ヒ臨席總員ノ
署名、捺印
第七百九十四條 第
三條ノ場合ニ於テ
ハ拒者ノ承諾
若シ拒者カ署名捺印
スルコトヲ欲セス又
ハ署名、捺印スルコ
ト能ハサルトキハ其
旨ヲ證書ニ明記ス可
シ
第七百九十四條 第
七百九十一條乃至第
七百九十四條ノ規定
ハ引受又ハ支拂ノ爲
メニズル呈示、爲替
手形數通ノ要求其他
本章ノ規定ニ從ヒ或
人ノ方ニテ爲ス可キ
行爲ニモ之ヲ適用ス
第七百九十五條 第
七百九十條及ヒ第七
百九十一條ノ場合ニ
於テハ其情況ヲ拒證
書ニ明記シ且成ル可
ク詳細

第七百八十三條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催
告期日トノ間ニハ少ナクトモ六個月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス
第七百八十四條 除權判決ニ於テハ證書ヲ無効ナリト宣言ス可シ
除權判決ノ重要ナル旨趣ハ官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可シ
不服申立ノ訴ニ因リ判決ヲ以テ無効宣言ヲ取消シタルトキハ其判
決ノ確定後官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可シ
第七百八十五條 除權判決アリタルトキハ其申立人ハ證書ニ因リ義
務ヲ負擔スル者ニ對シテ證書ニ因レル權利ヲ主張スルコトヲ得
第八編 仲裁手續
第七百八十六條 一名又ハ數名ノ仲裁人ヲシテ争ノ判斷ヲ爲サシム
ル合意ハ當事者カ係争物ニ付キ和解ヲ爲ス權利アル場合ニ限り其
効力ヲ有ス
第七百八十七條 將來ノ争ニ關スル仲裁契約ハ一定ノ權利關係及ヒ